女鑑

明治二十四年八月創刊

口繪

- 德川公爵夫人と毛利公爵母堂
- 京都及び水戸高等女學校
- 越後五知海岸
- 上國上海公園音樂堂及び黃浦河の夜景

重要目次

第拾參年第貳號



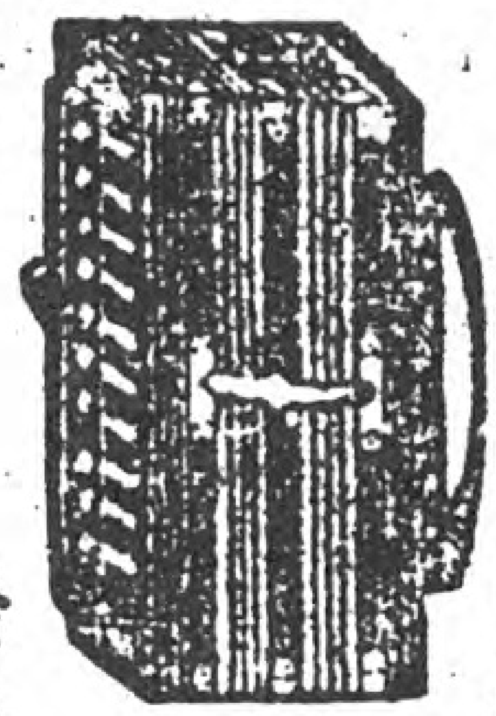
御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

無師獨奏 **紙腔琴**



大形上製 正價金拾五圓
大形中製 正價金九圓七拾五錢
小形上製 正價金五圓
右何れも譜箋五巻附屬
●外譜箋數百種あり

舶來手風琴 **蓄音器** 舶來銀笛





正價

三圓三圓廿錢
四圓四圓五拾
錢五圓六圓五
拾錢七圓五拾
錢八圓拾圓外各種

拾八圓廿五圓四拾五圓
六拾五圓八拾五圓百圓
貳百五拾圓五百圓
蠟管清元端歌長歌樂隊
義太夫流行俗曲種々
●無地大小蠟管あり●



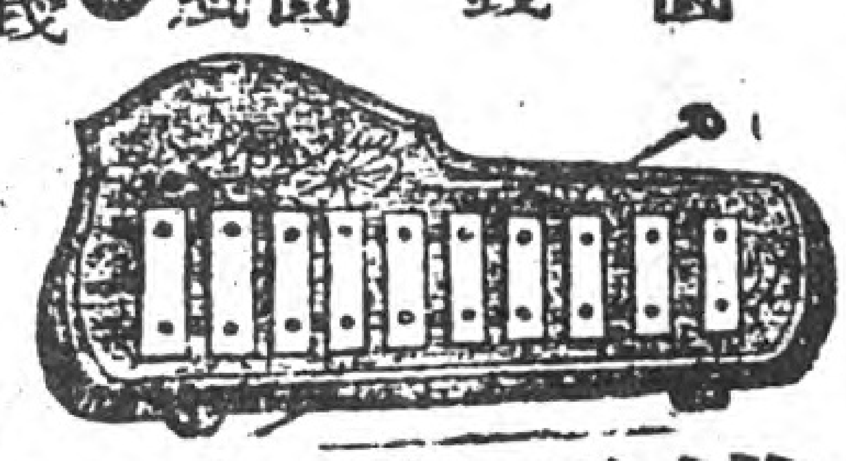
●三拾五錢七拾錢八拾錢九拾錢壹圓
壹圓廿錢壹圓卅錢壹圓五拾錢貳圓
音律正確
保險附き



西川製風琴特約販賣

一號 拾八圓
二號 貳拾圓
三號 貳拾七圓
四號 三拾三圓
五號 三拾七圓
六號 三拾七圓
七號 四拾三圓
八號 四拾八圓
九號 五拾五圓
十號 六拾五圓
十一號 七拾五圓
十二號 八拾五圓
十三號 百圓
十四號 百貳拾圓
十五號 百五拾圓

鐵心琴



並製十音 正價金五拾五錢
中製十五音 正價金七拾五錢
中製十三音 正價金壹圓
●右案內書付●

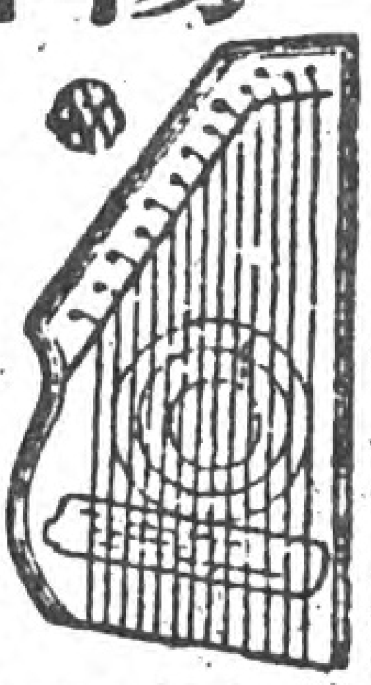
西洋横笛（ハモニカ）



正價

四拾錢五拾錢
七拾錢八拾錢
壹圓壹圓廿錢
壹圓五拾錢貳
圓貳圓五拾錢
●大小種々●

洋琴



●壹圓七拾錢◎貳圓
七拾錢◎四圓五拾錢
黑塗外箱 貳圓

舶來ピアノ
三百五拾圓ヨリ

◎**洋琴ヴァイオリン軍樂器音樂書類販賣店**

東京銀座三丁目貳番地 **十字屋** 電話新橋千二百五十九番

●高等師範學校 東京音樂學校 **田村虎藏編**

國民教育 **新撰唱歌** 全一冊 正價金三拾五錢 郵稅金四錢

見よ編者は我國兒童唱歌の改善に名ある田村先生其教材は修身的歷史的にして性情の陶冶に資すべきもの其程度は尋常三學年より高等科及中學に亘り收むる所の歌曲三十種悉く先生が東京高等師範學校附屬小學校兒童に實驗せる者なれば教育的空前の良書なり

●教科適用 **幼年唱歌** 全十冊 一冊金拾錢 郵稅貳錢
●新編 **中學唱歌集** 上中下 近刻 各金三拾錢 郵稅六錢
●**日本遊戲唱歌** 全六冊 一冊拾五錢 郵稅貳錢
●**學校唱歌** 全二冊 一冊拾五錢 郵稅貳錢
●**修身教典唱歌** 全二冊 一冊八錢 郵稅貳錢
●**新式唱歌** 全一冊 金三十五錢 郵稅四錢
●**大捷軍歌** 全七冊 一冊金四錢 郵稅貳錢
●**手風琴獨學び** 全二冊 一冊廿五錢 郵稅四錢
●**横笛獨學び** 全一冊 金貳拾錢 郵稅四錢

女鑑 第拾參年 第貳號 目次

口繪

德川公爵夫人
毛利公爵母堂
京都高等女學校
水戸高等女學校
直江津海岸の景
清國上海居留地公園內音樂堂

定價
- 一冊 金拾錢
- 六冊三ヶ月分 前金五拾七錢
- 十二冊半年分 前金〻圓拾錢
- 廿四冊一年分 前金貳圓拾錢

全國無遞送料

廣告料
- 五號活字廿三字詰一行 金參拾錢
- 半頁 金八圓
- 一頁 金拾貳圓
- 表紙一頁 金拾六圓

(色刷は特に御相談に應す)

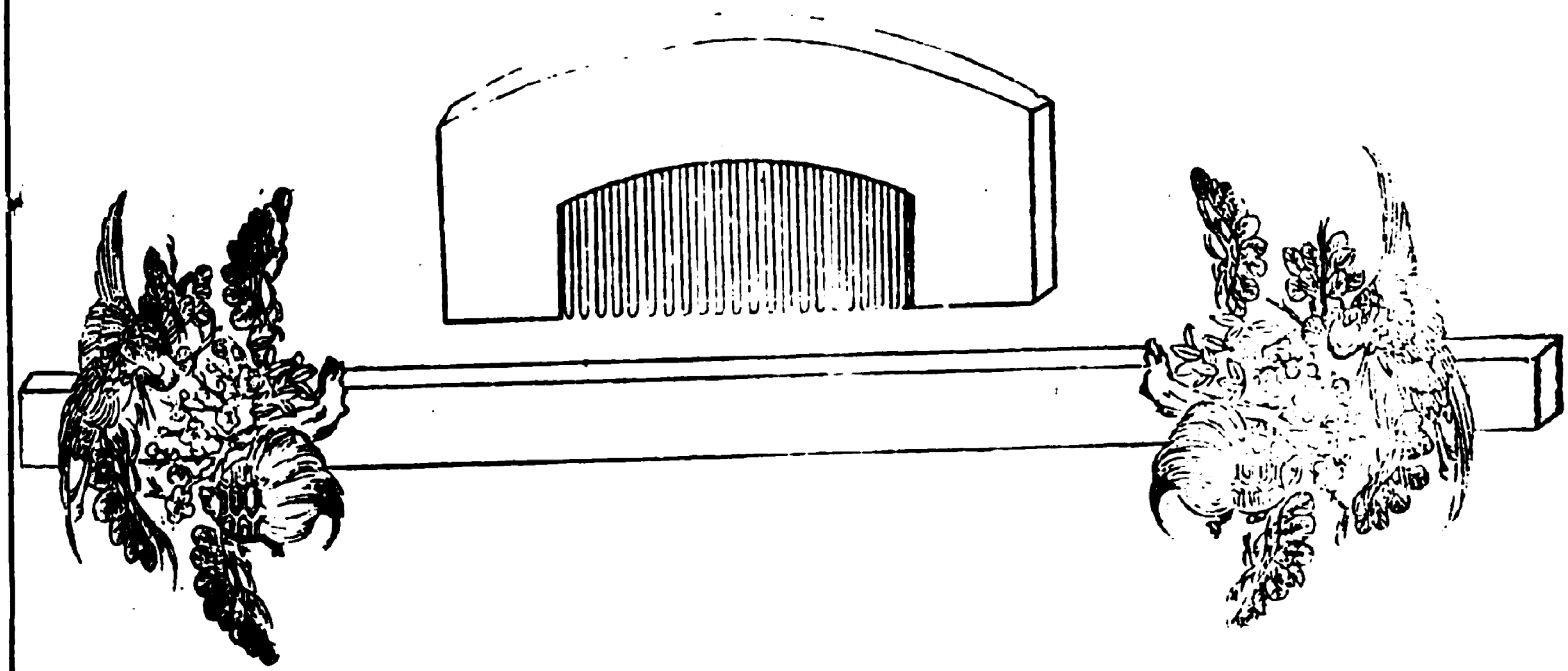
明治三十六年一月十九日印刷
明治三十六年一月二十日發行

編輯兼發行人 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 渡邊素一

印刷人 東京市京橋區南八丁堀一丁目十二番地 並木頁雄

發行所 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 株式會社國光社
(電話新橋二六九三番)
(電話 新橋 特八八番)

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候



御祝儀用櫛笄

上圖櫛笄の材料は鼈甲を以て随一となせど鼈甲の中にも品質の佳からざる物少からず此品は鼈甲中の最良質を精選して良き工の手に成りたる物なれば透明にして狂を生ぜず浮を出さず幾久しく御道具となる可き逸品なり

本鼈甲製	金三十圓	五十圓	七十五圓	一百圓	
一組之價	百五十圓	二百圓	二百五十圓以上		
四方張製	金八圓	十圓	十五圓	十八圓	二十圓
一組之價	金二十五圓	三十圓	三十五圓以上		

右の外御婦人装飾用品一式時々の流行に魁け新意匠の物品各種取揃へ居候間何卒御來車の上現品御高覧の榮を賜り度候市内は電話又は葉書にて御一報次第各種取揃へ貴覧に可供候地方より御注文の節は御用品詳細に御認め代金御送り被下候へば御注文に應じ多數の内より精選仕即日小包郵便にて御送り可申候尤も御都合に依り代金引換へ小包應用致し御便利御取扱可申上候交換日數は市内一週間地方は里程の遠近に不依三週間以内は代金又は他品と御交換可致候

東京市京橋區尾張町

白牡丹本店

店主　松田幸治郎

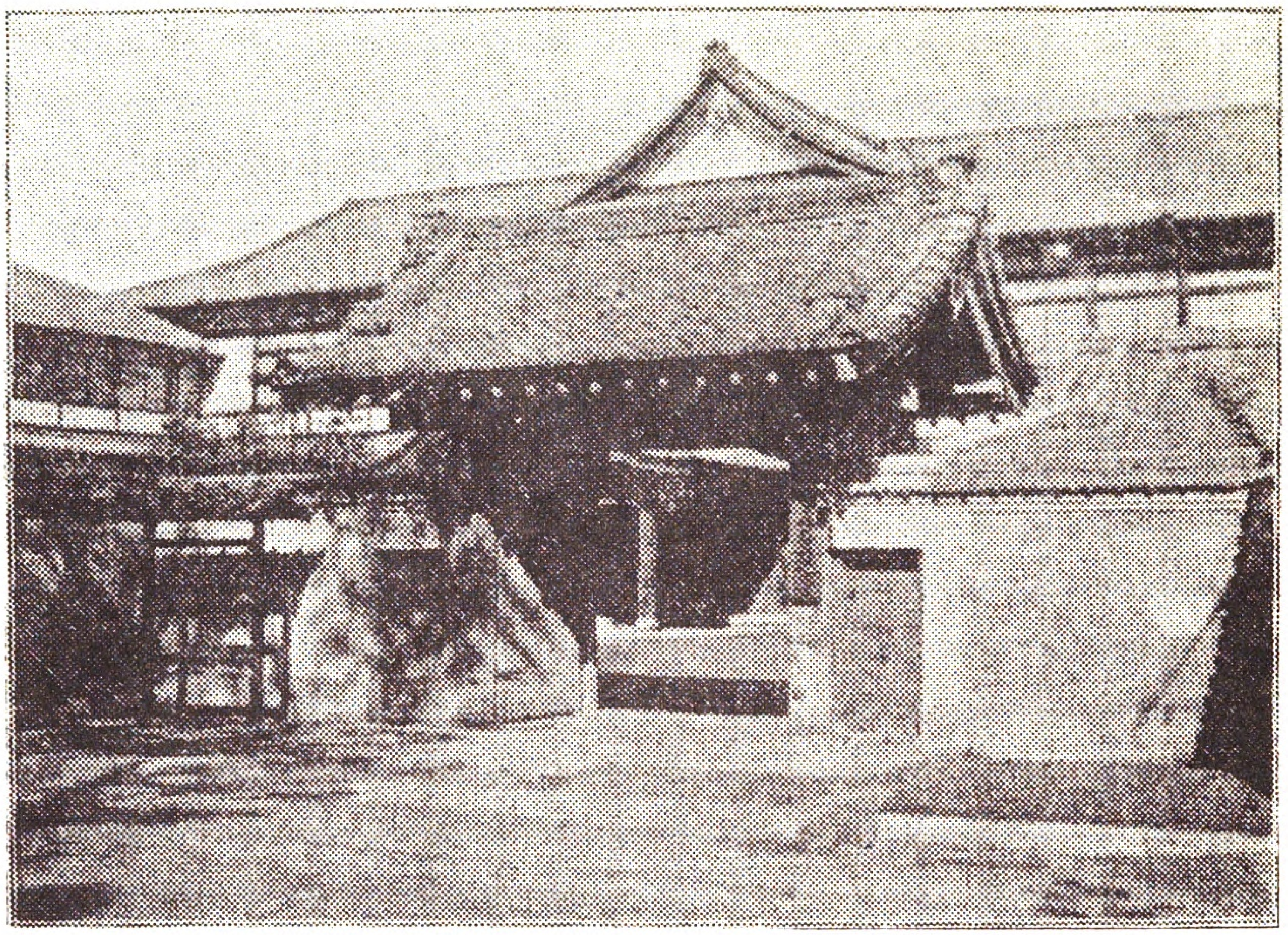
（特電話新橋五百五拾壹番）



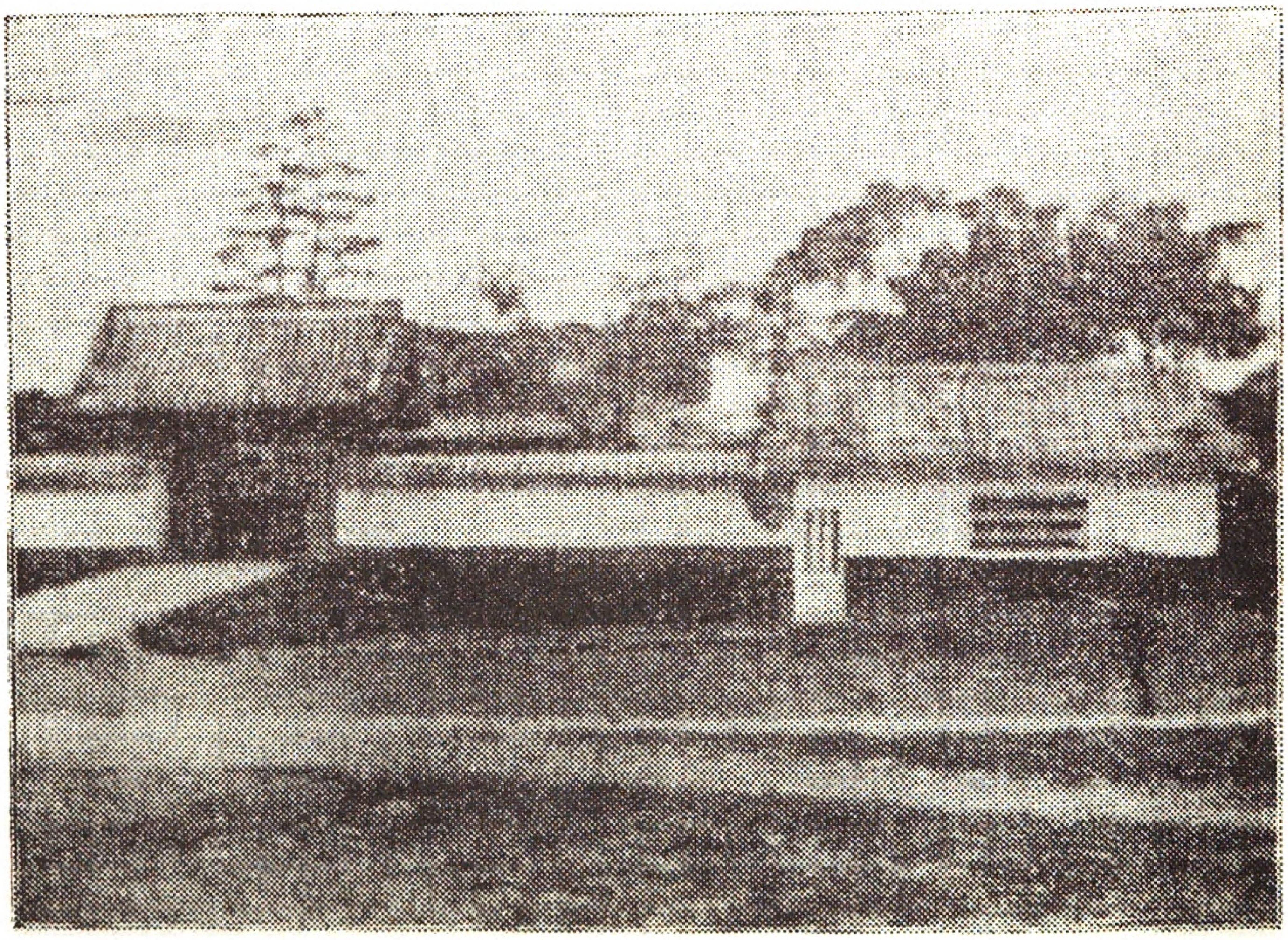
德川公爵夫人



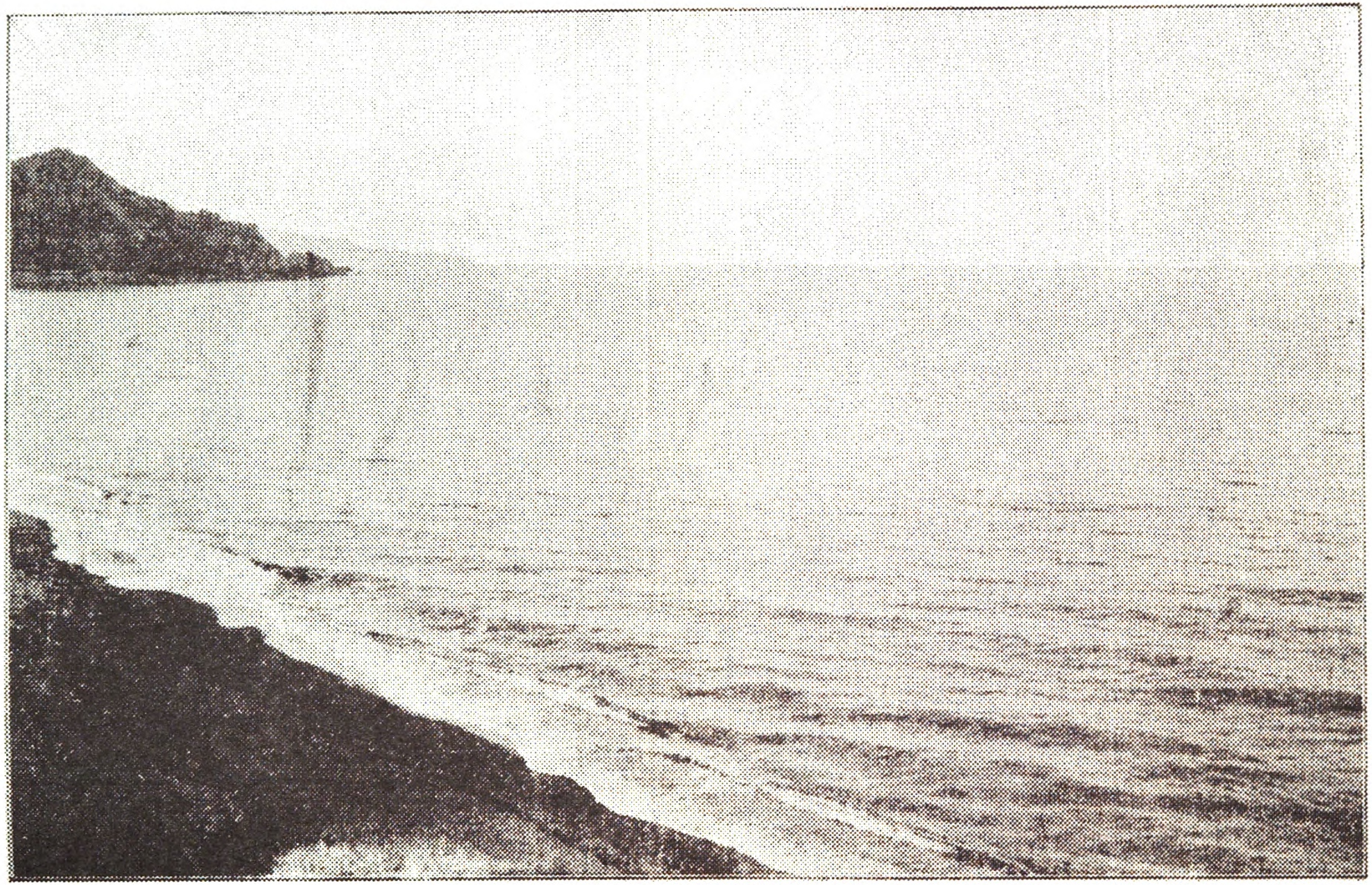
毛利公爵母堂



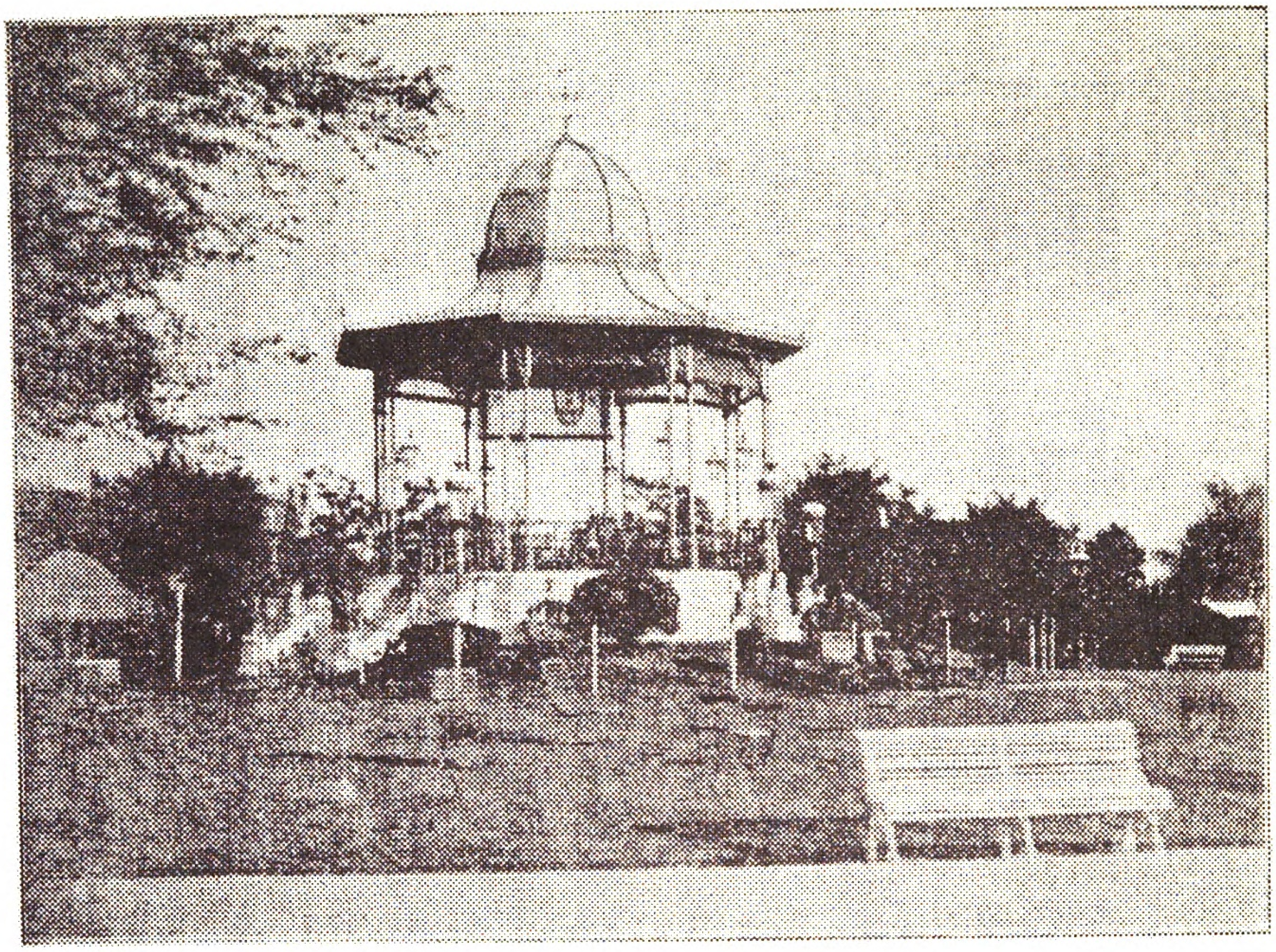
京都高等女學校



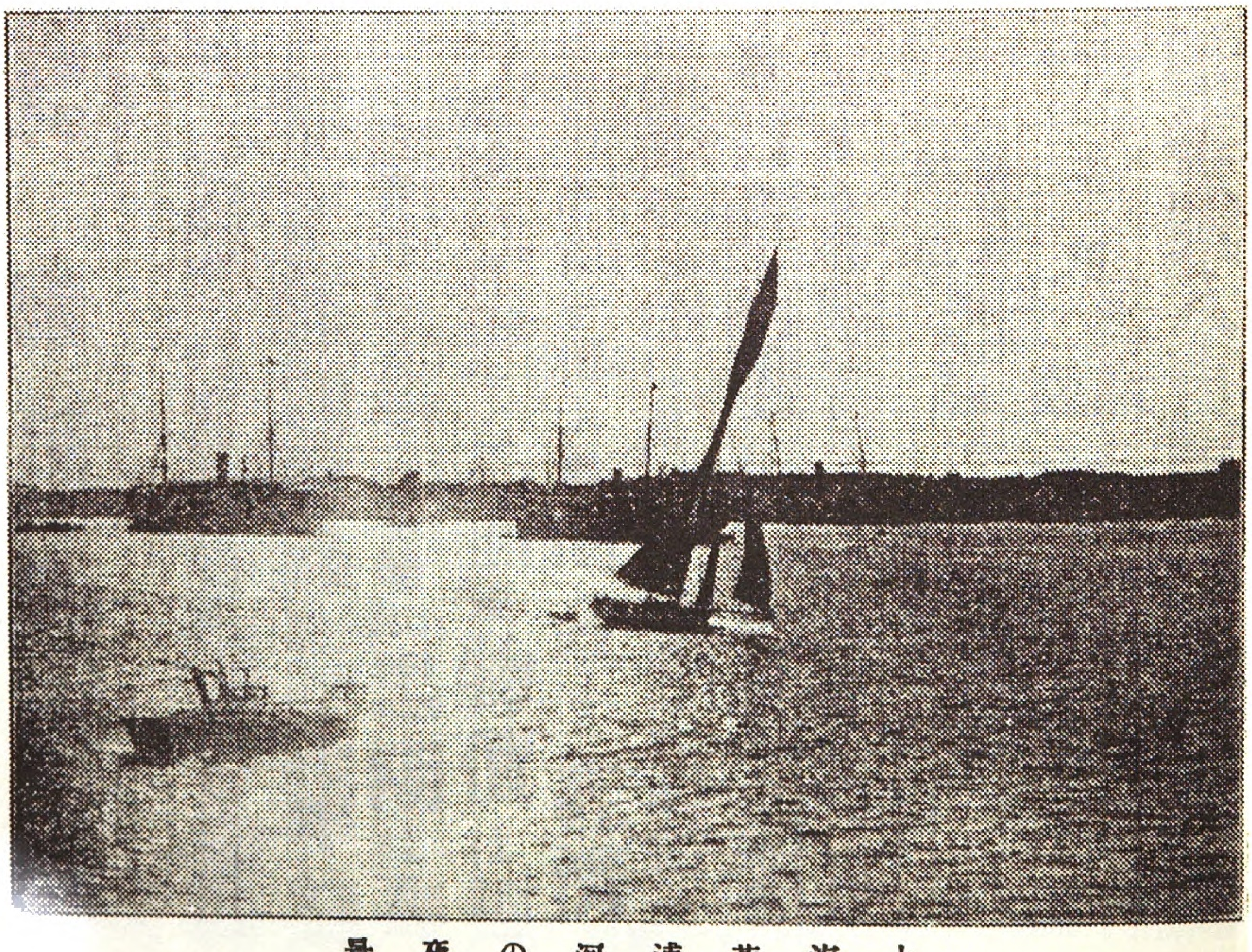
水戸高等女學校



越後五知海岸（直江津新潟間）



上海居留地公園音樂堂



上海黃浦河の夜景

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

明治二十三年二月創刊　本紙毎號八頁隔週附錄あり

國民新聞

定價	一枚二錢	一ヶ月三十五錢
	三ヶ月前	金壹圓
	六ヶ月前	金壹圓九十五錢
	一ヶ年前	金三圓八十五錢
廣告料	一行一回	三十五錢
	特別第一面	四十五錢
郵稅	一枚五厘	一ヶ月十三錢
		外國五十錢

●國民新聞は日本國民の思想と生活とを代表する機關にして、日本國民の一日も離る可らざる朋友也●**東京たより**●**日曜講壇**　共に國民新聞の特色也主筆の手になるもの、東京たよりは世界の新聞を一目に見、日曜講壇は、處世の教訓を示す●**政治**は不偏不黨●**外交**は其の眞相を傳ふ●**財政と經濟**　日本政府の棚卸しと經濟社會の燈明臺とは、本紙の自任する所也●**物價**は詳細にして漏さず●**教育**は本紙の本領にして教育界の大勢力也●小説**黑潮**は天下に評判高き蘆花生の筆にして一年に涉る大作也●**隔週附錄**政治、經濟、文學、社會の精粹要報毎月二回大版八頁●其他　家庭欄、詩歌俳句碁將棋より美術能狂言相撲演劇等娛樂の分子一も漏らす所なし

發行所　東京市京橋區日吉町四番地
電話新橋七〇（編輯用）新橋二八五〇（事務用）

國民新聞社

●女子學術講習會廣告

本會に於て普く一般女子に必要なる新智識を得せしむる目的を以て明治三十六年一月より左の要項に依り第四回女子學術講習會を開く志望の者は住所、族稱、氏名、生年月、を記したる願書を本會事務所に差出すべし

要項

一學科及講師

兒童心理　東京高等師範學校教授文學士　松本孝次郎君

女教員、保姆、母親、其他一般女子に於て兒童を育つるに是非共缺くべからざる心得を學問上よりわかり易く授く

料理法　日本女子大學校講師　赤堀峯吉君

仝　菊子君

日本料理及び簡易なる西洋料理を實地につきてわかり易く授く

一科外講演　華族女學校學監　下田歌子君

醫學博士　三嶋通良君

一講習料　金壹圓五拾錢

一會場　神田區一ツ橋通町東京高等師範學校附屬小學校講堂

一期限　明治三十六年一月十八日（日曜日）より毎日曜日午前第九時より三時間づゝ凡三ケ月にて結了

一證明狀　出席の度數を案して授與す（結了迄の分）

一申込期限　明治三十六年一月十二日限り

入會願書式　（用紙半紙）

入會願

現住所、族稱、職業

氏名

貴會女子學術講習會へ入會致度此段相願候也

右　氏名

明治三十六年　月　日

東京府教育會御中

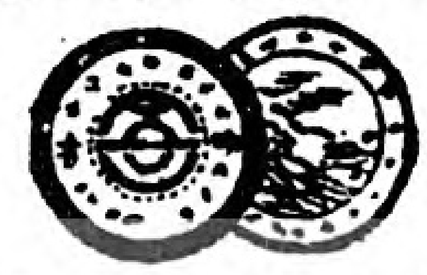
明治三十五年十二月

神田一ツ橋通町二十一番地

東京府教育會

登録商標

五二會品評會功勞銅牌



THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE
ヴワイオレット煉製
錫蓋附乳白硝子器入
壽美禮おしろい

●壽美禮おしろい●



ねり製 定價	大罎	二十錢
	小罎	十二錢
水製 定價	大罎	二十五錢
	中罎	十五錢
	小罎	十錢

ヴワイオレット水製
錫栓附乳白硝子壜入



すみれ白粉は　歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成踏體等を以て配劑しあるを以て皮膚を艶麗ならしめ芳香馥郁として長時間保續するの特性あり『壽美禮白粉は』常に用て御顏肌等の色を白く變せしめきめをこまやかに、にきび、そばかす、あせも等を生せす御肌へを淸々しく天然の色白きに至るべし『菫おしろい』は芳香馥郁と長く保つが故宴會祝席雜踏の場所に臨て諸々の惡臭を退け不淨を拂ひ心氣を淸爽快活ならしめ衞生上有益無比の逸品なり『壽美禮白粉』は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方今東京横濱に於て上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

●皮膚艶白劑壽美禮あらい粉●

綠、藍、紅彩蝶番ひボックス入三錢
罐詰　六錢五厘　袋入壹錢

●弊舗製造の壽美禮洗粉の義は方今歐米諸國に專ら賞賛する香料及弊店新製の原料を用ひて製せし物なれば朝夕此洗粉を御用ひ給へば漸々皮膚の色を白くし美くして艶を出しきめをこまかに常に御肌を淸々しくなし總而皮膚の患ひにかゝる事なし

●常に髮洗ひに用ひ給へば毛の拔る病を豫防し毛のくせを直し美くして艶を出し髮のねばりを取り油あかふけ等を生せす又絹綿布等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する性あり

●使用法は普通あらひ粉の半分にて能し水又は溫湯に溶し又はぬかに混せ入浴の際用ふるを良とす

登録商標
西洋色白くなるあらひ劑

SUMIRE.
WASHLNG IOWDER.

壽美禮あらい粉



製造本舖
東京東兩國
横網町一丁目

伊勢吉壽美禮堂謹製

販賣所は全國到る處小間物店化粧品店賣藥店其他各勸工場各劇場運動場に有り

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

◎九重の華に對する
全國新聞雜誌の評

◉教育實驗界　これは皇太子殿下同妃殿下の御性行御逸事等を輯め奉りたるものなり、將來國父母と仰ぎ奉るべき御方を知り奉らざるべからざるは勿論なるが、殊に皇太子殿下の英明なるは我が國民の夙に欽仰し奉るところにして本書よく之をしるし奉れり修身、教材參考書とし、又は學童賞品として恰當のものなるべし。

◉京都日の出新聞　我が皇太子殿下の御懿德と同妃殿下の御淑德の御事蹟を編し奉りたるもの大人讀くべく兒童亦讀んで以て皇德を仰ぐべきなり

◉新愛知　皇太子殿下御懿德高く在はします事は夙に國民の感佩し奉る處、本書は兩殿下御聰明の一斑を記述し奉り讀む者をして益々畏敬の念に堪へざらしむ表紙の美裝目も覺むるばかりにて小學校の賞品などには誠にふさわしかるべし

◉福岡日々新聞　東京教育社編輯所の著はす所東宮殿下の御懿德同妃殿下の御淑德を敍したるものにして之れを少年に讀ましめば以て忠君愛國の念を發揮せしむるに足るべく花晨月夕家庭好箇の讀本たるべし

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

宮中御歌所寄人中邨秋香著
華族女學校講師小野鷲堂書

新編書簡文例

最新刊廣告

新編書簡法文例

書簡の文體は直に其人の品位を上下するに足るべく其人の知識を推測し得べきものなり斯の如く交際上貴重のものなれば一日も苟もすべからざるは論を待たず本書の文例は現代の文豪中邨先生の腦漿より迸出せしもの一言一句津々たる趣味あり擬古に陥らず流俗に同ぜず繁簡宜しきを得眞に今日書簡文の好模範たり書は筆硯界の巨擘鷲堂先生の手腕に成りし者習字の龜鑑として上乘の書也曩に新篇女子書簡文例發刊以來一年有半の短日月に拘らず女子大學校始各女學校の參考書或は教科書に採用され累數の世評を得たるは茲に贅せず今新に男女用の文例を發賣す世の文筆に志ある士は座右に一本を供せられんことを

木版半紙摺
高尚優美本
男女各一冊
定價六十錢

中邨秋香著　訂正三版

文鑑 千草の錦

和装優美本
金三十五錢
郵税六錢

本書は男女學生の模範となるべき（美文）（記事）（紀行）（論説）（消息）（物語體）等無慮數百編を撰出せられ特に上段に要語數千を載せり作習の模範と應用に供せられしは他に其比を見ざる國文學研究の好資料也

中邨秋香著　訂正再版

新編 書簡文法式

金字入無二の美本◎定價五十錢
郵税六錢
總クロース金字入無二の美本定價六十錢
郵税六錢

新編 女子書簡文法式

書簡文の法式男女に別ちて大成せる者は、古來未だ曾て有らず、苟人に禮儀の缺くべからざるが如く苟も人に禮儀の書簡法式なからんか其人如何に貴と雖又如何に富めりと雖、一日も交際場裡に立つこと能はざるべし

御歌所寄人中邨秋香先生深くこゝに感ぜられ、今日の現狀に依り舊新を對照して以て時の宜に從ひ適當の式を設けられしものにして新篇書簡文例と相待て完璧と稱すべきものなり

久津見蕨村著　訂正增補五版

家庭教育 子供のしつけ

洋装頗美本
定價廿五錢
郵税四錢

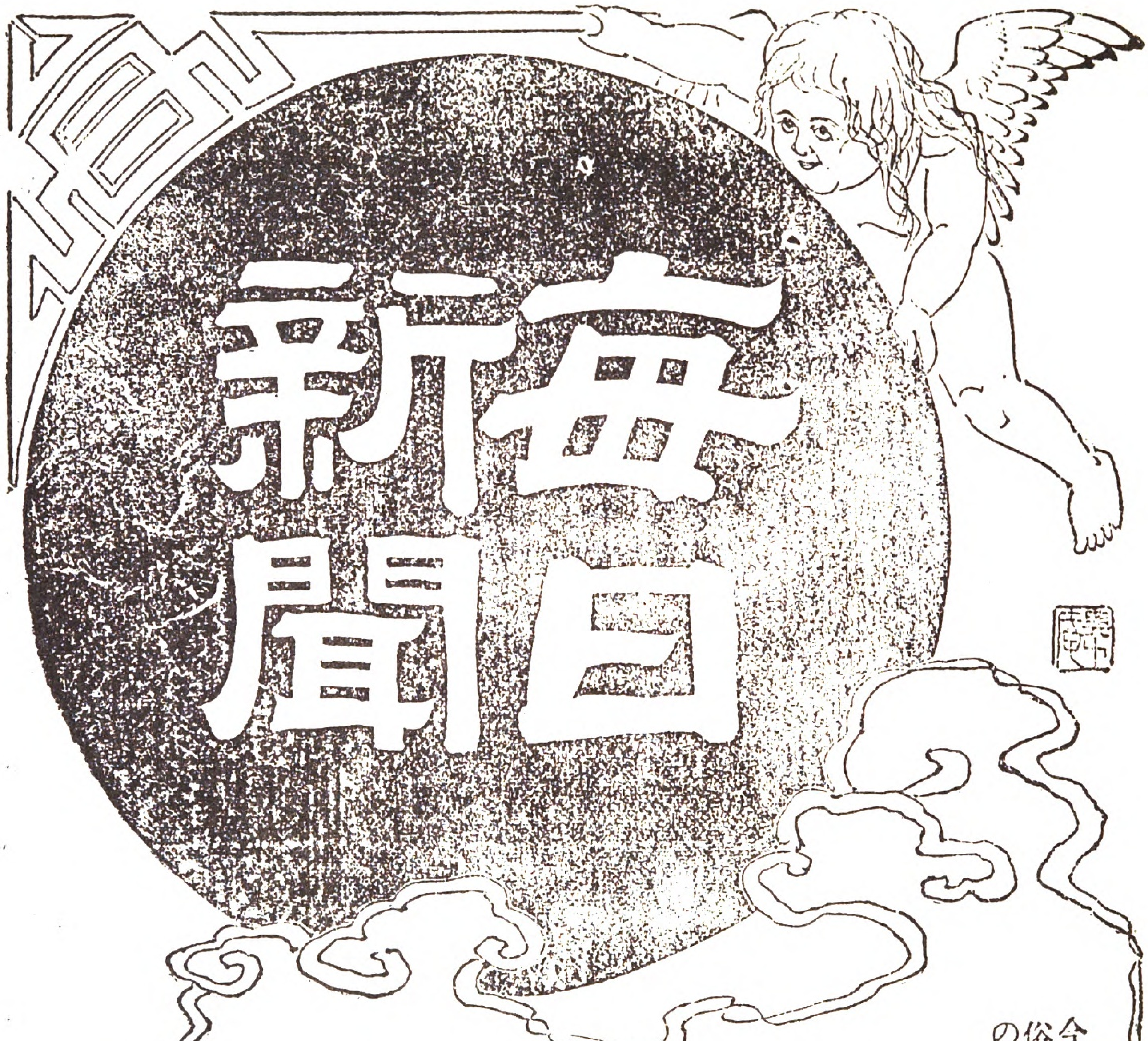
家庭教育不完全の聲漸く世に喧しく世上是が適切なる參考書を要求すること頗る急にして其之を缺くがために子が教育上大なる不便を感じつゝあるは識者の常に遺憾となせる處なり

本書は著者が該博の識と多年の實驗に依り幼稚、兒童、少年、青年、時代の四段階に至る家庭教育の仕方を言文一致にて十三章百六十餘條に説き示されたる者なれば婦女子にても容易に理解せられ直に實際に試むることを得べきやう記述したる近來稀に見るの好著述なり

●●初版再版三版四版賣盡し增訂五版發行す日本の父母兄姉は座右に一本を備へられん事を

發兌元　東京日本橋箔屋町十六　前川文榮閣

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候



今の業に鉛槧に從ふの徒曲學阿世滔々俗を爲し。眞に社會の耳目たる者。晨星の寥々たるが如き時に當り。屹として此濁流の外に立ち。三十二年一日の如く。弱者の屈を伸べ。強者の驕傲を懲し。正義の爲めには。敢て少數者の犧牲たる事を辭せざるもの。是れ我毎日新聞の本領なり。若し夫れ犀利の論鋒を喜び、俠硬の詞章を娛まんと欲する者は讀め！高尚の趣味を味ひ。多大の實利を收めんと欲する者は讀め！庶幾くは汝の善友たらん。

本紙定價

一葉	金一錢五厘
一ヶ月前	金三十五錢
三ヶ月前	金一圓五錢
六ヶ月前	金二圓十錢

外地方郵便税一ヶ月金十五錢但三ヶ月以上前金拂込の向に限り特に一ヶ月郵税金五錢に割引すべし即ち三ヶ月前金郵税共金一圓二十錢の事

廣告料

第一面特別廣告	一行金五十錢
一回以上	一行金卅五錢
三回以上	一行金卅三錢
五回以上	一行金三十錢

東京市京橋區尾張町新地七

毎日新聞社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

新奇發明 **増酒資料**（さけふやすもと）

壹斗の清酒は即座に倍増し（即ち貳斗）となる大金儲的釀造化學作用の一大發明新法なり

（附錄）腐敗酒直し法、醬油參倍増法、味淋酒速造法、酢速造法新酒を古酒に變ずる法、香竄葡萄酒速造法、燒酎倍増法等以上の釀造家及び諸營業者い大有益案内……

右今回披露の爲拾萬部限り

無代進呈

す酒造家及前記載の營業者にして望の方は郵分四錢相添申込次第直に送呈す速に見よ營業上一日々缺くべからざる確實

大有益

の秘訣なり是ッ非早く利用せよ驚くべき大金儲わることを確證す（注意）本館の隆盛を羨み近時當館廣告に擬せて怪しき無効の僞法を傳ふる奸者總はれたり有志者深く注意して僞傳者に欺かるゝこと勿れ……（當館は去廿壹年の創立也）

發明元祖 **日本授産館** 東京市神田五軒町拾九番地

肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黒き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體

純白色に變化

し艶美の容貌となるを確發す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は八拾錢特別製分壹圓四拾錢

專賣元 **日新館藥房** 東京市神田五軒町拾九番地

[illegible]月やく

忽ち下る確證新藥

本劑（調經丸）は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止みずする特効わり本劑參劑分

必ず忽ち快通流下

を用れは二三ケ月滯りたる月經にてもキレイに流下す又特別製分を用れは半年以上の月經閉止にても必ず立處ろに流下し且つ

惡血毒血

を一掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて峻烈顯著なるに付き

妊婦

の服用を嚴禁すもし妊婦服藥せば

即座に流產

するを以てなり尤も本劑は何人服用するも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥われ價は壹劑分六拾錢貳劑分壹圓拾錢參劑分壹圓六拾錢特別製分貳圓貳拾錢（注意）本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効の類似僞藥販はる用藥者は深く注意わりて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求わられんことを乞ふ

わきが（腋臭症）

根治確證 新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても

誓て根治

し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦悩を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢若金即刻送藥す郵分代用必ず二割増の事

以上貳藥 專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**（電話本局二五四六番）

女鑑

第拾參年第貳號



女子職業論（上）

婦人はたゞ内を守りて、子女の鞠育と、衣食の世話をするのみを以て、足れりとすべきや。夫をして内顧の患なからしむれば、それにて其勤めを了りたりと云ふを得べきか。縦ひ其家にして富有なるも、有爲轉變の世の中は、今日の富者、必ずしも明日の貧困者たらざるを保する能はざる也。又縦ひ、其夫をして賢ならしむるも、人事無常、豈又疾病艱難のことあるを必すべけむや。況んや嫁すべきの家の貧富と、配すべき夫の賢否とは、豫め睹るべからざるものあるに於てをや。

遂に天下父母の心をして、男を生むを重んぜずして、女を生むを重んぜしむといふもの、啻に楊太眞

が六宮の粉黛をして顔色なからしめ、三千の寵愛を一身に集めて、爲に一門九族盡く光彩を發したる當時のみをいはんや。娘の容色を利用して、左團扇に樂隱居の榮華に有附かむとするは、今の都會下層に於ける多くの父母の心なり。而して此心や、その子女をして、學問藝術を修めしめずして、卑猥なる音樂、俗謡の末技を習ふに至らしむ。

人生婦人の身と爲る勿れ、百年の苦樂他人に據るとは、美人薄命を歎じたるものなるべし。色衰え寵亡びて、榮枯盛衰地を易ゆるに及びては、誰れか又此の歎なきを得んや。身に一の藝能なく、職業なくして、徒に他性の歡を買ひて以て、一生の計とせる女子の身上こそ果敢なけれ。

左れば女を生むを重んずる父母の心にも、その子女の前途に思ひ到りなば、寧んぞ末路の寂涼を感ぜざらんや、槿花一朝の榮を貪りて、人間終生の計を忘るゝの結果は、終に其の可愛の子女をして、不測の不幸に陷ゐらしめ、薄命の涙に袖を絞らしめ、生れて婦人の身となりしを悔いしむるに至りて已む。ア、是れ最も睹易きの理ならずや。而かも昔も今も、恐らくは後の世までも、かゝる不心得ある父母と、不幸の運命を有する子女とを出だすもの多く、且多かるべきは、何故なるか。他なし、たゞ職業の重んずべきを知らざるに因るのみ。

婦人は弱し、されど弱きが故に必ず他性に賴りて以て、強きを求めざるべからずとの謂れはあらず。

それたゞ斯る謂れなきが故に、立派に獨立の生活を爲して以て、此世を送り得るものもあるにあらずや、此種の婦人の間には、往々世の謂ゆる女傑なるものさへありて、五尺の鬚眉男子を頤の先きに驅使して、自由自在に立働らかしむるものもあり。或は夫唱婦和の境遇にありてすら、柔能く剛を制して、一家内を切り廻はし、亭主をして、後に瞠若たらしめ、嚊天下の名を町内に輝かすものもあるなり。女性たるの故を以て、自存自活する能はずとするは、自暴自棄の甚しきものといふべし。

近時女子教育のやうやく盛んなるに及び、中流以上の家に生れたる女子は普通教育より進みて、高等の教育を受くるもの頗る多きに至りたるは、洵に悦ぶべしと雖も、現時女子の學風は、多くは文學及び挿花抹茶など優美なる風流の技藝に止まりて、裁縫、料理等を除きては、自活に必要なる職業的學科を授くるものは甚だ稀なるが如し。此を以て學校を卒業したる女子の中には、能く外國語を操り、みやびなる文章を作るもの少なからずと雖も、一家は愚か、當人一個の生活を資くべき業務を取り得るものは、殆んど曉天の星よりも少なし、されば父母が其の子女を學校に入らしむるは、必ずしも學問を修めしめむが爲のみにあらず、必ずしも技藝を習はしめむが爲のみにあらず。必ずしも之に依りて子女一生の計を爲さむが爲めのみにもあらずして、學校卒業の名を藉りて、その子女を良家に嫁入らせんが爲めなり、良き聟を迎えんが爲めなりといふも、恐らくは辨解に苦しまざるを得ざるべし。父母既に此心

ある以上は、娘盛りなる其の子女の心も亦測り知るべきのみ。位置あり、金ある適ばれの若紳士の妻君となりて、世に誇り、朋輩に羨まるゝを以て、其の大々的目的とせざらむや。而も位置と金力とは、往々にして頼むに足らざること前陳するところの如し。一旦にして兩なから之を亡ふが如きことあらば、乃ち共に不幸の境遇に陷ゐりて、空しく昨日の榮華を哀まざるを得ざるべし。斯の得くんば其の一生の運命を他の掌中に委するものにあらずや。百年の苦樂を擧けて、他人に依頼するものにあらずや。予輩をして淡白に云はしめば、其心に高下の別こそあれ、其行に優劣の差こそあれ、其趣は恰も下廚社會の婦女が、眉を措き唇に紅して、其容を作り、其顏を麗ならしめて、偏へに好き旦那を搜がさんとするものと、未だ必しも區別あらず。而して其の父母たる者の心事もまた左團扇の樂隱居たらむとする者と相距る決して遠しといふべからず。

是に於て乎、獨立自營の計を爲すものは勿論、婦女本來の道に順ふて、他家に嫁せんとするものと雖も、倘一の職業を擇びて、一家經營の資となすの覺悟あるを要するは自明の理ならずや。一の職業を覺え居れる妻女が、朝夕の家事を執れる傍らに、その職業によりて、幾分の小金にても得て、家計の補ひと爲すか、又は補ふにも及ばざる程の身上なれは、之を以て育兒、救貧など慈善事業の施しとなさんには、誰れか見て以て感賞せざらむや。而して本人の心もまた徒に養ひを夫に受けて、其日を送るに比

して、甚だ快然たるを感ずべき也。斯の如くにして、日に怠るところなくば、塵も積つて丘となるの時あるのみならず。家に不慮の災害あり、夫に不幸のことある時と雖も、兒女をして饑寒に叫ばしむるの憂なく、徐々に再興の謀を廻らして、夫の不幸を救ひて、世に立たしめ、復び幸福なる境涯に返らしむることを得るなり。これをこそ眞の婦女の道といふべきなれ、其家盛んなる時には、外に出でゝ物見遊山を事とし、内に居りてはクダラヌ小説や、琴三味線花牌などの遊戯に其日を送り、一旦家道衰ゆるに及びては、その最愛の夫と兒とを併せて共に流離落魄の域に陷ゐり、奈何ともすべからざるが如きは、寧ろ不埒至極の事といふべし。女大學時代の昔ならばイザ知らず。開明の今日苟くも男女同權論といふものさへ行はるゝ今の時に當り、男子と同じく學業を修め、藝術を勵める女子にして、此の心掛けなからむには、其日暮しの貧乏なる無識の妻が夫を助けて、共に家計を立つるものにも劣りたりといふも、過言にはあらずと信ずるなり。

故に中流以下の婦女は、獨立の生活を營まんとするものと、一家の妻として、家事の經營に當らんとするものとを問はず、一の技藝を身に覺えて、他日の計となすの必要あるは、以上畧ば陳述し了りたりと信ず。進んで女子職業の種別等を畧陳して、女子教育當局者及び女生の參考に供せん。(青眼子)



婚姻論（第貳百六拾六號のつゞき）

法學士　天野弘一

即ち曰く
數多の學者は祖先敎の起源を以て靈魂の恐怖といふことに歸して居る。即ち吾々が祖先を祀る所以のものは畢竟祖先の靈を恐るゝが爲めであつて、之に種々なる供物を捧ぐるは、以て其靈をなだむるが爲めであると說明致して居ります。然しながら私は此學說に服することは出來ませぬ。否私は寧ろ之と正反對なる意見を有して居るのである。抑祖先敎の起源は、多く學者のいふが如く祖先を恐るゝが爲めに非ずして、寧ろ祖先を愛するの餘り、其靈を祀り、之に種々なる供物を捧ぐるによるのである。如何に古代の人民と雖、父母の生存せる時は之を愛し死したる後は之を恐るゝの理はないであらう。朱熹は家禮に於て、祖先敎の起源を能く一言にして盡して曰く、凡祭主於盡愛敬之誠而已と、而して吾國に於ては、故栗田文學博士（祭典私攷）細川潤次郎氏（祝祭日講話）皆之と同樣なる說明を與へられて居る。

凡そ靈魂は之を二種に區別して恐怖す可きものと、敬愛す可きものとに爲さねばならぬ。敵及び非業の最後を遂げたる者の靈魂は恐る可く、

從て之に捧ぐる供物は、全く其靈をなだむるの目的を以てするのである。之に反して祖先の靈は、所謂愛す可き靈魂の中に屬し、從て之に對して爲す所の祭祀供物は、一に全く子孫たる者の愛と敬とに基くものである。孔子中庸に論して曰く、事レ死如レ事レ生。事レ亡如レ事レ存孝之至也と。試に見よ、吾人が祖先の墓に詣で之に香花を手向け供物を供へ、滿腔の敬愛を捧げて、禮拜を爲すの時に當て焉んぞ恐怖などいふが如き觀念の出づ可きものであるか。之を要するに祖先を祀るの風敎は、一に祖先を敬愛するの觀念に基いて居るのである。

と博士は實に此の如き趣旨を述べられて居るのであります。

扨て此の如く祖先を祀るといふことは、獨り吾邦ばかりではなく、希臘に於ても羅馬に於ても、將た印度に於ても、等しく行はれたることであります。而して此祖先敎の觀念が實に家といふことと、密接なる關係を有して居るのであります。今其關係を說明するに先立ちて、一寸玆に御話して置きたいことがある。

皆さん西洋に於ては、家といふものは御座りませぬ。斯くいはゞ或は疑はん、然らば彼國人は何を以てか雨露を凌ぐと、答へて曰く、吾輩の玆に所謂家なるものはハウス即ち屋舍建造物をいふのではない。又曰はん西洋人と雖、父母あり、兄弟あり夫婦あり、而して同じストーヴの下に團欒して、一のホームを形作つて居るではないかと、答へて曰く、夫れ然り然しながら吾輩の玆に所謂家なるものは、單に此の如き眷族同居の狀態を指していふのではない。詳しくいへば、家とは所謂ホームに加ふるに、其ホームを支配する家長なるもの丶

存在を認むるのであつて、即ち家長と家族（若くは家父と家子）との關係を生ずるとのことにいふのである。此の如き制度を名けて、家族制度といふ。古に在つては西洋諸國概ね皆此制度が行はれたのであるが、今や彼國に在ては此制度絶えて無きに至つたのであります。從て家とか戸主とか家督相續などいふ語は、彼國の人々には耳新しく聞ゆるのであります。獨り吾邦に於ては此制度今猶は存し畢竟家は吾邦の特有となるに至つたのであります。語を換へていへば、西洋諸國に在つては、家族制度變じて親族制度となり、吾邦に於ては今や恰も其過渡の時代に屬して居るのである。或は疑はん、西洋に於ても一のホームを形作る以上は、何人か之を支配するものなくして可ならむやと、それ然り、西洋に於ても人倫道義の觀念あり、否吾邦に比して、はるかに優て居る、即ち親は親として子を養ひ、子は子として親に事へ、夫は夫として妻を扶け、妻は妻として夫にかしづき、以て一のホームを形作つて居るのであつて、それ以外に一家を支配すべき家長なるもの、存在を必要としないのである。猶少しく法律的に説明すれば父母は子に對して親權を有し、其敎育監護の事を掌り、必要に應じては之を懲戒し、夫は妻に對して夫權を有し或る重要なる事項に就ては、妻は一々夫の許可を得て、而して後に之を爲す事を要し、以て一家の平和と秩序とを保つて居るのである。之に反して、吾邦に於ては西洋に所謂ホームの外に、猶ほ特種の制度を認め、戸主と稱する一家の主宰者があつて、其下に在る家族に對して、所謂戸主權なるものを行使して居る。戸主權とは何ぞ、例へば家族の居所を指定し、其婚姻、養子縁組等に同意を與ふるが如き權利を謂ふ。即ち父

は父として子に對して親權を行使するの外、猶ほ戸主たる資格に於て之に對して、戸主權を行ふ。甚だしきに至ては父たる者が、五つ六つの子供の戸主權に服する場合がある。即ち父が隱居をして未成年なる子が、家督相續をすれば、則ち其子は戸主になるから、前のやうな關係を生ずるのである。さうかと思へば成年の男子たるものが、女子の戸主權に服する場合がある。即ち女戸主の入夫となればさういふわけになる。之を要するに、西洋に於ては親と子との關係、夫と妻との關係といふが如く、親族關係が基礎となつて、ホームを維持して居るのであるが、日本に於ては親子夫婦といふが如き關係の外に、猶ほ戸主と家族との關係あるものがあつて、寧ろ之に依て一家を維持して居るのである。夫れ故に吾輩は前段に於て西洋に於ては、親族制度が發達して居るのであるが、吾邦に於ては、まだ家族制度と、親族制度との混合時代である。と申したのであり升。

以上はほんの枝葉の議論で、たゞ説明の便宜の爲めに西洋の制度を比較して御話したのでありますが、扨て肝心なる祖先教と家族制度との關係は、これから御話することであり升、日本の民法第七百四十六條には「戸主及ヒ家族ハ其家ノ氏ヲ稱ス」と規定してあり升。此規定は實に能く兩者の關係を明瞭ならしむるものであり升から、一應簡單に氏といふことに就て説明いたしたいと考へます。

氏(ウジ)といふことの語源に就ては、種々なる學説が御座ります。或は曰く氏は内(ウチ)なりで、血族といふことであると、或は曰く氏は生血(ウミチ)といふことにて、同じ血すぢを引いて居る者をいふと、或は曰く氏は出(イヅ)より轉化したるもので、同じ血統より出づるものをいふと。此

の如く種々なる學說がありまして、何れが正しきかを判ずることは出來ませぬが、何れにしても氏といふことは、血統といふ意味を離れて居らぬのでありまして、氏は即ち血統團體の稱であつたに相違ありませぬ。血統團體に大小があるに從て、大氏小氏の稱があります。氏には氏の上なるものがありまして、氏を主宰して居ります。而して其支配を受くるものを氏子といふ。八幡樣の氏子とか明神樣の氏子とかいふ時の氏子といふ語と同じ語であり升。之は其筈主に密接の關係があるのであり升。然し餘り長くなりますから、其說明は省きます。斯くて氏の上は氏子を支配し、一朝事ある時は之を率ゐて、戰場に赴き、事なきの日は內に在て祖先の祭祀を司るのである。而して祖先の祭祀は、一に其氏の上に依てのみせらるゝのであつて、又祖先の靈は他族の者は勿論其氏に在つても、家長の祭にあらざれば、之を受けないのである。論語に非二其鬼一祭レ之諂也とありますが、諂どころではない容易ならぬ大罪であつたのであり升。されば祖先の祭祀を繼續せむと欲せば、宜しく先づ之を奉ずるのあとつぎを存續せしめなくてはなりませぬ。あとつぎがなくあれば、則ち祖先の祭祀は斷絶するのであり升。其あとつぎは則ち氏の上である。今の言葉でいへば、則ち戶主である。現に吾民法第九百八十七條には、「系譜祭具及び墳墓の所有權は家督相續の特權に屬す」と規定せられて居る。若し家督相續人なきときは、家は廢絶するのであり升。同時に祖先の祭祀は斷絶するのである。此の如く祖先敎と家督相續とは密接の關係を有し。從て家といふことも密接の關係を有して居るのであり升。それであるから、祖先敎の觀念の盛なるときは、家の制度重きを爲し、祖

先敎の觀念うすらぐ時は家の制度も、亦從て衰へるのであり升。

（未完）

國語集書の改正を望む

出雲 中尾菊子

古今著聞集今昔物語は國語の集書なり、此外にも種々ありぬれども、主として出家沙門戀無常抔を記して世敎に益する者尠なし。都て國語の古書は言葉遣ひ上品なれども、淫亂放蕩の事を憚かしけもなく書き連ねたる節多きは、實に識者の憚る所なり、徒然草發心集も亦此類なり、善き者は飽く迄も保守すべきも善からざる者は速に脫體換骨して、一體を爲すに如かずと思はる、迚も古書の儘にて支那聖賢君子の著述若くは西洋巧利の著書と頡頏すべくもあらず。古今著聞集今昔物語は世間語を何吳となく書き集めたる者なり、支那の世說蒙求の如きにや、文辭麗くして主意雅俗混淆せり、此等の事は己れ偏屈かも知らざれども、支那の左丘明の著はせる國語抔の體に倣ひ、嘉行善言を集むるか左なくば目錄を正くし、正義有益の事のみを書きて、無用淫蕩の事は省くに如かざるなり、集むる所は道德敎訓か歷史材料か亦は經世遺跡抔に過ぎざるべし。史學は今日餘程發達しぬれば其體もあるべし、道德經世は東久世伯金子男の著書先當を得るにやと思ふなり、金子男は敎訓書面白く東久世伯は古人の嘉行善言を記し玉ふ事多し、敎育勅語の解釋は實に能き著書なり、倘書抔讀む心地す、是等の主意に文を潤飾せば國語に名書を出だすべし、敎育經世に急にして文辭は顧みざる人達は格別國語に從事する人豈顧みざるべけんや。色を好む男女の動もすればそわ〳〵として、互に

論説

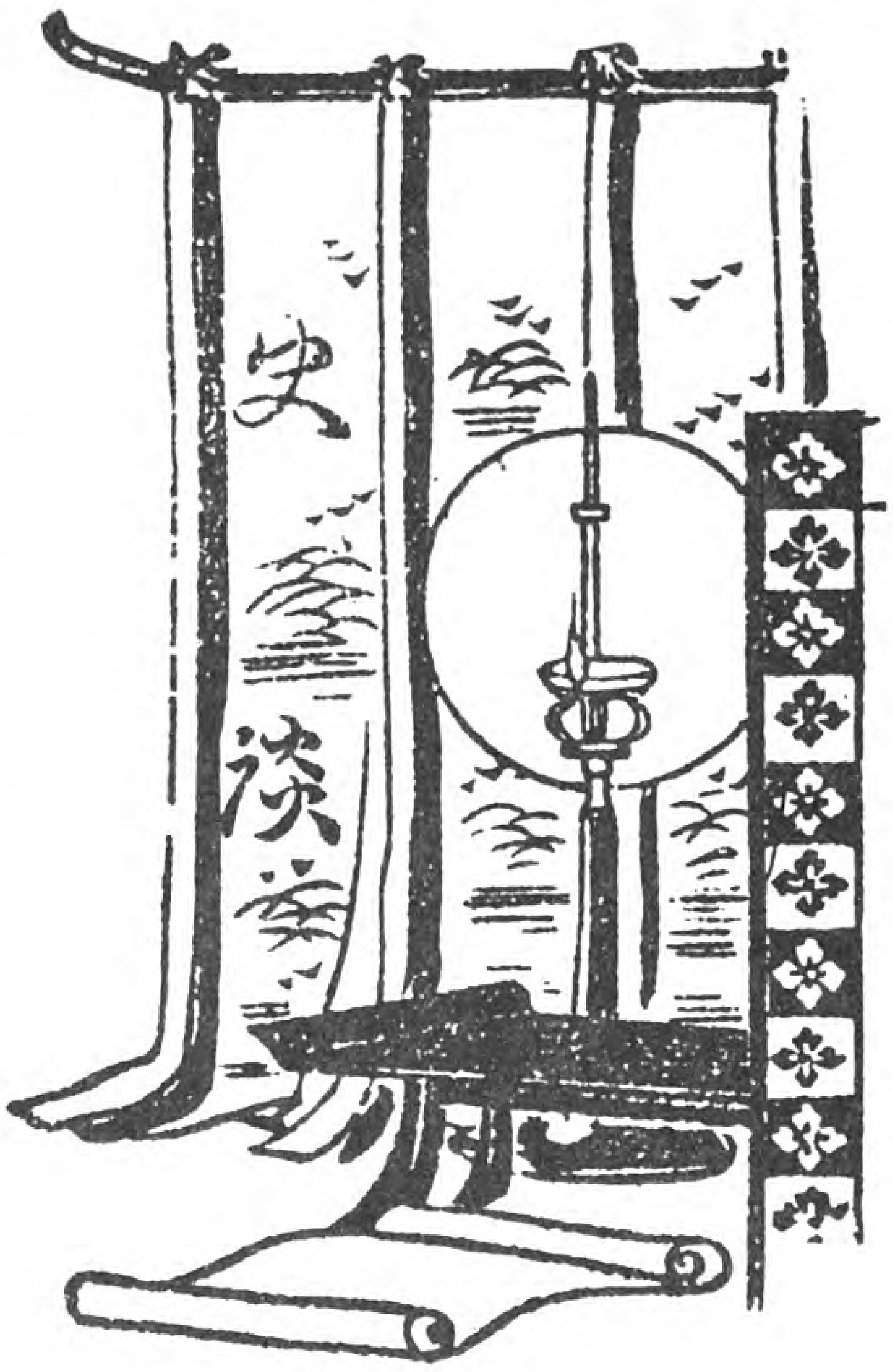
亂れ合ふて戯る丶様己れ人の事を發くとにはあらねども、實に見惡き者なり、情は起るに任せて正うすることなければ聖賢の敎は入らぬ者なり、情を正うするにてこそ敎も其甲斐わらめ。

一夫不レ耕則萬夫饑。一婦不レ織萬夫寒。と管子にも侍るめる、耕織を事とせざる官吏學者も其理を窮めて、其行を施こし其知を盡し其治を致してこそ學者官吏の甲斐もあれ、朝より夕に至る迄心を靜むることなくして、そわ〳〵と色の事のみ思て、心の亂れん事人に生れたる甲斐何くにかある、相搆へて心すべきにこそ、亦隨筆杯云ふ者は心に思ふ種々、あるは異聞奇事の世を益し人を導き、あるは凶き事杯を誡むるが爲に書く者にて、唯だ四季の變遷草木鳥獸の名亦は、無常戀遁世にのみ止めしは何たる卑しき膓ぞや。

言葉は心の動て外に顯はる丶者あれば、文にて其人の賢愚を世人に計り知らる丶ぞかし、唯何事めなくさら〳〵と書き連ねて嘲を後世に殘ずこそ返す返すも口惜き業なれ、已れ轉婆の癖として賤しき身をも顧みず、女紅の外には折々書を繙くをこよなき樂しみとし、折に觸れては拙き文を物して投書する杯我慢ヶ間敷わざなれども、大方に見捨て玉はん祉望まほしけれ。

最も恐るべき敵は最も小さきものなり　（ラ、フチンテーヌ）

天下の理はこれを簡易に本き之を行ふに順道を以ってせば則事成らざるなし　（程　朱）



傳通院夫人と築山殿（つゞき）

文學士　小林雨塔

余は先號に於て傳通院夫人に就て語る所ありしが、今は家康の最初の室なりし築山殿の事歷を說き、傳通院夫人と姑婦兩々對比せしめて、又亂世に於ける女子の地位を描出せんと欲す。

築山殿姓は關口氏、今川義元の族關口刑部少輔の女なり、刑部は義元の妹婿なれば、築山殿は即ち義元の外姪に當る、さて當時義元の幕下にして家康の父なる三河岡崎の松平廣忠は天文十八年病歿せしが、是れより先竹千代(即家康の幼名)は人質として駿府にあり、當年稚ければ直ちに家を繼ぐべきに非ず、岡崎は今川氏の預り分として其代官の支配となり、岡崎の臣の大半は駿河に出仕せり、松平氏に取りては極めて迷惑なりしと雖、勢已むを得ざる所なる可し。竹千代は成人して弘治二年正月元服して元信と稱し又官途ありて藏人元康と改めぬ。

築山殿は此の時義元の命によりて元康に嫁せしより、永祿二年夫人は嫡子竹千代(後の信康)を生みぬ、此の時岡崎の上下御母方は今川御一門なり、扨々目出皮と相慶する事限なし、焉ぞ知らん此の

母子將來松平氏家庭に於て慘憺極まれる悲劇を醸成せんとは

翌三年今川義元は部下をすぐつて尾州織田氏を討たんと發向せしが、脆くも五月十九日桶狹間の一戰に毛利新助の斬る所となり、今川氏累世の積威漸く衰ふる端をなせり、元康此の機に乘じて、大高の城より直ちに岡崎に入部し、初めて松平氏の舊領を恢復しぬ、而して築山夫人及竹千代は尚駿府にあり。

前にも云へる如く、此の地駿遠三尾一帶の間には今川織田兩氏の兵力衝突して屢々諸氏の家庭に内訌を惹起する基となりしが、義元斃れてより、其子氏眞到底織田信長の敵にあらず、加ふるに重立てる宿老は桶狹間に主君義元を獨り討たせし罪を以て引退して局に在らず、嬖臣三浦右衛門佐等事を用ひて、紀綱弛廢し、家中の風俗奢靡に流れ、此頃風流の跳とて流行せしが、氏眞いたく之を好み、自ら「はうかぶり被威太皷を打」つ爲體、父義元の弔軍だにせず此の腐甲斐なさにては乃父の雄圖を承け繼ぐべき事思ひも寄らぬ事なり、此の壯勢を見て取りし元康は敏くも永祿五年の比既に款を尾張に通じて、今川氏に二心を懷きぬ、されば故義元より一字を受けし元康の名を捨て、家康と改名し、ひそかに今川氏に絕を示せしは五年二月なり、此れ亂離の世に處する雄傑の爲としては固より深く尤むべきにもあらねども、只憐むべきは其妻孥なり。

築山夫人及竹千代は駿府に殘りて人質に取られ居りしが、眞氏家康の己に背けるを見ては怒に堪へず、屢々夫人等を戮して家康に思ひ知らせんとせし事一再ならず、只夫人の父刑部樣々に詫言して漸く命を保つを得たり、當時夫人の地位を察せよ、

敵の手中にあり、旦夕刄を渡るの思ありし事、殆んど言語の及び所ならず、當代の婦人たるもの又危からずや。

家康は固より其妻子を憐まざるにあらねども、保國の政略に代へんとは思はず、然るに偶然其手に入りしは氏眞の長臣鵜殿長助の二子なり、之を以て家康は石川伯耆守をして樣々に氏眞に說かしめ、關口刑部を證人として、遂に此の鵜殿の二子と築山夫人及竹千代を交換し、夫人は漸く岡崎に赴くを得たり、此れ氏眞に取りては非常の不覺なり、家康今は後顧の憂なければとて、益織田氏と結託すること深し、果ては氏眞憤りて憐むべし關口刑部責を引きて皺腹搔き切りぬ、家康是に至りて稍心地惡かりしならん。

竹千代は成長し元服して三郎信康と稱す、此の度は又織田信長の女を娶りぬ、此れ兩家締合の政略なり、されど琴瑟和せず、遂に松平氏の家庭に一大禍を釀しぬ。

三郎信康は武邊に於ては父にも劣らぬものなれども、此の人許殘忍酷薄なるは儔少なし、三郎は假りにも慈悲といふ事を知らず、其心情を知るべき一話を擧げんに、或時鷹野に赴きしに、少しも得る所なくして歸る途に一人の僧に遇ふ、或者曰く、狩場にて出家に遇へば、必ず殺生なしと、三郎されば此の出家を成敗すべしとて、首にさし繩を付け、馬の脇へ結び付け、まつしぐらに馬を驅けさせて、之をひきづり殺しぬ、殆んど人外の沙汰なり。

家康と築山夫人との間初めより諧和せしか否かは知れねども、兎も角家康若年よりの妻にて、三郎も設けし事なれば、夫人に於ては家康の優寵を期待せしなるべし、しかも一度は駿府に取り殘され

て、生死の辛き目見せられ、漸く岡崎に赴くを得しも、此の時家康にはあまたの婢妾あり、子もまた多く生れ出でたれば、夫人は岡崎の邊築山なる地に置かれて、閨閤の勢力とては少しもなく、家康と漸く不和なり、夫人常に曰く我こそ眞の妻にて、三郎の母なれ、其上我父は家康の爲に命を失ひし人なれば、旁々我こそ寵愛に預るべきに、此くすさめらるゝこと無念なりとて種々恐ろしき事云ひ罵り立腹せしと云ふ、少しは精神異狀ある人にや、さなくとも女子として妬悍の情なきを得ず、夫人の怨毒あるもあながち無理とは云ひ難からん、此の頃信康の室織田氏子を儲けしに、女子ありしかば、信康も築山夫人もさのみ悦ばず、其後又子生れしも又女子なれば、夫人等愈悦ばず、さりとは無理なる怒あれども、當時の人の考にては子の男女は母の自由になし得る樣にも考へしなり、斯る事ありて、信康夫妻相諧はず、然るに又築山夫人の醜聲を傳ふる者あり、甲州武田氏の許より岡崎に來りし唐人の醫者めつけいと云ふ者あり、夫人に近きて怪しからぬ風評を生じ、武田氏と夫人と相通計して信康をも勸め岡崎に逆心せんとすと、事實の有無確かならねど、松平氏は東隣の敵今川氏最早意に介するに足らざるも、北方甲信を掩有せる武田の强豪あり、織田氏と共に此の南下を憂ふる事甚しかりしかば、爰に又武田織田兩氏の勢力衝突して、又もや松平氏の内庭を擾き亂さんとせり、其は信長の女にして信康の室たるもの姑夫と諧はずしてありしに、此頃信康益狂暴にして、あしく踊りたりとて町の踊子を射殺せし抔云ひ盡すべくもあらず、信康夫人は遂に堪へ難くして事を誇張して一々父信長に報せり、其最も信長を驚かせしは甲州と通計の一條なり、仍

て信長より濱松（此の時家康は遠江濱松城にあり、信康のみ岡崎に居りしなり）に使して酒井大久保の老臣を召し寄せ、信康の事を問ひ質せしが、此の時酒井等先に信康の狂暴を强諫して聽かれず、其怒に觸れて、內々見限ぎり居りし事なれば、有の儘に信康の事を語る、事宜よろしく陳辨せしならば大事にも及ばざりしなるべきに、思慮の足らざりしにや、信長も老臣の言を聽きては呆れ果て、此る惡逆の人にて松平の家督嗣がせんこと難しと思ひ、家康に申込む所あり、家康が元來築山夫人と叶はず、信康の狂暴をも制し兼ねし所にて殊には當時の狀勢として信長を怒らし果つべきにあらねばとて、決心する所あり、信康母子を殺さんとす、之を信長に通せしに、信長も怒の中なれば、如何樣にも家康の存分次第と答ふ、憐むべし築山夫人及信康母子遂に遠州二俣にて生害せり、此の後松平氏の家中時に築山殿の怨靈とて怪異を傳へしと云ふ。

築山夫人の事歷此の如し、固より一の推奬すべき點なきのみならず、最も失行の譏を免がれず、之を傳通院夫人に對比し來れば、月鼈の差ありと云ふべし、しかも徒らに築山夫人を尤むる勿れ、父は切腹し、己は夫に捨てられ、又所生の嫡子も廢されしとすれば、小人窮して濫せざるを得んや、されど又家康の忍酷をも責むべきに非ず、只當時の社會の罪にして、亂世の婦人の政治上の犧牲に供せられし一例と見ば可なり、之を現時女子の地位に對看せよ、誰れか無限の皇恩を仰がざらん、女子境界の上進大なりと云ふべし。（完）

汝何事にても汝の手にてなすべき事を看出したらんには汝の力を盡してこれをなすべし　（古言）

史談

淀君

松原廿三階堂

むかしから美人で國を傾けた女は隨分世に少くはないが、わけても著るしいのは太閤秀吉の愛妾淀の臺かとおもはれます。淀の御臺所、名は茶々と申しまして、父は江州小谷の城主淺井備前守長政、母は織田信長の妹、お市の方と申して其頃美人の聞へ高かつたお方、何故にこの御方が淺井家に嫁られたかと申すに、その頃備前守は江北の强將で、信長公が京畿に志を得やうとするに就ては勢ひ一時淺井家と和睦せねばならぬ事情があつたからの事、それ故手短かに申せば、これは政略結婚ともいふべき次第、けれども程なく信長は京畿に志を得られて積年の望を達されると共に淺井家は間もなく織田氏に亡されて、お市の方は織田家へ歸られました、其時既にお市の方の腹には三人の娘を儲けて居られたので、三女とも母御に隨られて故家へ歸られたが、その長女に生れたのが、茶々と申て即ち後に淀の御臺所となられる御方、次なるはおいよと申してこれは後に二代將軍徳川秀忠の正室、三女は伊奈侍從といつて後には丹後宮津の城主京極高知の正室、いづれも織田の血筋を曳いて美人の譽れの高い方々でありました。

扨て一旦寡婦となられたお市の方は故家に歸ると程なく柴田勝家の方へ三女とも引つれて再縁されましたが、これも武運拙なくて織田公逝去の後幾許もあらせず秀吉に亡され、天正十年四月の半ば越前國北の庄の城に於て見事自害を遂られました。その折三人の娘子は如何にされたかといふに、流石兵亂の中とはいへ、元々主筋に當る織田

家の姪でもあり、且は寛仁大度の秀吉の計らひで、三女とも〳〵大阪城へ引取られ、秀吉公の手許で養育さるゝ事となりました。その時淀君の年は稍く十三歳、唯今で申さば髮を稚子輪に結ふて尋常の四年をやつと卒へた位の年でせう。

抑も太閤秀吉は匹夫より起ッて天下の關白とまでなられた方で氣象の開豁な所、度量の寛いところ、古今に亘ッて類のない人物でありますから元は主筋であッた方の姪であらうと、右大臣家の養女であらうとそんな事には一切頓着はされません。イヤ主筋であッた少女を侍妾にした處ろが却て太閤の氣象が知れません、既に天下の群雄を臣下として四海に君臨されたほどの方であるから、茶々淺井氏も遂にはその側室に擧られて、後閨に寵愛を得る身分となられました。

勿論太閤には杉原氏、又淺野氏とも申して糟糠の妻があります、これは賢德の聞への高い御方で秀吉が天下の主となられてからは、北の政廳と尊敬されて、太閤恩顧の諸侯から大層望みを屬された方でありましたけれども、不幸にして子といふ者がありませんので、淺井氏が殿の寵愛を得らるゝ頃からは自然と權勢の地位を避けられて、所謂婦人の美德といふものを完ふされたのであります。

太閤の愛妾淺井氏が淀の御臺となられたのは天正十七年に太閤が淀城を築かれてからの事、大阪が本城で淀が別殿、淺井氏はこの別殿に居られたから、そこで淀の御臺といふ尊稱を貰はれました。間もなく文祿二年に秀賴が生れ、その豐臣家の嗣が儲られてから淀君の勢力といふものは大層なもので、豪氣四海を吞み、餘勢大明に振ふと申したほどな太閤殿下を掌中にまろめて、關白の心を自由にするほどの勢ひでありましたが、國を傾く

る美人の本性は既此の時に兆し淀君の御機嫌を伺ふて奥向に出入するものが段々と多くなり、遂にはいろ〳〵、政治上に嘴を容れて天下の政道を搖き廻す輩が裳裾のほとりにつき隨ふやうになりました。その中で一番聞へた人が石田治部少輔三成、江洲佐和山十八萬石の大名がこの淀君の勢力を脊負ふて天下に幅を利かせた一人であります。事新らしく申すまでもなく正室は主人で、側室は可使ひ同様、けれどもその召使が權力を得て來れは、正室と爭を起す塲合もありませう。扨てこの爭ひも附く人の多少によつて勢力に大小の出來るわけでありますが、何をいふにも淀君は妾とは申しながら血脈を尋ねれば右大臣家の養女である、正室は元と臣下で微祿な家から出たものである、しかし太閤は豪傑であるとはいへ天下の主となつたのはこの賢妻の内助が中に少からぬ、して見れば、淀君も妾とはいへ、素姓を糺せば太閤樣も御遠慮遊ばさねばならぬ筋、正室の出は微賤な生れとは言ひながらも、少身な時から恩顧の家來を數限りなく手馴づけて四海の主となられたのは、全く正室の賢慮である。彼是して太閤の奥向は此の二方の勢力の爭となりました。一方は淀君の黨派、一方は北　廳の黨派、北廳は元より爭を好まれなかつたもの丶、譜代恩顧の諸侯が淀君の方にばかり勢力を占めさせて置いて指を咥へて默つて見て居る譯には參らなかつたので、太閤の家には此の二方の勢力の爭といふものが持ち上りました。

太閤の恩顧と申せは何人でせう。十二三歳の小童の折から、諸々の戰につき隨ふて、幾所の戰塲で拔群の功名手柄を顯はした、加藤主計頭淸正、福島左衛門大夫正則を始めとして淺野幸長、黒田長

政、池田輝政、加藤嘉明その外武功の勇將いづれも北廳の徳望を慕ふて豊臣の家を盤石の上に置かうと太閤樣御他界の後、大事を取つて徳川の機嫌を損せぬやうにと計らひましたが、それとは反對で此方は容貌は花のごとくうるはしく、一たび笑へば百の媚を生ずるといふほどの美人でありながら心は飽くまでも雄々しく、所謂一個の女傑であつて、おのれ天下の權を握らずは一日たりともこの胸襟が安まらぬといふ淀君、太閤在世の時の榮華を夢のやうに慕ふて、どうにかして天下を我が手の裡に握つて、四海の英雄をこの膝下に首づかせたいものだと肝膽を碎いて相談をされたのが、石田、小西、長束、大野などいふ面々でありました。

それで双方の黨派の爭が募り豊臣の家に大きな禍となりて、關ケ原の戰ともあり、この戰爭のために豊臣家の蒙けた損害といふものはどれだけであつたらう。戰が終つてから遙かに太閤の家は著るしく威光が衰へて、これまで太閤在世の頃から臣下であつた徳川の方がこの一戰でとう／＼天下の主となつて仕舞ひました。これが即ち淀君が豊臣の天下を傾けた第一の地步であります。（つゞく）

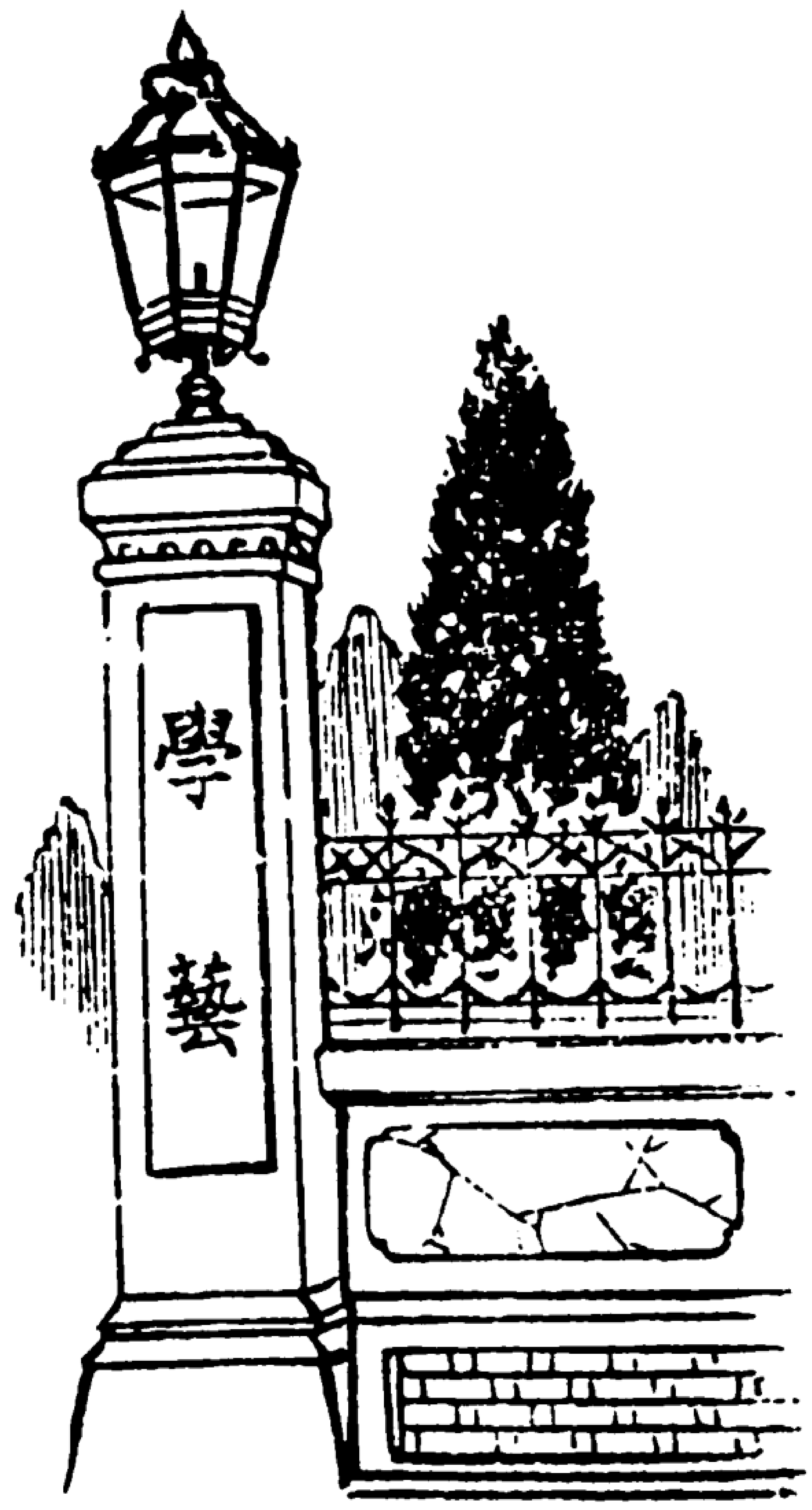
豫め後日の備をなし用度を節し及び善き規則を立つることの三者は不幸なる時運を修治する絶好の工匠なり

（サミユエル、ドリウ）

山深み春ともしらぬ松の戸に
たえ／＼かゝる雪の玉水

式子内親王

學藝



國文學講義

通俗土佐日記（第七回）

廣島商業學校教諭　兒玉彌三郎

九日、早朝大湊より奈半の泊りを追はんとて、漕ぎ出でたり、

○奈半　土佐國香美郡に在り、大湊より十二三里、宇多の松原より八九里の處なり、今は大船の泊る湊にあらずとぞ、

此れ彼れ互ひに、國境の内はとて、見送りに來る人、數多が中に、藤原言實、橘季衡、長谷部行政等、み館より出で給ひし日より、此處彼處追ひ來る、

○此れ彼れ　とは其の見送りに來る人々のことなり、

○互に　とは俗言のたがひちがひなどいふ心にて、一人來ねば又他の一人來る意なり、此の詞は下の見送りに來る人云々に續けたるにて、國境の内はとての一句を挿めるなり、

○國境の内はとて　とは送りに來たる人々の心の中に思へることなり、國境は土佐のなり、はとてのはの下にと思ひてとあるべきを省けるなり、此の人々いかに別れを惜めばとて、土佐の地を漕ぎ離れたらんには、せんすべなきが故にせめては土佐の境の内は離れじと思ひてといふ

なり、
○長谷部行政　言實季衡二人のことは前に出でたれど、此の人は前に見えず、されど此れ彼れ互にとあれば、此の人も前文に此の間に事多かりなどある中なるべし、
○み館　といへるは、守の館なれば女の口上として尊びしものなるべし、
此の人々の深き志は、此の海にも劣らざるべし、
○李白が汪倫に贈りたる詩に「桃花潭水深千尺、不ㇾ及汪倫送ㇾ我情」とあるを思ひ合せて書きたるならん、
○以上　言實、季衡、行政三人を、送りに來たる數多の人々の中に殊に志深き由を言へるは決して此の三人をのみ取りて他の人々を捨てたるにはあらず、就中、志深きを撰び出でゝ、他の人々も此の三人の如くはあらずとも、普通よりは勝れるを思はせたるなり、其は上文に此れ彼れ互に國境の內はとて見送りに來る人數多が中にといへるにて知るべし、是れ、重きを擧げて輕きを思はせ、輕きを擧げて重きを思はせたる遣ひ樣なり、されば、人に依りて輕重はあれどせめて國境の內は別れじとせること、偏へに紀氏任中の徳化深く國人に及べる樣を思はせたるなり、是れ等を紀氏自らの言としてほのめかさば自負の嫌あれど、女の、記者の言なれば毫も厭ふべきにあらず、
是れより、今は漕ぎ離れて行く、之れを見送らむとてぞ、此の人共は追ひ來ける、
○漕ぎ離れて　とは土佐國をなり、

○之れを見送らむとてぞ云々　是れ前文の國境の內はとてとあるに應じたるなり、國境の內はとは地かたを離れずして漕ぐ間のことなり、此處より地かたを離れて沖合ひへ行く舟路なれば今は誠の別れにて追ひ行かんにも由なき時なり故に舟の見えずならんまでも見送らんとて、此の人々は此處まで追ひ來れるなり、

斯くて、漕ぎ行くまに〳〵海のほとりに止まれる、人も遠くなりぬ、舟の人も見えずなりぬ、岸にも言ふことあるべし、舟にも思ふことあれど甲斐なし、

○斯くて　の一語を以て、此の別離無限の情を代表せしめたる筆力味ふべし、

○漕ぎ行くまに〳〵　とは漕ぎ行くまゝになりまに〳〵とは、總べて我が思ふ所もあれど思ふにまかせられずして、他の動止に隨ふ義なり、此處は、此の人々に別れたくはなけれど、舟の行く爲め餘儀なく其れ次第になり行く樣をいふなり、神代記に順の字を讀み、崇神記に依の字を讀み、其の他隨の字を讀めるなど皆此の義なり、

○止まれる　とは殘りたる人々をいふなり、

○舟の人も見えずなりぬ　是は陸上に殘れる人々より見えずなれるをいふにて、殘れる人々の情を察する餘り之れに代りて書きたるなり、故に下にべしの字をも入れざるなり、是は常時の文體一般に斯くありしなり、

○海のほとりに　の下遠くなりぬ、見えずなりぬ、いふことあるべし、思ふことあれど甲斐なしと書き續けたる詞、舟の進行する樣眼前に見ゆる心地すべし、

斯かれど、此の歌を獨言にして止みぬ、

思ひやる心は海を渡れども文しなければ知らずやあるらん、

○斯かれど　此の一語も前のと同じく深長の意味を含ませたり、

○獨言にして　とは無益のわざなれども、外にせんすべのなさに獨言する由をいふなり、

○思ひやる　とは想像するにて、舟中より海邊に止まれる人々の上を想像するなり、

○文しなければ　とは若し此の海を渡る心が文を持てるならば、先方にも其の文を見て此方の心を知りもせんに、其の文なければ云々との假構なり、

○一首の意は、彼の人々と別るゝこと、言はん方なく悲しければ、思ひやる心は海を渡りて、其の人々の止まれる海濱に到れども、使者たる心が、書牘なども持ち行かぬ故、人の目には見えずして　誰も此の心の渡り行けることを知らざるべしといふなり、

斯くて、宇多の松原を行き過ぐ松の數、幾そばく幾千歳經たりと知らず、本毎に波打ち寄せ枝毎に鶴ぞ飛び通ふ、

○斯くて　此處のは、前の離愁を持ち續けて、此の勝景を見る面白さすら、幾分か殺ぐる心地する由を含めたるなり、

○宇多の松原　是れも香美郡に在り、今は人家稠りて松は少なしといへり、

○行き過ぐ　といひて、自ら舟の疾く進む樣を思はせて、彼の止まれる人々に、彌々遠くなれるを示せるなり、

○と知らず　といふ詞は、幾そばくと知らず、幾千歳經たりと知らずといふべきを、省きて一つにせるなり、

學齋

○鶴ぞ飛び通ふ　とは松の齢長きものに、又齢長き鶴の飛び通ふは、いかにも絶景あるを思はせたるなり、

面白しと見るに、堪へずして、舟人の讀める歌、
見渡せば松のうれ毎に捿む鶴は千世の同士とぞ思ふべらなる
とや、

○面白しと見るに堪へずして　とは唯見るのみにては其の心の止み難き由なり、

○舟人　とは水手などにはあらで舟中の人といふなり、末にも舟人も告子抱かりて罵るとあるは、京の家に歸着したる後の事なるを以ても知るべし、是れ等も誰とも知られざる様に舟人と書きたるなるべし、

○松のうれ毎に云々　うれとは末の事なり、こずゑといふは後世にて、上古はこぬれとのみいへり、こぬれはこのうれの約まりたるなり、松のうれも約むれば松ぬれとなるなり、

○千世のどちとぞ云々　どちとは俚言にどしといふに同じ、

○べらなる　とは可きなるといふ詞の間にらの字を加へたるなり、

○一首の意は、此の松鶴の間柄を羨み、我れは思ふ同士離れ來りし歎きにて、彼の人々の厚情忘れ難き心を思はせたるなり、

此の歌は、處を見るに得勝らず、

○得勝らず　とは此の歌主の心には、眞景を寫し得たる様に思へるならんも、風景には及ばずといふ心なり、人の讀めるに擬し、記者の評したるらしく書きたるなり、歌の謙下と絶景を思はせたると、一句に兼ねし筆力思ふべし、

○此の段專ら此の宇多の松原の絕景を賞したるより外の意なきが如く書きたれど、其の實、彼の人々の厚情、斯かる絕景を見てすら忘られず戀しき心をいふなり、故に松と鶴との睦まじき樣を羨みてかへす〴〵別離を歎きたるなり、

斯くあるを見つゝ、漕ぎ行くまに〳〵、山も海も皆暮れ、夜更けて、西東も見えずして、天氣のこと楫取の心にまかせつ、

○斯くあるを　とは宇多の松原の景色の面白きを指すなり、

○天氣のこと云々　是は天氣を楫取の意にまかすといふにはあらず、舟を行りて然るべき天氣か將た舟を止めて然るべき天氣かといふこと、其の是非辨ずべからざれば、唯其の是非を楫取の心にまかすといふ義にし簡古の文なり、

男も、習はぬは、いとも心細し、況して女は船底に頭を衝き當て音をのみぞ泣く

○ならはぬ　とは舟に乘り慣れぬ男はといふなり、

○音をのみぞ泣く　とは聲を立てゝ泣くをいふ

○此の段は、下文の、舟子等が歌をうたひて、平氣なるに對照せしめたる文勢なり、

斯く思へば、舟子、楫取は、歌うたひて何とも思へらず、其の歌ふ歌は、

春の野にてぞ音をば泣く、我が、薄に手切る々々摘むだる菜を、親や守るらん、姑や喰ふらん歸らや、昨夜の垂髮もがな、錢乞はん、虛言をして、賖りわざをして、錢も持て來ず、己れだに來ず、

○斯く思へば　とは上文、舟の搖りて、夜更け

東西も見えぬ恐ろしく思へばといふにて、此方〳〵は然か思ふに彼方は然か思はざるを分たんが爲めなり、

○春の野にてぞ音をば泣く　此の二句は、此の歌一篇の中にて最も切なる處を初めにいへるにて、和歌のかへりつめ（下より上に返りて意の調ふ歌）の體に似たり、

○我が湖に　を「燈」には若湖にと、釋し、種々の例證を擧げたれど服し難し、其は下文親といひ姑といひ己れを對比せる詞あるを以て見るも我とせん方、善く調和すべければなり、されば上田秋成も我と釋し、片假字本にも我を書せり

○親や守るらん　の親は此の女の母をいふなり守るとは、此の女の勢を思ひて、其の菜を喰ひもせで見つめ居るにて、喜べる形容なるべし、

○姑や喰ふらん　とは其の菜を煮て喰ふにて、是れ亦喜べるをいふなるべし、案ずるに、姑は往々嫁を憎む習ひなれば、よし憎まぬまでも、さまで愛することなきを以て、嫁が辛苦して摘みたる菜をもむざ〳〵と喰ふ心にていひ、眞の親は其の勢を思ひて、其の菜を直ちに喰ふことはせで、うち守り居るらんとの心なるべし、又我が湖に手切る〳〵摘むだる菜をの下に若し里方に奉らばの意を略し、親や守るらんの下に若し夫の家に持ち歸らばの意を略したる心に見るべき語意なり、故に摘むだる菜とは、昨日摘みたるにて、家にも持ち歸らぬ中に、垂髪等が來て其の菜を買はんとて持て去りたるが、若し其の菜を昨夜親に奉らば守りやしたらん、若し姑に奉らば喰ひやしたらんといふにて、昨夜垂髪等に欺かれて賣りたるを惜しみ後悔せる心なり、

○歸らや　とは神樂歌數首の本末に安比曾といふ詞あり又催馬樂に曾與也、波禮などいふ詞あるが如く、舟歌には必ずいひし拍子詞なるべし今の俗歌などにも是れ等に似たる拍子詞多くあるを思ふべし、

○よむべ　とあるは、昨終日此の女の、野に出でゝ摘みたる若菜を、日暮れて歸らんとする時に、垂髮等が買はんといひしなり、故に春の野にてぞ音をば泣くといへるは、昨日のことにあらずして今日のことなりと知るべし、今日復た野に出たるは、昨日の菜は欺き取られたりしが故なること言外に知られたり、

○うなゐ　とは未だ髮を揚げぬ童をいふ、

○もがな　は願望の意にて、昨夜の垂髮の、今日復た來る由もがなといふなり、

○錢乞はん　は昨夜持ち歸りし菜の代金を請求せんとの意なり、

○賖りわざ　とは物を買ふに、其の時直ちに價を拂はずして、しるしを與へ置くをいふ、

○錢も持て來ず己れだに來ず　とは乾度持て來べき錢なれど其れも持て來ず、然らば自分に來て、錢を持ち來り得ぬ由を斷はるべきに、其れさへせずといふなり、

○此の歌、全體の意は、昨終日、菜を摘みたる野に今日復た出て音を泣く、其の故は、我れ昨終日、薄に手を切る々々、辛苦して摘みたる菜を持ち歸りて、里の母に奉らば喜びて食ひたらんに、將た、嫁したる家にて姑に奉らば喜びて喰ひたらんものを、昨夜、未だ家に歸らぬ中に、垂髮等が賖りわざをして其の菜を持ち去りたれば、母にも姑にも奉るを得ざりき、依りて今日復た斯く、菜摘みに出たり、嗚呼かの

髫髮來よかし、今日必ず持て來んといひし錢を受取らんに、畢竟、彼れの賒りわざが虛言にて今日其の錢も持て來ぬことよ、若し、持て來べきならば、自身來りて謝しだにすべきに、己れだに來ぬが故に、止むを得ず今日復た斯く、野に出たるが、昨日の如く又渤にて手を切り辛き目すべし、是れ皆、彼の髫髮が虛言して我れを欺ける故なりと恨めしく詫しさに、音を泣くとの心なり、而して音をば泣くといへるも、若菜のみには餘り大業なり、且つ姑といふことあるを思ふに、もと此の菜摘みに遣りしも姑の命じたるにて、菜を賣り錢も取らざりしを責めて、今日復た野に出し遣りし姑の情けなきを悲しむことぞ、若菜の上に託して詠める歌なるべし、鄙歌なれども、人情の極を歌へる處頗る憐れなり、

和畫通信講義

山崎彩峨

墨畫にては、花は淡墨にて輪廓をとり、極めて淡き墨の隈を入るゝか、淡墨を含めし筆先に濃墨を附して、描くかなり。幹、及び、葉莖は、挾墨にてゑがく。墨の使用法花瓣に同じ。葉脈花刺は、濃墨にて入るゝなり。

彩色にては、深き赭墨にて、先づ花の輪廓をとり後ち、胡粉を含めし筆先に、臙脂、または、黃かちの青色を附して、ゑがく、黃色のものは、代赭を附して、描きおき、のち、黃色を塗布すべし、尤も、輪廓をとらず、最初より、胡粉を含めし筆先に、其の顏料を附して描くか、輪廓をとりて、胡粉を用ゐず、顏料のみにてゑがくか、いづれにてもよし。幹は、葉莖と同じく、黃がちの青色に



岱赭を加へたるものを、胭脂にて、挾墨となしてゑがく、根際の幹は、時に、赭墨にてゑがくこともあり。葉は、大なる部分は、青色を含めし筆先に、藍もしくは、墨を附してゑがき、漸次、青色に黄色を加へ、稚葉に至らば、子房と同じく、黄かちの青色に、岱赭を加へ、その筆端に、胭脂を附してゑがく。花刺は、胭脂にてゑがき、葉脈は藍か藍墨かにて、入るゝなり。



葉脈



家庭

姫宮御逸事

八百日ゆく濱の眞砂の數多き御逸事は悉く承はるに由なきぞ憾みある前號の紙上には常宮周宮兩内親王殿下の御肖影を掲げ奉りしが今兩殿下を始め富美宮泰宮兩殿下の御上につき承はりし節々記し奉らん。

◎御平生の事　常宮殿下は十六歳周宮殿下は十四、歳の春を迎へ給ひ殊に兩宮とも極めて御健かに在して御降誕以來未だ一度も是れと申すほどの御異例ありしことなければ御年よりは勝りて見えさせ給ふとぞ御性質も最と穩かに奉仕の人々は更なり御食物御學問に至る迄是れとて好惡遊ばさるゝことなく隨ひて常に儉素を尙ばるれば寒暑の御旅行も或は宮殿下と見上げ奉らざる者もありとか。

◎御慈悲の事　常宮殿下まだ御年九歳に在しける時相州三浦なる小松宮殿下の御別業に渡らせられしことありき御廚所に仕へ奉れる水汲の男ありけり日頃懶けに最と怠り勝なりしかば宮の中なる人々婢女に至るまで惡し樣に云ひなして曾て箱根の御館にて召使はれたる男の最と忠勤なりけるに彼れを召し寄せなばなど云ひ合へりけるを何時の程にか聞かせ給ひて此所に在らん中は此地の者を使ふこそ宜けれと仰せ給ひぬとぞ何時に變らぬ優

しき御心の程有難く覺えければ御養育主任佐々木伯より斯くと次々に申傳へたるに彼男も篤き御詞を畏みて今更の如く自から先非を悔いて其後は日夜共忠直に仕へ奉れりと云ふ。

◎御温厚の事　日頃參る人の修身の御物語仕つること屢々なれば今は大方の物語も聞盡し給へるを又他の人參りて同じこと聞え上ぐることも間々ある習ひなるに斯くても宮は少しも聞古し給ふ御氣色なく何時も事新しきやうに珍らしがりて聞かせ給ふなり是れ其人の志を捨て給はじとの深き思召にて程經て事の仔細を承はれる者殿下が御心遣ひの程を仰ぎ奉りて何れも御温厚なる御擧動に感せざるはなしとぞまだ幼く在すれど位尊く生れ給へれば承はるもの毎に畏くぞ覺えける。

◎御逍遙の事　是は周宮殿下一年沼津へ成らせ給ひし折の御事なりけり此磯に馴れて幾年松の梢の物古りて續く浦曲の眞帆片帆影も動かぬ長閑けさに浪に睡れる沖の鴎も豊かなる夢や結ぶらんと思ふ迄凪ぎに凪ぎたる海の景色の面白かりければ宮は眞砂路に下り立たせ給ひ小石など數多拾ひ集めて此上なき御慰みと思し給へりき其頃宮に伺候し奉りし靜岡の縣官に大井某といふがありけり宮の御氣色の麗はしきを拜して其身も多くの小石を拾ひ參らせぬ斯くて宮歸り給ひて其石どもを二つに別ち是は宮の拾はしゝもの是は大井の奉りしものとて拾はしゝ石は大方捨て給ひたれど大井より奉りし石は惜しきものに思すとて捨て給はざりけり是も殿下の人の志を無下にせじとの深き思召しにやありけん。

◎御成長の事　麻布なる御用邸には富美宮泰宮兩内親王ぞ在します御養育主任として林子爵の事へ奉れる所なりけり兩殿下とも最と健かに新玉の

年を迎へ給ひて富美宮は御齢十三歳泰宮は八歳にあらせ給ふ御仲睦ましく渡らせられ月花の匂ひ美しく御成長遊ばさるゝと承るこそ何にも増りて目出たけれ御父帝の御愛しみ何れ勝り劣りのあらせらるべき謂はれは無けれど殊に泰宮は乙宮に在ませば其御寵愛の程もさこそとなん畑返す賤が心には推量り奉る。

◎御修學の事　兩宮ともに御學問最と勝れ給ひて御教授申上ぐる人々も皆感じ奉る程なりとかや富美宮殿下の御用掛には習字と和歌を坂正臣、佛語を赤松長稱、音樂を杉浦千可子、普通學を村田梅枝と定められ泰宮殿下には普通學を倉田やす子、音樂を杉浦千可子と定め給ひて日々課程を御精勵遊ばさるゝ由なり。

◎御優美の事　一年鎌倉の御用邸に御滞在あらせられぬ恰も卯月の末つ方山花やう／＼に散り初めて光り長閑けき春の日の心も空にあくがるゝ折とても日課の御學問は露怠らせ給はず御日課果ての後始めて郊外の御運動は遊ばされきとぞ然れど他の煩はらんことを恐れて毎時も御微行遊ばさるべき事なるが御性質殊と優美に在ませば或は建長寺に成らせられて菫蒲公英などの咲滿てるを摘ませつゝ百千鳥の囀り交すを面白しと賞で給ひ或は由井が濱に御逍遥ありて小貝など拾はせつゝ松ふく風梢の音などをかしと思しき又富美宮殿下は殊の外御健足にて曾て箱根の御別邸に在せし時にも御徒歩にて山路遙に登らせ給ひしことも屡々なりしとぞ。

◎御和歌の事　富美宮殿下曾て鎌倉にて詠み出で給ひし和歌

山の上に雪かとばかり見えつるは
いつしか咲ける花にぞありける

静かなるところに住めば鶯の
　聲も長閑にきこゆなるらむ
山松の年へてさへもうつくしき
　みどりの色をあらはしにけり
もえ出でし柳の葉より露たれて
　しづかに降れる春雨のそら

此時宮は僅に十歳に在せりき目に見えぬ鬼神を哀れと思はしむる御詠吟早も承はらまほしと人々ぞ思へるなる。

老人の看病（承前）

女子高等師範學校教諭　後閑菊野

さて一旦病に罹りました折には假令輕い病でございましても決して疎に思つてはなりませぬ、老人と云ふものは身體の機關が總て衰へて仕舞ひ、髮は白くなり、齒は缺け、目は惡くなり、耳は遠くなり、消化吸收の働きは惡くなつて食物のコナレが十分でございませぬ、又體温の發生の力が乏くなつて若い人よりは寒く感じます、全身ドコでも衰へない所はないのでございます、是は生理上當り前であります、さう云ふものでありますから、一旦病に罹りました時は動すると變症を發しまして俄に大病に陷り、ウッかりして居ると後悔しても及ばぬことになります、其折には殊に心を盡して看病せねばなりませぬ。

愈々看病に就て申上げますが、此看病と云ふことに就きましては第一に申上げるのは心を養ふこと、でございます、平生でも心を養ふことは肝要であると云ふことは今申上げました通りでございます、病氣の折には一層注意をせねばなりませぬ、是は動すると輕く見られることでありますが、決

家庭

してさうでありませぬ、即ち良いお醫者に掛ければ治療法も藥も良い、又看護婦を雇つて十分に手當を盡す、それだけは看病に就て大事であると思つて居りますが、殊に大事な精神的治療と云ふことを忘れることがあります、一たい精神と身體とは餘ほど關係して居るものでありますから、精神を養ふこと、即ち始終喜ばせて病苦を忘れるやうにするのが一つの治療法でありまして是が第一に入用なのでございます、そこで常に心を慰めます材料としては先づ病床に就て居りますれば色々面白い話をして聞かせるとか、或は新聞を讀んで聞かせるとか、又ば面白い小説を讀むとか云ふやうなことをして慰めましたり、或は又音樂の好きな方であれば音樂を聞かせ、或は書畫を好む方なら息子や娘が書ければ病床のかたはらで自身に書いてみせたり、或は書いてある書畫を其所に掛けて見せ、其外床の間の掛物は自分の家にあるだけは時節に應じいろ〳〵取換へて掛け、又花は殊にたび〳〵さしかへて病人の目をなぐさめるやうするがよろしうございます、是も本當に手間を取ッてするやうな活け方でなくてもよろしいので只庭に咲いた花を投入れにしても宜いのでございます。

其他何なりと座敷の裝飾になることには注意するがよろしう在います、永く病床に居る時は誠に退屈なもので、天上の棧も數へ盡し、障子の目も數へ盡し、壁も見てどこもかも見盡して見るものがなくなつてしまふといふ風でございます、そこで掛物などがまるで床の間に張附けたやうに長い間其儘換へないやうでは心を慰めることが出來ませぬから、唯今申しましたやうに色々部屋を裝飾します、此節は病院などでも掛物を掛けたり花を挿したりするところがございますが、是は西洋では

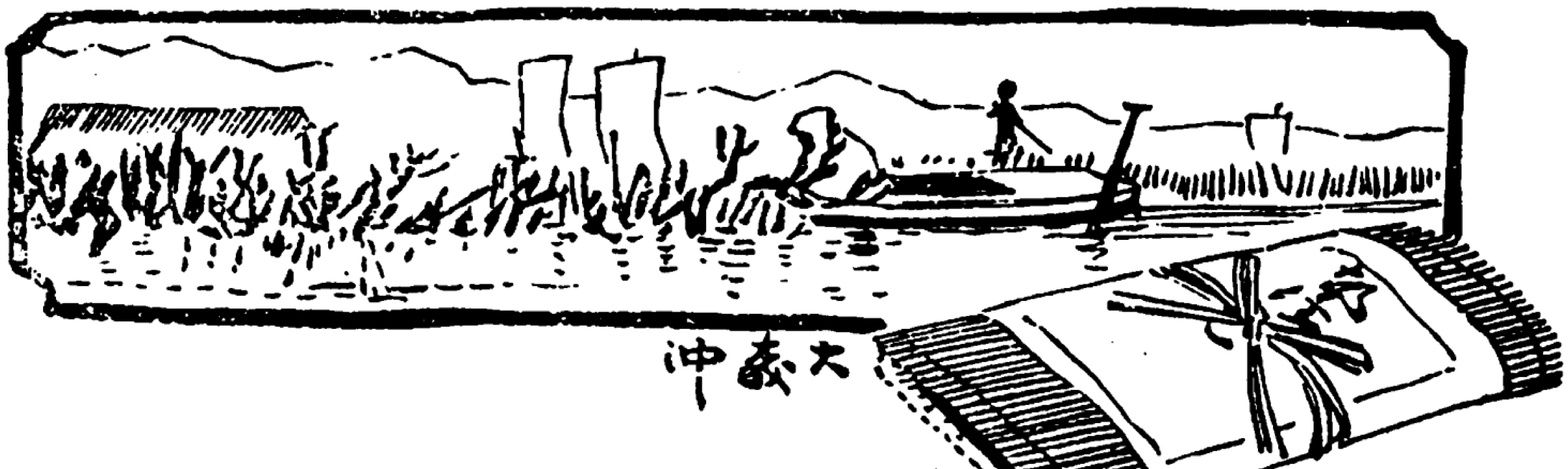
まだ致しませぬさうで、看病法の一大進歩と稱へられて居るさうでございます、併しドウしても病院などはそれ等のことは思ふやうに參りませぬ、所が自分の家では是は譯もなく出來ます、勿論看病に心を盡して居りますからさほど餘裕はございませぬが、其間にチヨッと是等の事に注意するのでございます、今日は庭に此花が咲いて居ましたからチヨッと挿して置きました美しいではございませんかなど申しましたならば、それがドノくらゐ病苦を慰めるか知れませぬ、彼の名高いナイチンゲールの言はれたことがあります、自分が病氣の時に一束の野の花を貰ッて誠に嬉しくて其時か



ら忽ち快復をはやめたといふことを忘れませぬ、又自分が多くの人を看病した時に薔薇の花を贈りましたら大層其人が喜んで今までの苦痛の貌が變じて笑の顔となつたと云ふことを記憶して居りますとカウいはれてあります、さう云ふ譯でございますから心を慰めるとに付てはチヨとしたことにも氣を付けてやらねばならぬと云ふことが分りませう、又病人と云ふものはドウも神經が過敏になッて居りますから怒り易いものでございます、聊の事に癇癪を起したり、或は愼み深い人は表には表しませぬが、心にそれを思ッて大層苦んだりすのものでございますから、ソコラの所は能く氣を

付けまして假令ドンな無理難題を言はれても之に逆ッてはいけませぬ、病人に逆らはないのが看病の原則でございます、併し逆らはないが宜いと云ふても食べてならぬものを食べさせても宜い爲て惡いことをするのも止めぬと云ふのではありませぬ、それは巧みに能く言ひ能く扱ッて食べさせないやうにすることは勿論しば〱ありませうが其他のことは忍耐を強くして決して病人の心に逆らはないやう癇癪を起されてもコチラは顏色をやはらげ言葉をおだやかにして之に對するやうにせねばなりませぬ、尚其上に注意を周密に致して病人が一度び手を擧げ足を動かしするにつけても又其顏色を見たのみでも既に其心を察すると云ふほどにせねばなりませぬ、チヨッと手を出せばあの夜具を剝ぎたいのであらう、コチラの方に目を着ければあの物を欲いと望んで居るのであらうと云ふ風に口に言はぬ先きに其事を察するほど十分氣を利かせねばなりませぬ、それには唯ポンヤリして附いて居ッたのでは出來ませぬ、ドコまでも目を配り心を配つて居らねばなりませぬ、それから又少々心宜くなりました折には或は脊負ひますこともありませう、是は肩に捉まらせて靜に歩かせることもありませう、とにかく色々介抱を加へて庭などに連出すことも大層病人を慰めるものでございます、平生健康の時は珍しくも思はぬ庭草木なども久しく病床に居ッた者が出て見た折はドレだけ愉快であるか知れませぬ、或は又寢所なども時々換へて見ることも一つの慰みになります、ソンな風に萬事に心を盡しまして病苦を忘れるやうにすることを計らねばなりませぬ、看護婦と云ふものは勿論看病の技術に於きましては優つて居ります、例へば繃帶の掛け方であるとか、灌腸の仕

方であるとか、吸入法のやり方であるとか、それ等の類は慣れて居りますけれども、此病人を深く思ふ眞心　信實とか愛情とか云ふものに乏いのは亦止むを得ぬことでございます、ドンな立派な看病婦を雇ッても溢れるほどの眞心で親切を盡すと云ふことは出來ませぬ、ソコは血緣のある家族の者には自然に備はつて居るので是は金錢で購ひ得られぬ處でございます、勿論病性に依ッては專門の看護婦を雇ッて置くのは善いことでございます、が尚は其上に家族の者が色々注意を周密にすることは決して忘れてはならぬのでございます、さう云ふやうに精神を養ふといふ治療と、それから衞生の方の治療と、其上に藥用と云ふやうに總てが



揃いませぬければ本當の看病になりませぬ、看病の效用の多いことは藥用より餘ほど優ッて居るのでございます、昔からの諺に一に看病、二に藥と云ふことを申しますが、是は能く當ッて居る諺でございます、そして看病の適任者は婦人でございます、婦人は溫和で注意が周到でございますから病人の看護には最も適して居ります、殊に一家の病人につきましては主婦と云ふものが其看病の主任にあらなければなりませぬ、娘とか雇女とかそれ〲監督して手代りはさせますが、主たる勤めは主婦が司らねばありませぬ、それゆへに看病に就ての心得は相當に持つて居らねばなりませぬ、やはりナイチンゲル孃の言葉に家を理める婦

人は是非看病の任に當ることがあるから專門の看病婦でなくとも看護法を知らねばならぬと言ッて居られます、實に一家には色々の人がありますから、病人が無くて一生濟むことはありますまい殊に老人の看病は大抵の人は必ずせねばならぬことでありますから其時は十分に手厚くせねばなりませぬ。

先づ精神を養ふといふ方の看病については段々申上げました通りでありますが、今度は衞生上に就て申上げます、先づ病室であります、家に病室と言ふものはありませぬが、詰り病人の居る部屋であります、其部屋はドウ云ふものが入用であるかと申しますと、閑靜な所、即ち人の出這入りの少い所が宜いのでございます、どうも騷がしうございますと神經を刺激いたしますから病人の養生に大層惡い、又出這入りが多ければ自然病毒も大勢の者に傳ります、其點から申しても惡うございます、閑靜で交通が少くて明るい所が宜いのでございます、ドウせ病氣で寢て居ッて何も見ないから薄暗い所で宜いなどゝ云ふのは大間違ひでございます、光線と云ふものは身體の爲に大層善い者でございます、能く日の這入る所でなくてはなりませぬ、併ながら病人を直接に光りに當てるのはよろしくございませぬから、窓掛屏風などでそこはほどよくしてゆかねばなりませぬ、それから風通しの宜い所でなくてはいけませぬ、殊に熱病などでありますと風通しの惡い所では苦しくてタマリませぬ、併し是もヂカに病人の身體に當てゝはいけませぬ、例へば此所に病床があるといたしますと其邊の窓と入口とを開けまして其所を風の通り路に致しますと病人の身體にヂカに當りませぬ、さう云ふやうにして時々内の汚れた空氣を出し外

の清い空氣を入れるやうにせねばなりませぬからそれに都合よくなつて居るやうな部屋がよろしうございます、それから廣さは成るべく廣い方が宜いのでございます、空氣の容積は多いほど宜い、併しさう十分にも參りませぬが、どうしても六疊より少くてはいけませぬ、さうして天井は成るべく高い方が宜いのでございます、それから床の間とか違ひ棚などは成るべく附いて居るのが宜いのでございます、さう致しまして唯今申しました通り掛物を掛換へたり花を活けたりして慰めます、是等の要求が皆遂げられますならば病人の常の居間を用ゐるが最も便利でありますが若しさうでなければ平生の客室で、看病の方を宜くする爲に使はねばなりませぬ、場所の選び方は右の通りでございます、されど其室の溫度は冬極く寒い時も部屋に掛けてゐる華氏の寒暖計で六十五六度までにはなッて居らねばなりませぬ、それより少し暖いのは宜いのでございますが、寒い時でも其くらゐまでは保たねばなりませぬ、それには相當のストーブがあればそれを使ひます、なければ火鉢を用ゐます、併し火鉢には能く起ッた火を入れねといけませぬ、病室で炭を注いだり何かすることは宜くありませぬ、チヤンと臺所で起して眞赤になッた火を火鉢に入れねばなりませぬ、それは炭から火になる時は毒な瓦斯が立ちますから、スッカリ起り切ッたものを入れます、又暑い時に溫度を減らしますことは寒い時に寒さを防ぐよりムヅカシいのでございますが、先づ風通しを宜くする、日覆ひを設ける、又庭に撒水をする、ソンなことをして涼い風が通るやうにし、又病床に始終附いて居つて日中は團扇で煽いで居るとか、又電氣の力で多くの團扇がグル〳〵回るやうにあつて居る器

械もあるさうでございますから家によつてはさう云ふものを使ふもよろしうございませう、又病床の側に大きな氷の塊りを盤に入れて置くといふこ とも一つの涼さを催す本になります、ソンな風にして病人に成るべく暑さ寒さの苦を感せしめぬやうにしたいものでございます。

それから次には其部屋の掃除でございますが、是は大切であります、健康の人の居る所も、朝夕掃除します、まして病人の居る所は掃除せねばなりませぬ、併し病人の居る所は掃き惡い、掃くのがヲツクウと言ふので長くそれなりにして置くのはよろしくございませぬ、多少面倒でありますが、必ず掃除をせねばなりませぬ、それには若し隣の部屋が使へますれば二三人掛りまして其寢臺をソツクリ隣室に移して置いて其アトで窓を皆開けて十分掃除をする、掃除の出來た時は又ソコへ移します、併し移すべき相當の部屋も無し、或は重病人であつて動かしてはならぬと云ふ病人であれば其病人の上に白い布を顔から夜具全體に掛けて置いてハタキを使はないで靜に塵を掃きよせます、ハタキを掛けませぬから大抵のものはアトで布巾で拭つて置きます、是は朝夕二回なさねばなりませぬ、病床のことは其くらゐにして措きます。

（未完）

冬の衛生（承前）

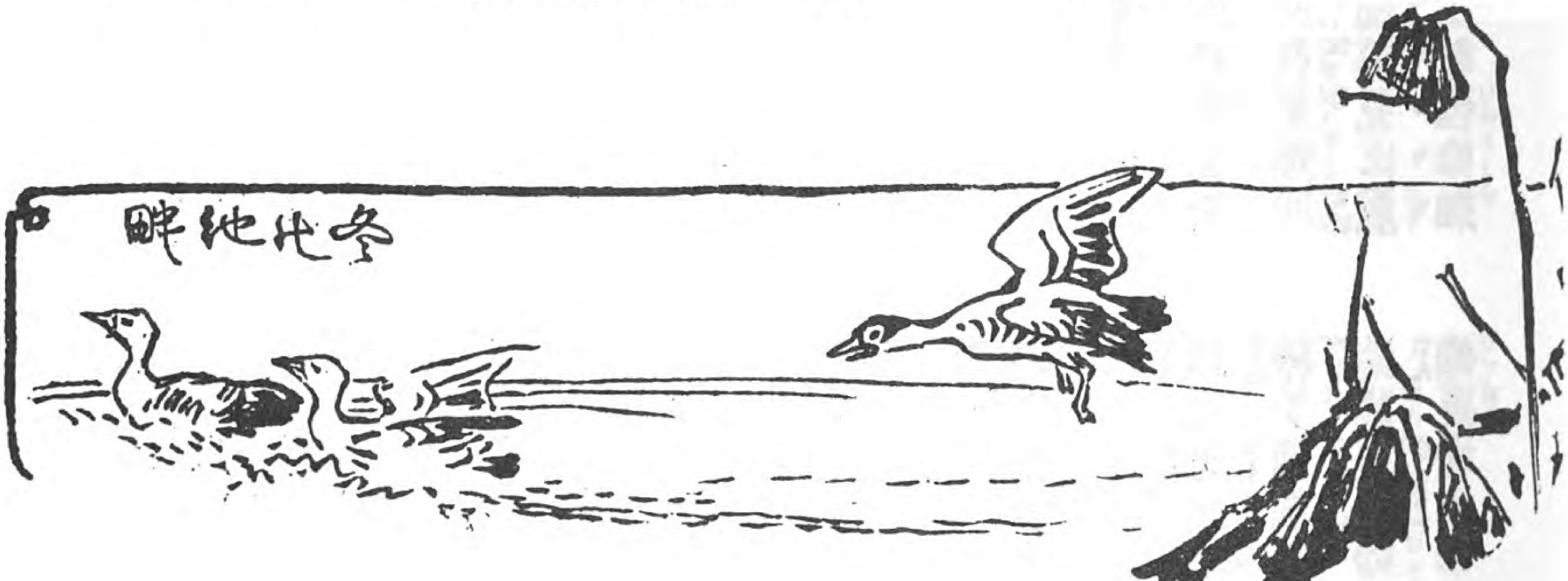
尼子四郎

さて、之れより注意方并に手當法を述べむに、慢性氣管支加答兒并に其續發症あるものは第一に有害物を避くることに注意せざるべからず、即ち煙又は塵埃を含有する空氣、粗烈の空氣、濕潤して且つ冷却せる空氣及び寒冷を避け、天氣不良の

日は外出せずして室内に籠り、全く喫煙を廢し、亦成るべく飲酒の量を節すべし、彼の石匠、磨者の如き塵埃を以て充されたる空氣中にて職業を營むものは其職業を換ゆるにあらざれば永久疾病の全癒することなし。

此等の有害物は心臟病、脈管病、腎臟病及び結核に續發する處の慢性氣管支加答兒にも同一の作用を致して加答兒を增惡せしむが故にこの種の慢性氣管支加答兒を有するものも前者と同じく此等の有害物を避くることに注意せざるべからず。

概して慢性氣管支加答兒を有するものは便秘の癖あり、故に便通をよくすることに注意せざるべからず、食物の



中にては菓物、蜂蜜、乳油滓、乳糖等は便通を佳良ならしむる作用あるものなり、又枸櫞乳清若くは枸櫞酸沸騰散は斯の如き場合に大に賞用せらるゝものにして、その製法を述ぶれば左の如し。

枸櫞乳清の製法は、枸櫞汁少許を壺に入れ、之れに煮沸せる牛乳六合を加へ暫時靜かに置くべし、然るときは所謂上澄を生ずべし、之れ即ち乳清なり、この乳清を毎朝空腹時に用ゆるを可とす。

枸櫞沸騰散の製法は、煮沸せる水一合二勺許の中へ、枸櫞汁少許を加へ、更らに炭酸曹達少許（小刀の尖にすくひて一杯許）を加ふるにあり、こ

の沸騰散も亦朝空腹時に用ゆるを可とす。

これ等のものを用ゆるも尚ほ便通佳良とならざれば、舍利鹽一匙を「コップ」一杯の水に溶かし毎朝空腹時に用ゆべし、然るときは便通多くは佳良となるなり。

次に慢性氣管支加答兒を有するもの丶注意すべきは、足を冷却せざることと是れなり、足を暖かに包み、温足浴と冷足浴とを相交換して施行し、或は跣足歩行(足の強くなる樣慣すためなり)を營む等の事に由りて、氣管支病の輕快したる例は決して尠なからず。

慢性氣管支加答兒並に其續發症を有するものは前に述べたることに注意すると同時に左の手當を行ふを可とす。

(第一)吸入法　この法は慢性氣管支加答兒に屢々用ひらる丶ものにして往々良効あり、乾性の加答兒を有するものは毎日數回單純の水蒸氣、又は五十倍の食鹽水及び曹達水を吸入するを可とす、その法は土瓶の中に右の吸入藥を入れて之れを煮沸し、土瓶の上に漏斗又は原紙製の漏斗樣物を載せ、その口より出づる處の蒸氣を吸入するにあり、又咯痰の多き加答兒を有するものは「テルペンチン」油を吸入するを可とす、之れを吸入するには種々の法あれども就中便利のものは所謂「テルペンチン」煙管を用ひて吸入するの法なり、この煙管は二條の硝子管を有する處の壜にして、その底面より一二寸の處までは水を以て充され、それより上方六分許の處までは「テルペンチン」油を以て充さる、而して二條の硝子管は共にこの壜の栓を通じて壜内に入り、その一條は直管にして下端は壜内の水層に達し、他の一條は曲管にして下端は壜内の空氣層中にありて液層に達せず、其外

端は角度を呈して灣曲し以て吸口となる、病者の「テルペンチン」油を吸入するには此の吸口より吸入するなり、「テルペンチン」は毎日一回乃至數回吸入して可なり然れども暫時にして休止し決して長時間吸入すべからず。

(第二)温浴及び蒸氣浴　慢性氣管支加答兒を有するもの丶多數は能くこれに堪ゆれども、就中蒸氣は强壯の人に限り之れを用ゆべし、温浴並に蒸氣浴に浴したる後は直に冷水を灌漑し又は冷水摩擦を行ふべし、曩に急性氣管支加答兒の手當の處に述べ置きたる足部(脚部)蒸氣浴及び全身蒸氣浴も亦慢性氣管支加答兒に効あり(急性氣管支加答兒の處を見るべし)、されども慢性の加答兒に蒸氣浴を用ゆるは一週一度に限るべし、又虚弱の者、肺病及び心臟病ある者並に其他の重病ある者は決して猥りに蒸氣浴に浴すべからず、而して若し其必要あるときは心臟部に氷嚢を當てつ丶浴すべし(其他の蒸氣浴入浴中の注意は既に急性氣管支加答兒の處に述べたるが如し)、

(第三)冷水療法　一回蒸氣浴を行ひてより次に之れを行ふまでの間には、冷水摩擦法、濕布の纏絡法、冷水灌漑法殊に膝部冷水灌漑法背部冷水灌漑法等を行ふべし、而して此等冷水療法を行ふ時期は夜間にても可なれども成るべく每日早朝を可とす、療法畢れば直に再び床に入りて身體を温むべし、要するに冷水療法を行ふに際しては、之れを行ふまでに身躰の十分に暖まり居ること、療法畢れば直に再び身體の暖めらる丶こと此二件は實に缺ぐべからざる要件なり、且つ之れに用ゆる處の水は冷ければ冷き程その効著しきものなり。

(第四)空氣療法　この療法は慢性氣管支加答兒殊にその續發症たる肺氣腫に用ひらる丶ものにし

て、この爲めに特別に製せられたる器械ありて濃厚の空氣を吸入し之れを希薄の空氣中に呼出する様に裝置せらる、この器械は肺臟の作用を助け、且つ續發症を豫防するの効ありとして十數年前までは頻に用ひられたるものなれども、さ程の効能あらざるが故に近時之れを用ゆるもの大に減少せり。

（第五）氣候療法　氣候を撰び、氣候佳良の地に轉居することは、慢性氣管支加答兒及び其續發症を有するものに最も必要にして殊に秋季より冬季に於て然りとす、而して轉地に適當する場所は概して南方温暖の地方なれども、乾性の加答兒を有する者には空氣の少しく濕潤せる地方に適當し、喀痰の量多きものには却て空氣の乾燥せる地方適當す、又大都會に住し紅塵萬丈の裡に消光する處の患者は夏日と雖も樹木多き地方に轉地するか或は東海岸に至りて游泳をするを可とす。
其他服藥療法、光線療法等種々の手當法ありと雖も生兵法は怪我の基となるべければ略して茲に述べざるべし　（完結）

海老茶袴の色上法

◎海老茶袴の色の褪めたのは實に何とも云へないキタナらしいものでこれには大方困つて居る人もあるやうであるから左に其色上法といふものを掲げます、此法は或人の實驗したところだと云ふ事ですから試みて御覧なさい。

◎先づ色揚げをしやうといふ袴を解いて、洗濯をあして日に乾し、目方を取つておいて夫れを釜に入れる。

◎其處で其釜へタンニンサン（フシの粉）を袴地百目に付三匁の割で袴地が浸るまでの水に溶して

之をぐた〳〵三時間許り煮て絞出す。

◎扨絞り出した袴地をば吐酒石(藥の名二匁)を湯で溶いたもの丶中へ二三十分間浸けて置き又絞り出して清水で洗ふ。

◎別にタンニングラレット(藥名)を袴地百目に付四匁の割にて溫湯で溶し又別に土鍋で湯を沸かし置き、溶してあるタンニングラレットを少しづ丶入れて煮ながら攪拌し絞ッてある袴地を繰り入れる。

◎扨し繰り入れた後の湯加減が一寸面倒である即ち攝氏寒暖計で八十度まで熱する(普通用ゐる寒暖計は華氏なる事は誰も知る通り)攝氏寒暖計は百度が沸騰點であるから之を沸騰しては熱さが過る、と云ッて溫くては色の工合が面白くない、まア寒暖計を其土鍋に入れて熱度を計ッて居るのが一番宜しい。



◎只だ困るのは袴地が鍋の中に押しつまって入つて居ると湯は四邊と表面が熱くあつても袴地の內部の方は溫もつて居らぬ夫では効力が薄いからよく〳〵注意して熱度が袴地の內部にまで及ぶやうに入れて置かねばならぬ。

此法で色上げをすると容易にハゲぬとの事、一つ試みて御覽なさい。

家庭

だいどころ

兎の料理

今年の支干に因んで兎の料理をお話し申せば、先づ德川時代には元旦に大奥の御膳へ兎の吸物を附けるのが嘉例でして、其吸物の取合せに、土筆を遣ふとに極つて居ましたが、是は兎の毛から筆を聯想して、料理に仕立てたと云ふ事でありま す、デ其他の兎の料理に就て例の名人赤堀峯翁が見繕ひました誰にでも出來る、初春の手料理を並べて見ませう、尤も峯翁も取つて八十八と云ふ所御米字の高齢でありますから、何角と芽出度い因縁であらうと思はれます扨其献立を聞くに、



▲吸物　のし兎、土筆、チンピ、田舍味噌汁

▲口取　霰兎の黄味キントン、海苔卷卯の花梅花人參のアチヤラ煮

▲ヌタ　兎の薄作り、若葱、赤大根小口、赤味噌引

▲皿　兎の山椒燒、木賊獨活蕗の薹、朝鮮燒

▲茶碗蒸　乾饂飩、兎ソボロ、乾茸、三ッ葉、卵蒸

と云ふやうな次第ですが是から簡短に其の料理法を書きますと……

▲吸物　汁は田舍味噌で仕立てザット沸かして裏漉に掛ける、のし兎は大身に切り土筆は袴を取り前の汁を分けて下煮をなし更に別の汁に入れて客に差出す時陳皮を入れる口取　霰兎は二分四角に切りダシと鹽で下煮をするキントンは茹卵

の黄味を煮返して味淋を交せ裏漉に掛け之へ前の霰を入れる、卵の花は豆腐の殻を能く摺り卵と煮返し味淋を少し其中へ入れバラバラになる迄鍋で煎り更に醤油を少々割り伊勢海苔を焙りて巻く、人参は二分位に切りて梅花型で押抜き一旦茹上げて更に味淋と砂糖に鹽を入れザット煮立て下し際に酢を入れ尚は唐辛をも入れる▲マタ　薄作りの兎をダシでザット煮上げて酢に漬し、若葱も五分位に切りて茹でソシテ酢に漬し、赤大根は薄く切りて其儘用ゆ、味噌引は味噌に砂糖を交せて摺り垢抜辛を之へ落して裏漉に掛け前の兎と葱の酢漬を搾りて入れる▲皿　兎の山椒焼は兎の肉を大形に薄く剥ぎダシと味淋と醤油を節く割りて之を漬し金網に掛けて焼き胡椒を振掛ける、木賊獨活は一寸五分位に切りて皮を剥き酢漬として砂糖を振掛け青海苔の揉んだ中へ轉がして色を附ける、芝の兎朝鮮焼は皮を剥き串に刺し煮返しの胡麻油を塗附けて焼き尚は醤油と砂糖と卵を節く割つた摺胡麻を塗附けて再び火に掛ける▲茶碗蒸　乾饂飩を一旦茹上げて、ダシと醤油で下煮をする乾茸と三ツ葉も矢張ダシと醤油で下煮をなし、兎の叩肉と共に茶碗に入れ之へダシと醤油を節く割つた攪卵を入れ蒸籠に掛けて蒸す――ト先づ名人釜翁の話したのは斯様な遣方であります。

岩間とぢし
氷も今朝は
とけそめて
苔の下みづ
みちもとむらむ
（西行法師）





清國見聞談

阿多廣介

私は昨年の十月より泰東同文局の用を帯びて、凡そ五十日間、清國の揚子江一帯を視察して參りました、御承知かも知りませぬが、泰東同文局は出版印刷を以て、清國の文明を啓發し、教育事業を進捗せしめることを、目的として居る一ッの教育團體で有ります。夫れで私の視察して來た所は主として清國の教育事業に關係して居る譯で有ります。而して私は十數年間教育事業に從事して居りまして、女子教育に付いては、多少の經驗と趣味を以て居るものでありますから、此度清國を視察したに付いて、知名の人士と會合したる時清國の女子教育に關する談論も致しましたから其れ等の事を御話したならば、女鑑の一ッの材料とも成るだらふと思ひます、夫れで、段々號を追うて掲載するとに致しませう。

夫に就いて第一には旅行致しました順序に付いて地理其他に關する、雜觀を申し述べやうと思ひます。

(一)上海は江蘇省の松江府上海縣に屬して、道光二十三年即ち西暦千八百四十三年に阿片戰爭の結果に依りて、開港したる清國第一の貿易場で有

ります。
本港は我が長崎とは、四百七十三海里、横濱とは一千四海里で有りまして、長崎よりは一晝夜半で到着致します。私の此地に到着しましたのは、十月の二十二日で有りましたが、海上も極く隱かで、殊に船中にはかの有名なる清國の碩儒呉汝綸氏が乘込むで居りまして、種々敎育上の談話をして參りましたから大層面白く航海しました。
而して上海は道路が、四通八達して居りまして呉淞には松江鐵道あり、又楊子江に依つて數千海里の間、船舶を通じ、芝罘は五百十一海里、寧波は百三十四海里、福州は四百二十海里、厦門は五百八十海里、香港は八百二十六海里で通じまする。且つ、また黄浦江に依つて杭州に達し、呉淞江に依つて蘇州に達し、大船巨舶が輻湊して、皆な十余町もある棧橋に横付けしてあります。市街は悉く宏壯なる煉瓦造りでして、我國の如きは比較すべき土地は有りませぬ、一寸申せば、參謀本部や丸の内の煉瓦家屋の如きものを以て、市街をなして居ると云ッて、宜からふと思ひます。道路は余り廣くは有りませんけれども、皆セメントを以て敷き詰めて、始終蒸氣々鑵のロールを以て地ならしをして居ますから、なか〳〵立派で有ります。土地は卑濕の地で、以前は所謂上海熱が流行したさうで有りますけれども、今は水道が開けて、衛生上の注意もなか〳〵屆いて、居ります。
市街は英租界、米租界、佛租界の三區域に分れて居りますが、船舶は、主に米租界に碇泊して、我が領事館や、郵船會社も、其の内にあります。英租界は最も繁盛な地でありまして、殊に四馬路は東京で申せば、恰かも銀座通りの樣な處で、おまけに花柳社會も雜居して居りますから、非常な

雜沓で有ります。夫れに引かへて佛租界は割合に淋しく有ります。また、英租界には河岸に公園の設が有りまして、種々な花卉を栽培して、其四季の花が最も奇麗に咲いて居りました。公園の中央には音樂堂を設けて、一般の人に聞かして居りますで女子供は始終其の公園内で遊戯をして、ツマリ幼稚園や、小學校の運動場の様に思はれます。而しながら小兒等も其の公園の植木や他の物を少しも、障害しないのは、公德發達の結果として、實に感服に堪えませむ。所が情けない事には、支那人は其の公園内に出入するのを禁じられて有ります、夫れで別に其の近邊に公園を拵えて居ります。

上海はまた、二十八箇國余の人種の集合地でありまして、殆ど世界の人種大博覧會の體裁であります。我が國人は二千人近く有つて、主に米租界に居住して、大きな商店は正金銀行、郵船會社、商船會社、大東汽船會社、東和洋行、同文滬報舘、其の他雜貨店で有りますが、歐米人の商舘等の宏壯なるには比較すべきものが有りませむのは遺憾の至りであります。教育上の事に就いては、東亞同文會の同文書院が佛租界の方にありまして盛大で有ります。支那人の學校では、南洋公學と云ふのがありまして、なか〳〵外觀は立派です新聞は、申報、中外日報、蘇報、同文滬報、其の他歐米人の新聞が、盛に發行されて居ります。書店は主に英租界にありまして、近來は我國の圖書を翻譯したものが、大に發賣されて居るのを見受けました。

租界内の整理は、領事館、工部局、裁判所、警察署、郵便電信局、學校病院等がありますが、殊に警察に於ては、六尺以上の印度巡査が厳めしく立ツて、其の上官としては歐州の巡査が夫れを監

督して居りまして、其の下級には支那巡査が居ります、外國人に關する訴訟は各國領事舘が、管轄して居て支那人に關しては別に會審衙門が有つて管理して居ます、行政機關としては、市會が有ッて自治政を行うて居ります。（つゞく）

本號口繪に掲げたる清國風景畫は本記事の寄稿者たる國光社顧問阿多廣介氏が昨冬清國漫遊の際もたらし歸りたるものなり猶次號以下見聞談の進むと共に風景畫及び風俗畫等もまた續々掲載して讀者の淸覽に供すべし

百人一首及び歌賀留多の由來

櫻井雲軒

新年の遊戯として、今日到る處に百人一首の歌賀留多の弄ばれない事はありません、依て百人一首と云ふものは誰が作つたものであるか、何時頃の者であるかと云ふことを述べまして、序に歌賀留多の由來を少しく述べましよう。

百人一首の作者に就きまして、古くから言ひ傳へられて居る説は、藤原定家卿が小倉の山莊に隱居して、障子の、式紙形に古人の歌を書いたものを、後人が集めて百首としたのであると申して居ります、先輩の研究によりますと、それは誤りであります、今それを、述べます前に、定家卿の略傳をかい摘んで述べましよう。

定家卿は關白藤原の道長の末で、和歌に名高い五條三位俊成卿の子であります、母は美福門院の女房伯耆と申した人で、應永二年に生れて、仁治二年二十日正二位權中納言に任せられ八十歲で薨じました、性質は頗る急の方で、自ら才氣を負ひ常に自分の不遇を嘆じて、怨嘆の言、往々詠歌の

中にあらはれて居るのを見ても知れます、で小倉の山莊に引込みましたのは、天福元年に祝髮して僧となり、名を明淨と改めてからで、それからして此百人一首を書いたと申す事で御座います。

扨定家卿が老後小倉山の別莊に隱居して、百人の歌を一首づゝ色紙形に書いて障子に張つたものを、後に子息爲家卿が作者の名をつけて世にひろめられたと云ふことが一般の説で、百人一首とも小倉山莊色紙吟歌とも申したそうですが、併し疑はしいことには、集の中に定家自身の歌がある是は少しく不遜な行であるかと考へます、又あれほどの大家としての撰では、餘りに杜撰なものが多い、人丸の歌の如きは、別にもつと佳調なものを見出すことが出來る、此等の點に於て百人一首は定家の撰でないと云ふことが、疑へば疑はれる事實であります。

此説で疑を起して研究されたのは、契冲の弟子で樋口宗武と云ふ人と、水戸の學者の安藤年山と云ふ二人であります。尤も契冲は百人一首改觀抄と云ふのを「著して一見識を立てゝ、解釋をしたものですが、此人も疑はない譯でもなかつた樣で彼の改觀抄の初めにも「入べきがいらぬもあり、入たるも作者のむねとおもはぬもあるべければ云々」とあるのは、百首充分精撰とおもはなかた書ざまであります、併し契冲は次に云ふ反對の論據となつて居る明月記を見なかつた時に云ふた言葉であるからして、その論據は薄弱であるとは申しながら、實に眼の高かい文であります。

樋口宗武は契冲が死んでから後に、此改觀抄に追考と云ふものを書きましたが、其中には明かに此の世の流説を打破る丈の證據を上げました、年山紀聞の中にあるのも、同じ論據から立論せられ

たので、此二人の説が反對派の本となつたのであります。

それは定家卿の明月記と云ふものゝ中にある事實と世間の傳説とが矛盾して居る點から起つたのであります、明月記の嘉禎元年四月(四條院の年號で定家に此年七十四才でした)二十七日の條に、百人一首を書いた時の事を云うて居ります、

予本不レ知書ニ文字一事

とあります、全く定家卿は書は拙かつたさうです、處が其次に

嵯峨中院障子色紙形、故予可レ書由、彼入道懇切、雖レ極ニ見苦一、愍染筆送レ之、古來人歌各一首、自ニ天智天皇一以來、及家隆雅經卿



と記してある、此文からして前の二人は疑ひ初めたのです、即ち其歌數が百首であつたかどうだか、その事は見えない、そして定家卿は只筆を染めた許りである、宗武は追考に次の如く云ふて居る、

此百人一首の一部の大意を古來つたへ來れるは定家卿山莊小倉山にありしに、右にいへる中院入道(嵯峨の也)の望にしたがひて、書きて送られて色紙形の事を見おやまり、牽强附會して、定家卿の新古今集は花過ぎたりとて、わが本意をあらはさんがために、此百首を撰せられ、山莊におされしやうにいへる古抄の説百端あれど、明月記、風雅集の詞書を考ふるには、はなはだ信用しがたし、

とあります、で嵯峨の中院入道を云ふ人は、誰であるか宗武はそこまでは研究しなかつたらしいが、年山は彼の入道を考證して次の如く云うて居る、

そもそも中院入道は誰といふことを知らず、爲氏(宗家の二男)の母の宇都宮彌三郎頼綱が女也頼綱入道して蓮生といへり、此入道の事歟、

と云うて、此色紙は入道の懇望によりて定家卿が京にて書いたものだとし、「自ら山莊にて書給ふよしいふは如何」と註してあります、そして「歌を撰びたるも彼の入道にや」と云うて、次に左の如く述べてある、

雖極見苦云々とある書きやうは、たゞ染筆のみにて、定家卿の撰びとも見えざる歟、蓮生法師も歌よみて集にも入りたる人なれば、是ばかりの物撰ばんもかたかるまじ云々、

と申して居る、世の人が多く撰者を疑ひ出したのは全くこの二人が右申した樣な説を立てましてから起つたのであります、是れは今日でも學者の間に於て有力な説であります。

然るに文化文政の頃になりまして、香川景樹は初めは百人一首は百首に限られて居つたものでなくて、後に子息の爲家が集める時分に、百人一首宛としたのであらうと、百首異見と云ふ本の中に申して居ります、是も亦尤もな説で、明月記の文に合せて見ても、然うであらうと思はれます。

今日の所では唯之を疑ふより外はないので、正確な考證を生み出すことは出來ないのでしやう、それは明月記の文を能く讀み、能く味へば分ります、要するに前に述べました二大人の説の外は、據のある反對説は見えませんが、併し一寸考へて見ましても、百人一首が定家卿の撰であるとし

ては、定家自身の歌の載つて居ることく、其歌が餘り杜撰であるとの二つの點からして、疑はれるのです、而して又此等の說に對する、反駁となる論據もありません、で當時は定家卿が一も二もなく歌壇の立物として崇拜された時代でありましたから、斯樣な僞作家があつて、定家の名をかたつたのかも知れません。

先づ此れで百人一首の大體の說はすみました、次に述べやうと思ふのは、この百人一首が何時頃から歌賀留多となつて玩弄せられるやうになつたかと云ふことです、それに就きましては、先づ歌賀留多の起源を述べねばならぬと思ふ、勿論百人一首の歌道の上から賞玩せられたのは、當時定家の流儀は二條家の流であつて、それが骨髓となつたことは明かである、こゝに述べるのは賀留多としての百人一首の意味であります。

此歌賀留多遊びの起りましたのは、德川の初年即ち天正以後からのことであらうと思はれます、これとても此時代に偶然流行するやうになりましたのではなくつて、古くから歷史的に變遷を經て來たもので御座います、それならば其以前は何が行はれて居つたかと申しますに、「それは貝おほひ」と云ふことです、今これについて少しくのべましやう。

（つゞく）

新流行衣服模樣

三井呉服店意匠部員　籾山邦季

現今の衣服模樣及び染色に就て、新流行界の趨勢を諸君に紹介し、併せて其の圖按に就て少々所感を述べる積りです、當時は衣服の染色即ち地色が總べて濃厚のものが行はれ、隨て其れに施す模樣は一般大模樣が多く用ゐられるのです、そは地色濃厚であれば、小模樣は總じて引き立ちが惡い故であると思はれるのです、模樣の色の配色も成る可く少い方が配合が善いのです、且つ模樣の或

ろ部分だけ、白上りにすると濃厚の地色に對し、頗る引立ちがよく華美に見へる譯合で、この模樣の或る部分を白上りとすることが、現今の流行界に於ける嶄新のものと思はれます、之に反し、濃厚の地色に彩色した細い模樣を附けたならば、地色との配合が惡いから、模樣が引立たぬ譯合です。

今樣向の衣服も亦同樣、地色は總べて濃厚が流行するので、色模樣を施すにも總べて淡泊な色でなければ、地色の濃厚なるに出合ぬ譯合です、假令へば牡丹の模樣とすれば、花を華美な友禪染にして、葉は極く淡泊な色で染め上げ、遠くに在る葉の一部分は白上りとして少しも色を着けぬ方が引立がよく、且つ模樣としても變化があつて頗る趣味があるのです、先月歌舞伎座で新橋藝妓の手踊に用ゐた衣服を弊店で染めましたが、其に就て實驗したところでは、同座の如き廣き場所、或は夜會などに用るものは、普通の者と異る點が多い事を發見したのです、最も製作する初から、此の心得が無いではなかつたのですが、實際用ゐて見ると、又た得る所が多かつたのです、



同座で用ゐた衣服は地色は黒で、それに高雅の模樣を附けたのです、使用する場所が場所ですから、成る可く立派に華美なものを撰んだのです、それに施した模樣は散り櫻と散り楓と、こぼれ松葉を模樣の材料とした圖按で、楓の或るものは大きく友禪で染め上げ、又或るものは輪廓取りにして白上りにしたのです、又櫻も白上りとして松葉は色差しとしたので、随分思ひ切つて白上りのものを多く用ゐた積りでしたが、斯んな廣い場所で夜分用ゐて見ると未だ白上りの部分が少なかつたのです、且つ模樣も今少し大きい方が善かつたかと思はれたのです、又松葉に色を着けたのも、或は失策かもしれませぬ、又或人が此の模樣を評するに地落し染めよりも、寧ろ暈ぞめの方が適するであらう、何故なれば多人數揃のものであるから、遠くから見た時に、暈染の方が華美に立派に見へるであらうと云つた人があるのですが、それは當店で初から氣附なかつた事でもないのですが、黒地ものは地落し染に比して暈染が比較的困難であるので、費用も亦随つて多額を要するので、地落し染を撰んだのですが、

若し此等の事情を除いたならば、無論或人の說明の如く、暈染が適當であると思はれるのです、以上述べた通り模樣の或る部分に白上りを多く使用する事、及び地落し染よりも暈染を擇ぶ事等は最も適當な事であると思ふのですが、此に附て私が更に熟考して見ると、暈染よりも取形模樣としたならば、染も容易で引立ちもよいと思ふのです、その取形模樣は假令へば雲形、菱形、などとして、黑と白との部分を充分にはつきりさせて、それに白茶などで模樣を取形の上へ、黑と白との部分を擇ばず置たならば、昔かつたであらうと思ふのです、乍しこの取形染に模樣を置くのは私の新案と申すではなく、舊からある趣向ですから、地落し染に施す模樣の方法を猶ほ熟考したならば、改良する餘地のないではないと思ふのですから、更に向後何人かによつて名案が顯はれるかも知れぬのです、又強て取形染を評すると、暈染に比して少しく究屈に見へる缺點がある、要するに廣場夜會等に用ゆるものは、必らず白い部分を可成多くあつたならば、模樣の引立ちがよい染色に濃い色を用ゐと云ふ事は、圖案家の心得て置きたい事であると思ふのです。

姉妹の運命（西洋御伽話）

天風　譯

一寡婦に二人の娘がある、一人は容貌端麗、資性溫勉といふても、敢て過言ではないが、一人は、其の正反對で、醜惡して怠惰者なる、所謂手の付けられない少女ともいふべきであつた。

然し、其劣りたるものは、寡婦の正しき娘であるから、寵愛至らざるなしであるが、美くして賢なる少女は、繼子であるから、常に冷遇虐待に泣きつゝあつた、憐れなる少女は日々に氷よりも冷かなる井水に衣を洗ひ、指頭碧血班々たるに至るまで、杼を動かすの手を止め得ない、一家の下婢といつた方が、寧ろ彼に與ふる適當な、名稱であらふ。

一日織臺に働きつゝ、遂に其手を破ぶつた、糸卷は血の痕を以て紅に染つたから、之れを井水にて濯がんと試みしに、誤つて糸卷は、手中を脫したる刹那、水底に沈紋を生じて、戞たる音は、高く少女の耳に響いたのである。

漫錄

泣いて事實を繼母に語たが、答は冷酷氷よりもなほ冷かで、自分で落した物は、自分で拾ぶが宜しいと云ふのである、涙に咽びつゝ、再び深き井の底を眺たが、懊惱せる胸中、施すべき術もなく、哀れ一の糸卷を操らんとして、已れまづ凄愴たる水に向て飛び込んだ、疑もなく彼は正氣を失ふたのである、然し再び彼は本心に立ち歸た時は、不思議なるかな、天華繽紛、日は麗はしく大空に輝き、千萬の名花、今を盛りと咲き亂れたる間を、一條の道路が、坦々として彼を導いたのである。

少女はその道を進み行きしに、忽ち竈に充滿せる麵麭に出逢ふた、すると、麵麭は奇しくも少女に聲高々と話しかけた、久しく竈にあつて、最早燒け過ぎてるから、早く我を引き出して呉れ、少女はすぐに、その云ふが儘に麵麭を引き出して、更に進み行くと、又林檎の樹の叫ぶのを聞いた、吾等を震撼て呉れ、と、諸々の美しい果實が願ふから、彼は其言の如くに木を震撼ると、果實は雨の如く地上に落ち、忽ち小丘の如くに堆積した、其にも構はずして進み行くと、今度は小さな一軒の小屋があつて、中には年老いたる齒の大きけなる恐ろしき老嫗が居て、少女の遁れんとするのを呼びとめて、恐れるな、愛らしき子供、と云ふた。

更に老嫗は語を繼けた、たゞ汝が家に居る樣に働けば其でよい、私の蒲團を、常に敲いて、中の毛が世界に雪降る如くに飛ぶ程にすれば、汝は幸福にして居る事が出來る、少女は餘儀なく此處に止まる事になつたが、毎日蒲團を敲いては居るも、絶えず一身の平安を思うては心痛に堪えない、然しかくして居れば、叱言も云はれないで、其日は彼にとりて幸福なものであつた、此處で云うて置くが、老嫗の名はホルレ婆といふので。

成程、毎日々々樂ではあり、家で繼母に虐待らるゝよりは餘程よい、然し少女は、まだ年は幼し、何んとなく其日が永い樣に思はれ、所謂懷鄕病にかゝつた、最早少女は堪え得なくなつて、遂に之れを老媼に打開けた、すると老媼は笑ひながら云ふた。

其は私もとうから感付て居た、而し汝も忠實に働いたから、又再び元の處へ連れ行かう、と云ひながら、少女の手を引いて、大きな門のある處へ來た、戶は開かれる、黃金の雨は、眩きまで降つて來て、黃金は皆少女の衣に着いて、遂に全身は美麗莊嚴なる光を放つやうになつた、そこで、老媼は徐ろに云ふには、汝は人に優れて勉强するからかく美はしき黃金を以て飾られるのである、黃金は皆汝の物となるのだ、と云ふと間もなく、老媼ホルレは、又彼に糸卷を與へたとか思ふと戶は閉ぢられ、少女は己が家の間近かなる、又此世界に置かれた、そして彼は井戶の上に座を占めて、かく歌つて居るのである、

去りし少女の今日こそは、
こゝに黃金に飾られつ、……………

黃金に裝はれつゝ、彼は家に歸り來た、すると彼の姉なる少女は、之れを見て羨ましくて堪えられない。そこで妹から一伍一什の事情を聞きて、彼は直ちに織臺に登つて、われと其指を傷つけて、糸卷を血に染め、之れを井底に投下して、遂に井に躍り込んでしまつた、すると間もなく、妹の云へるが如き靈妙なる天地に來たつたが、麵麭は直ちに、少女に向ひ竈より引き出されん事を嘆願する、然し、少女は己れの汚れん事を恐れて、敢て其願を許さない、林檎の木も亦震撼れん事を願ふた、然し落ち來りて頭を傷けん事を恐れ、敢て之

れをあさない、直ちにホルレ婆の小屋に行きたり、其歯の大なることも、既に聞いて居たから恐怖れない、而して又先の少女の如き命令を受けた。成程、最初の日は、力のあらん限り、蒲團を敲いて勉強して、ホルレ婆の云ふ處を悉く從ひ守つた、之れは疑もなく、黄金の贈物を受けんと思ふが故である、然し二日目に至つて、彼はそろ／＼其地金なる怠惰者の本性を現はし出した、三日目には、更に甚しい、四日目には、最早朝寝をするに至たつた、ホルレ婆の欲するが如くは、蒲團を敲かず、かつ中の毛は少しも飛ぶが如くに至らない、ホルレは遂に其務を止めさするに至つた、少女は最早黄金の雨を得るにちがひないと喜んでる中に、老媼は例によりて少女を門の處へ連れて行つた、門は開かれたか、思ひきや黄金の代りに、あられもなき一桶の松脂を忽ち少女の頭より浴びせかけられた、之れは汝の務の御褒美だ、と云ふ間もなく、ホルレの姿は既に消え失せて、彼は全く汚に覆はれつゝ、元の井戸の傍に歌ひつゝあつた。

去りし少女の今日こそは、
こゝに汚におほはれつ、………

松脂は、最早取り去る事が出來ないで、醜にして怠惰なるものは、遂に一生を益醜悪の相恰を以て暮すに至つた。（をはり）

黄金の山づと

文學士 濱田紅於

◎出發

白露江に横りて、秋氣正に闌なり、東北の健兒、髀肉を生じ、寶刀夜毎に泣くと傳ふ、乃ち十月十九日を以て五城を發す、全軍四十餘名、予と肋骨

先生これに監す。
鹽釜埠頭に待つこと二時、辨龍丸に投して松島灣を過ぎ、大海に出づる所、潮流相會して、船の動搖甚だし、白鷗綿く所、狂瀾洶湧す、船室に困臥して、頗る懊惱するもの鮮なからざりき、予の如きも亦その一人なり、已にして波平らかに風軟にして、船は順風に乘じ、波を蹴つて渡波に停り、更に二隻の小舟を引て、金華山に達す、時正に午下二時。

◎金華山

船を捨てゝ白沙を踏み、華表に入る、路傍の水成岩多く雲母を混じ、日光に映じて燦爛目を眩す、金華山の名蓋しこゝに原づくならむ、白沙盡くる所、平坦なる芝生あり、芝生の間磴道遙かに通じて、遂に門に入る、門を入れば域内廣くして、檜の香薫しき社務所あり、玄關の軒には、三韓降伏の圖を刻す、社務所の右に拜殿あり、社掌奥海氏出で迎へて、語甚だ慇懃なり、輕裝して更に燈臺に向ふ、肋骨先づ脚腫あり、予獨り監督の任に當る。
燈臺は社務所を距ること一里半、崎嶇たる羊腸、步行甚だ艱む、蒲伏して峻坂を登り、清水に嗽きて渇を治す、軍歌の聲忽にひゞいて、山靈ために消魂せしならむ、樹木蔚葱、半霜に飽く、林間に狙公あり、人の跫音を聞いて、狼狽して叢に隱る、其數大小幾百あるを知らず、千匹猿とは蓋しこれならむ、山深くして浪の音さへ聞えずなりぬ、水は岩に躓きて咽ぶが如し、十餘坂を踰えて、辛じて燈臺に達す、燈臺に達せむとする前數町にして芝生あり、野雞幾十群れつゝあそぶ、人を見て忽ち飛翔す、平家の公達ならねば、鳥の羽音には驚かねど、あはれ惜しき心地せり。

燈臺長高津氏に面して縱覽を請ふ、氏快諾して導く、三々五々燈臺に入りてその構造を觀る、中央に大洋燈あり、赤色の火屋四重にこれを掩ふ、其周圍は三稜鏡を連結せる框三面を以て圍繞せらる二面彎曲し、一面偏平あり、二十秒にして一廻轉す、海上よりこれを望めば紅白の光二十秒毎に交代すと云ふ、委曲の說明は予の能くする所に非るなり、高津氏の邸に至りて相懇談す、邸は海上を拔くこと十七丈、若し夫れ颶風吹きすさぶことあれば、狂瀾逆卷きてその玻璃窓を洗ふと云ふ、聞くだに物凄きを、人氣稀なるこの山里に住まひつゝ、風の聲浪の音の外、訪つるゝものなきは、いかばかりさびしかるらむ、嗚呼せまじきものは宮仕へなるかな、邸を辭して霧笛を觀る。

霧笛とは白霧深く立ちこめて、往來の船舶行きなやむとき、これを鳴らしてその位地を知らしむるものなり、皆蒸氣を以て機關を運轉す、掛員一々解說して甚だ詳細を極めつ、やがてこゝを立出でて近隣の望樓を訪ふ。

望樓は海軍省に屬し、往來の軍艦を監察する所なり、望樓長を小池氏と云ふ、刺を通じて縱覽を乞はむと欲し、その邸に近けば、海を見はらす一小室、障子の中にゆかしき爪彈きの音、かゝる鄙にて、この妙音を聽くとは誠に思かけざりし、そも何人のすさびぞと、新田左中將ならねど、心にくきまゝに、しばし立つくしたれど、遂にその人を見ることを得ざりき後にて聞けば、小池夫人なりしとかや、住めば都とはよくぞいひつる、小池氏出で來りて一々說明す、軍機の秘密を洩さむ虞あれば、こゝには云ふ所なし。

豫期の縱覽を了へたれば、いざやまからむと、歸路につく、蒼然たる暮色遠きより來り、烟波浩蕩

として涯際なし、たゞすざましき波の音を聞くのみ「八潮路の潮の八百路の八潮路の、潮の八百會の浪の音かな」、波路の果や亞米利加ならむなど、うちかたらへば、氣宇頓に浩然として、必神頗る旺なり、圖南鵬翼何時振、久待扶搖萬里風。

宵闇の山路甚だ行き難し、數個の燈火を命にて、木の根岩角ふみさくみ、聲をかはして辿り行く、嚮導一人側に在り、この山の靈奇を語りてやまず、九月の頃には必ず天狗の怪ありなど云ふ、この人の怪談に耳傾けしより、道頗る捗どりて、復疲勞を感せず、七時社務所に還ることを得たり、嚮導先生の功沒すべからず。

沐浴して室に上れば、肋骨先生已に奥津氏と相對して、連りに羽觴を飛ばせり、席に就いて數盃を連引すれば、陶然として耳熱す、奥津氏活達にして城府を催けず、快談九時を過ぎて蓐に就く。

つとめて四時半床を出づ、朝日の海を出づるを見むとてなり、月光冴えて露いと白し、東道主人三人あり、坂路を攀づること頗る速なり、予一行に後れて、谿谷に道を失ひ、奇岩に佇立すること少焉、學生二人追ひ來る、樹蔭暗くして道辨ずべからず、逡巡する多時にして、遙に一條の道路の如きものを認む、速に之れに赴けば、思ひきや材木の堆積せるあらむとは、已にして天漸く明なり、三人行きくれて、聲を限りに叫べば、谷を隔て、應ずるものあり、噫あらぬ方に迷ひ入りぬ、旭日の躍出見るべからず、意を決して歸路を求むれば、拂曉過ぎりし所皆峻嶮、その左一間ならずして、坦路の山巓に達するを見出しぬ、馬鹿〳〵しさ何ぞ堪へむ、社務所に歸りて、奥津氏と倶に築山のわたりを徜徉す、うらゝかなる小春の日影、快きこと云ふばかりなし、澤々たる麋鹿能く人

に馴れ、呦々として妻呼ぶ聲、物のあはれをおぼゆ、十一時過ぐる頃、一行悉く歸り來りぬ、秋の空定めなければ、早く海を踰ゆるに如かずとて、午下一時金華山を辭して、山鳥渡を渡りぬ。

露の干ぬ間

後藤紫浪　抄譯

遠く連る幾脉の懸崖、中絶えて谿のごと見ゆるあり、水泡は飛び來て黄金なす眞砂を洗ふ、赤瓦にて葺きたる家は埠頭をめぐりてこゝらたつ、其彼方には朽ちかゝりたる伽藍なども見ゆ、其所を過ぎ、町を登りて行けば、檣高くかけたる風車場に至るべし、後は和蘭人の墓地にして傍なる榛樹の林は緑色濃く茂りあひ、秋さりくれば、木の實拾ふと集へ來る、人いと多し。

百年ばかりむかしの事、此磯邊に來て遊ぶ三人の幼兒ありけり、一人はお淺とて港に名うての可憐の少女、一人は房吉とてかの風車場の一人息子、他の一人は猪之助と呼び、一年、冬に破船の折、藻屑となりたる水夫が孤兒、……此三人、浪打際に散り亂る木切、藻草、輪に卷きたる繩、黒うなりたる漁網、さびつきたる錨、などの間に、たはむれ、あるは砂もて城など築きては浪の來て打破るを見て笑ひ興じ、其浪を追ひ行くかと思へば、散り碎くるに驚いて逃ぐかくて砂に寫つす彼等の小さき足跡は、日毎浪に洗はるれど、されど其跡はまた一日とて此磯に消えたることなかりき。また、彼の崖の麓に洞ありて其中に入りては、此三人、飯戯などして遊ぶこともあり、猪之助一日、主人となれば其翌日は房吉にてお淺は、いつも妻の役をぞ勤め居たり、猪之助續け樣に幾日も主人となれば「こゝは我家なり、こは我妻なり」、「何とや、我のもよ、疾にせよ」など爭ひて、はては引組めば頑丈の猪之助、いつも勝ちて主人となるに、房吉は鋭き眼に怒りの涙湛にて「あな憎」と叫ぶ、これ聞きて、少さき妻、貰ひ泣きして妾が爲めの爭ならむ止めてよ、妾は御身達二人の妻となるべければ」などいふこと、嫉妬といふを知らず。

人生を一日に譬ふれば曙とも言はむ朱唇紅顏の少年は、はや過ぎ去りて二人が胸に燃え初めし戀は、恰も登る朝日の眩さにもたぐへむか、二人は等しくお淺に心を寄せて戀しと思へり、猪之助は胸の思を打明けて、かくと語りしかど、房吉は口にも出さず、少女は、房吉には分けて優しく見えしかど、猪之助を嫌ふ事もいと切に、其身さへその故を知らず、人に問はるれば、あらじとのみ答へけり。猪之助は健氣にも心定めて、及ばむ限り金を貯へ、舟を購ひ、お淺が爲めに家を構へむとの心、しばしも胸を離るゝ事なし、されにや、其業も日々に榮えて、遂に、此磯邊幾里がほどは、猪之助が如き幸福者、氣丈の者、又愼み深き者なしとて、人みな賞へ合ひけり、まして一年あまりも、商船に務しければ、

かいなでの船乘にもあらず、行潮の大浪に溺れなんとせる人、三人まで救ひしかば、こよなくもてはやされけり、二十一才の春の頃には思ひ定めし船を購ひ、お淺が爲めには、かの風車場へ登り行く、狹き町の中央（なかほど）にさゝやかなる一構を營みやりたり。

華燭の典の擧けられて、御寺の鐘の樂しく鳴りしより、七年の春秋、げにうれしき七年の春と秋、　二人の身の健全、こゝろよき相互の眞情、正直なる業、　は夢と過ぎ、二人の子さへまうけたり、其女子の生聲（うぶごゑ）あげし時、猪之助が心には、氣高き希望湧き出でぬ――及ばむ限り金を貯へて、父よりも母よりもまさる教育を授けむと　其希望も、二年經ちて男の子の生れ出てし時、又もや新しくなりぬ。げに、此子こそお淺が目には天津稚兒とも見ゐしか、夫が涙たける靑海原に舟出せる其間、ある魚賣るとて陸路を旅せる其獨居の徒然（つれ〴〵）を慰むる、こよなき天使（エンゼル）なりける。

☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆

定めなきは、實に人の世の常なるかな、猪之助が住みける村の北の方、五里計に港あり、陸路よりしてまたは舟に乘りて折々は此港に行く習なりき、その日も例のごと行き、あだかも碇泊せる商船の檣に登りしに如何なる機なりけむ、足滑べらして甲板へと落ちぬ、船人等打驚きて援け起して見れば、あなその足は碎けたり、醫師の治療受けゐる間に幾日と日は經て、彼の生業はあだし人の手に占められて、いとし妻子は飢に泣く境遇とはなりたり、あまつさへ、かよわき子さへたま〳〵生れ出でたり、あはれ鬼神をも取りひしがむ益荒男の子も、むなしく病床に打伏して此有樣を見ては、なでふ泣かでは居らるべき、いかで嘆かでおらるべき、眠れば子等が辛き其日暮しのさま、可憐の妻の物乞ひ歩くさま、あり〳〵と夢に見ゆ、目覺めては、いつも、「我此身は、よしや如何になるとても、妻子がつらき身をば救はせ給へ」と天神に祈るのみ。此事、偶然、猪之助が、先に務めせし船の所有主の耳に入り、その人物もよく知りて、頼母しの者よと、兼て思ひゐしかば、「支那通の船にて、水夫長一人足られば、行かじや、出帆には、まだ一月餘りもあり、しかも此港より出帆すべし、いかに猪之助」と問ふ、猪之助は、心籠めたる祈禱の、神も憐と思召して受納ましましたること〳〵、心勇みて、直ちに承諾ひぬ。

岸邊に立ちて沖を遠く見やる時、一叢の黑雲太陽をかくせば遙か彼方にのみ日光のさす見ゆて其中間は黑陰となりぬべし、今儻かに希望の光明を見出したる猪之助が目には、其身に降りかゝる不幸の陰はかの沖邊の黑陰ほどにも映らざりき、されど〳〵思ひ返せば、可愛の妻子、われなくばいかにとて煙たつべきか、小舟の櫓を賣拂はむか、――かくなもしきかの舟を！泥濘に艪押し、能とりたること、そも幾度ぞ、――猪之助が其舟を思ふ心は騎者の馬にもひとし――

（つゞく）



小説

美しき夢

栗島狹衣

（上）

艶々とした髪を後へ捌いて、菫色のリボンで容よく結だ愛たげさ、矢絣の糸織にカシユメルの衛葡茶袴、手には紫の小包を抱へて、女唐靴の飾紐のついたのを履いた足つき、それが何としてか進まぬげに運んで、色の白い二重瞼の、眼のぐりぐりと可愛らしい、平生ならばお轉婆と謂れる程の活潑な處も、今日はどこへ隱れたのやら、浮かぬ顔附で自宅の門前へとかゝつた。

某省で局長を勤めて居る船越正友氏の長女文江といつて、今年は十五の花の蕾、高等女學校の三年生で成績もクラスの中で十指の優等生に數へられるのであつた、考へに考へ込んで、自宅の門の中へ入つたのも知らずに、矢張り下向勝ち、出逢頭にあつた女中の加代が、訝な顔して凝と見て居たが、餘りの事に御用へ急ぐ足をとめて

『お孃様』

とよびかけて見た。呼ばれて文江もハッと氣がついた。

『おゝ加代かえ、吃驚したッ』

『だつても御孃様が餘り考へ事遊ばして居らッしやるンですもの

『考へ事なんかしないツ、たゞ茫然して居たから吃驚したのよ』

『茫然なんぞ遊ばしちやァいけませんね、狐に魅まれますよ』

『おほゝゝゝ、加代はをかしな事ばッかり謂ふ人だね』

と口には威勢よく謂ても、矢張り肚の中には考へ事の塊がごろッちやら、文江は淋しい笑を面に浮べて、つと玄關を右に折れて廊下づたひに自分の居間へと入つて仕舞つたが、袴をとつて叮嚀に疊んだあと、おッ母様のお居間へ挨拶に行つて來て、それから机の前へ淑かに座つた、抱へて來た小包から、筆記帳と鉛筆とを出して、少時机の上で繰廣げては考へ、考へては二こと三こと書き付けては見たが、どれも趣向が染まぬと見えて、そのまゝ鉛筆をばたりと捨てゝ溜息をほつと吐いた。

ところへ威勢よく襖をあけて飛込むやうに這入て來たのは弟の敏夫で、年は十歲の遊び盛り、薩摩飛白の筒袖の羽織も活潑で格好よく、小さな肩を聳やかしてつと文江の側へやつて來た。

『姉さん、あのお話の續き……ねえ姉さん』

といひかけても文江はたゞ莞爾と笑ふ許り、

『話して頂戴な、よウ姉さん、僕は健雄さんが軍隊遊びをするッていッたんだけれど、あの話の方が余程おもしろいから、態々やつて來たんですよ、だからねえ、姉さん』

敏夫は端座して兩手を膝に、頻と話を促して居る、文江はかるく肯いて、

『晩にしませう、ねえ敏さん』

『いや／＼、晩は鈴木がしてくれるんですもの』

『ぢやァ今鈴木さんにしてお貰ひなさいな』

『忌ですよ、姉さん鈴木のは嘘ばッかりいふンですもの、姉さんの勇敢なる少年ね、僕アあれが一番好きですよ』

と晴れ〴〵しい調子、

『でもねえ敏さん、姉さんは今學校の宿題があるンですもの勘忍して頂戴ね、晩にしますから』

『學校の宿題、仕様がないなアーもう健雄さんも行つちやツたし、ぢやア鈴木の話でも聞きませう、――姉さん此處で聞いてよう御座ンすか』

『はあ、よう御座ンすとも』

文江の考へて居る事は全く學校の宿題であつたのだ。

『鈴木々々、おうい鈴木ッ』

敏夫の聲に應じて出で來た書生は、此家の玄關番で鈴木勗といふ九州男兒、率直で勤勉を以て主人にも愛されて居るが、目的とするところが軍人丈けに、萬事に勇氣のある豪放な處がよく見えるのである。歳二十一長軀赭面の大丈夫、どんつく着物へ綿絹紬の兵兒帶を卷きつけて出て來た、

『坊ッちやん、宮本武勇傳の續きぢやらう、話そうかい、あんげな壯快な事アありまッしえんでせう』

と九州なまりの飾りッ氣なし、ところへ又乳母のお安も入つて來た、庭先から車夫の力藏も庭掃除を濟せて、椽先へとやつて來た、敏夫一人は大欣び、

『さあ、乳母やもお聞き、力藏お前へも此處へ來てお聞き、鈴木が宮本武三四の話をするんだから』

乳母は笑ひながら言ふがまゝに座つた、力藏も椽

から上つて片ッ隅にかしこまッて、

『いやどうも、鈴木さんの話ぢやア曾呂利新左衛門め跣足で御座やせう、坊ちやん欺かされないやうに用心して聞かなくッちやアいけませんせ』

と謂て、文江の案悶して居るのに氣がつき、

『坊ちやん、此處で始めちやア御孃樣の勉强のお妨げだ、あつちの書生部屋で伺ひませう』

文江はあわてゝ、

『いゝえ、いゝのだよ、敏さん搆はなくッてよ』

『いやいかん、勉强しおる邪魔になつてはよろしくない、坊ちやんあつちの部屋へ行んで話さう』

と鈴木も恐縮する、文江は笑ひながら

『いゝのよ鈴木さん、どうせ考へられないンだから、妾もお話を聞きますワ』

皆に氣の毒と思て文江は机からぐるりと膝を向かへた、敏夫はいよ〳〵大欣び、

『姉さんも聞くッてから、鈴木一生懸命になつて話さなくッちやいけないよ、いゝかえ鈴木』

『いやいかん勉强をやめてはいかんです、お孃さん何か至難い算術の題でも出おッたですか』

鈴木は眞地目になつて聞いた。

『いゝえ、作文なの』

『作文、記事文ですか、日用文ですか』

『記事文なの、紅葉狩つて題よ、よく出來ると御褒美が頂だけた上に、學校の雜誌へ載るのよだから皆競爭なの』

『そりやア容易ならん事じや、明後日迄ですかいよ〳〵容易ならん、僕も一寸とは加勢しますからしッかりお考へなさい』

小説

『鈴木さんも考へてくれて』
『考へますとも』
と頭を抱へて考へ出す、敏夫もお安も力藏もやゝ烟に捲れて無言ッて居る、
『紅葉狩ですな、よろしいッ　…うむ紅葉狩えーッと、紅葉狩』、
『出來て、鈴木さん』
『畧考へたです、待て下さい文章ですぐにいひますから、えゝと時維明治卅五年の秋か、吾一瓢を携さえて高雄の勝を探るか、滿山の紅、いゝかいゝかくれなアゐかね』
『ふむッ、妙な節をつけるぢやねえか』
と力藏がふき出す、文江は袖で口を掩ひ乍ら、
『鈴木さんそんな至難しいものは女にやいけないッ』
『はゝ、吾輩のやうではいかんかな』
『第一節附が可笑らがさ、お孃さん紅葉狩つてと矢張り長唄かなんかで謡ふ奴で御座やすか』
『唄ぢやアないのよ、文章なの』
『へーえ、文ッてと何でがすなソレあの手紙の文、あれで御座やせう、すりやア矢張り鈴木さん一筆啓上か何かでなくちやアいけねえや』
『馬鹿ア貴樣、日用文ぢやなかとぢや、記事文ぢや』
『雉子だか鷹だか判らねえが、お前さんのは少し唐人の寢言だ』
『力さん、お前さんのもいけないよ、ねえお孃樣紅葉狩ッて、とお能やお芝居でもいたしますあの鬼の出るので御座いませう』
『おはゝゝゝ、マア乳母や』
と突飛なお安の詞に文江は腹を抱へて仕舞つた。
『いや、そんげ謂ふてもいかん、僕が九州から

出て來て京の高雄山で紅葉狩をした事がある、その話をしやうから聞て下さい』
と鈴木が更に膝を進めた、文江は
『それは面白い、鈴木さんどうぞ』
『いやだア、僕は宮本の方がいゝなア』
『いゝえ坊樣ッ、紅葉狩ならどうしても鬼が出ますから面白う御座いますよ』
とお安はまだ判らない、敏夫はうなづいて、
『そんなら面白いや』

(下)

『お父樣、そんなにお急ぎ遊ばしちやアいけませんよ、あら敏さんそう上の方へ行つちやア姉さんが困るぢやありませんか』
と文江は一人で氣をもんで居る、父の正友は文江の手をひいて漸く中の茶屋までやつて來た、滿山の紅葉は紅の色のいづれ劣りなく蜀紅の錦を織りはへたともいはうか、日に照り映へて今にも燃える許りのうつくしさ、實にも二月の花よりもとは僞でない、殊に綠ふかい常盤木の其處此處に雜つて居る有樣は青地の錦の目も眩い位、と見れば脚下の清流は巖に嚙入て白く摧け、巴にめぐつて碧くたまり、一帶の銀水は遠く紅葉の間を奔て、見えつかくれつ、其處を下す筏士の姿もまことや畫中の人物と思はれる許りである、靜かに風流を樂しむ人も三々伍々、或は林間に酒を暖め、或は石上に詩を案ぜんとする雅は、人間の世界とはおもはれぬのであつた。文江は此景色に恍惚として、成程話に聞いた高雄山とは聞くにも勝つたいゝ景色、あゝこの山の姿かたち、此遊びの心持を書いたなら、紅葉狩の趣は充分である、今度もしそんな文題でも出たならばなどゝ、頻に考へて居つたが、眼の下、脚の下の清い流を見て、

「ねえお父樣、此川は何といふので御座ます」
と聞いた、
「おゝこれは有名な清瀧川だ」
「おゝ、お歌などにもあるあの清瀧川、まア奇麗な川で御座います事、」
「ぢやア、あのお山は、」
「あれか、槇尾山」
「へーえ、ぢやアお父樣あれは」
「あれか、あれは栂尾」
「みんな名高いお山で御座いますねえ」
といふ時、後で
「どうです、お孃さん、吾輩のいつちよつた通りでせう」
と、大きな聲でいつたのは、例の書生の鈴木、
「おや、鈴木さん、いつの間に來たの」
「今來たのですが、お母樣をお連れ申したです」
「あゝ、そうですか」
と見れば、母は眞紅に染めた楓樹の下の石へ腰をかけて、莞爾笑ひながら自分をよんで居らつしやる。
「おゝお母さま」
といひながら驅けて行くと、敏夫が一段高い石の上へ立つて頻に下の方を見て居たが、やがて喜んで足踏をしながら
「ヤア、乳母やが來た　お辨當を擔いで來た、うれしいな〳〵」
聲におどろいて見下ろせば、うね〳〵と九折の細道を車夫の力藏に、辨當の重詰を擔がせて、乳母のお安がせい〳〵謂てやつて來る、文江も一行の殖たのが嬉しいので、
「乳母やア、力藏」

とよべば、敏夫も精一杯の聲で

『お辨當、萬歳』

と叫んだ、これが可笑しかつたんで一同がどつと笑ふ、まことに一家庭の團欒を、絶景極まる此山中に見る事は、いかに他人からでも樂しい事であらうと思はれる、風はさら〳〵と吹く毎に。紅葉の錦は搖れ〳〵て、こぼるゝ一葉二葉のひら〳〵と文江の袂にとまるのであつた。

もう晝の頃といふので、茶屋の掛出しにあつまつて辨當を開く、景色を肴に父の正友は携えて來た瓢を取出して、鈴木を相手に觥をあげる、鈴木が興に乘つての、詩吟が大喝采で、敏夫が劍舞の眞似をやる、いつまで居ても面白味はつきぬので、追々と時間を過すうち、日は早くも西の空にまわつて、一帶の薄ぎぬのやうな雲の中へ包まれて仕舞つた併しこの雲の間に洩れる光線の工合がいゝので、紅葉の色は一段と奇麗にみえる、一同見とれて居ると、いつか此雲が切れて入日のまばゆい光が、赫と滿山の梢をてらしたうつくしさ、丸で山中が灼耀として輝き渡つたかと思はれる位、絶景とも妙景ともいひやうの無い有樣に、一同思はず呀と叫んだ聲の凄じさ、これに驚くかとすれば文江の夢は殘りなく醒めたのである。

あゝら枕許の小窓へは、晴々した日の色がさして雀は軒端に囀り乍ら渡つて居る、あゝ高雄の紅葉狩は文江が曉の夢であつたのだ。

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

勇んで臥床から起出た文江、朝餐をすませて後、今日の日曜を幸ひに、机に對つて紅葉狩の一文を書き初めた。

如何に夫れが趣向の妙を盡して居たか、辭の美を極めて居たか、慥かに校內第一の優等賞を得たとの事であつた。

（をはり）



新年海

官幣大社廣瀬神社宮司兼官幣大社橿原神宮々司　正六位　西内成郷

大君のめくみもふかき四方の海の
　波靜なるとしたちにけり

官幣大社廣瀬神社禰宜　従八位　樋口壽丸

海原のなみもしつかにとしたちて
　恵みあまねき君か御代哉

官幣大社橿原神宮禰宜　従八位　脇阪環

初日かけあを海はらにかゝやきて
　仇波たゝぬ御代の春かな

官幣大社廣瀬神社兼官幣大社橿原神宮主典　島田熊治郎

をさまれる御代のすがたか大海の
　波もしつかに年立にけり

官幣大社廣瀬神社兼官幣大社橿原神宮主典　富澤石松

新たまのとししつかなる大御代に
　なみ風立たぬ伊勢の海原

官幣大社橿原神宮雇　山田米三

四つの海波おたやかにあらたまの
　年を迎し今日のうれしさ

官幣大社廣瀬神社雇　田村範龐

四方の海なみもしつかに治まりて
　年を迎ふる君か御代かな

肥後　佐々小琴子

新年のはつ日のどかにうなはらの

雲ゐにさらすなみの白妙
同　佐々有隣子

野坂の浦波もしつかにたちかへる
年の初のけしきおもしろ
同　千知波橋子

四方の海なみもしつかにあら玉の
年の初ぞゆたけかりける
同　右田藤子

天皇のめぐみのつゆのすゑひろく
年たつ今日の海の靜けさ
同　野口靜子

年立てなみしつかなるうなはらに
君か八千代をうたふ舟人
同　德永雪枝子

治れる御代のはつ日のうらうらと
ちひろの海も靜けかり皃
同　友永常子

立かへる年のはしめのうみをみて
波靜かなる御代いはふ哉
同　赤星石子

はてもなき千尋の海もきみかよの
年たつ今朝は波靜かなり
同　坂本竹子

海原やしほのみちひのつきせなく
あらたまりくる年の豊さ
同　坂本道子

大御代の年たちかへるわたのはら
波も靜かにのどけかり皃
同　吉富季子

うらやすくあまも年をや迎らん
大うな原のなみしづか也
同　德永萬壽子

文林

わたの原波もしつかにをさまりて
御代豊かなる年はきに鳧

同 徳永多瑠子

年たてば人のこゝろともろともに
四方の海原なみしづか也

同 徳永廣子

豊年のはしめとひとのよばふなる
四方の海原波のしづけさ

同 服部萬壽子

明らけき御代のしるしかわたの原
年の初日ぞ照まさりぬる

同 澤田春子

天皇のをさむる御代ははてしなき
年たつ今日の海の靜けさ

一月御題新年海謹而作歌

下田春興

日の本のやまと島ねに　あさあさによせくる浪
夕なきにひきめくしは　其浪のいやます／＼に
其潮のいやしく／＼に　立ちかへる年の始めと
朝まだきうなひを見れば　沖つ波よれとさわがす
へつ浪は立てど音せず　しつか代の靜けき年と
立ちかへる年の初日の　のどけくもあるか

反歌

わりそ浪うつ音なぎて立ちかへる
年の初日のかげののどけさ

院長の職を讓りけるときよめる

元東京感化院長 高瀬眞卿

父のみの　父ならなくに　泣く子なす　子らを

敎への　庭つ鳥　　かけし誓ひの　言の葉も
いく春秋を　かさねきて　浪をしわしの　刈初の
ことゝ思ふに　いつしかに　十年の餘り八年にも
はやなりにけり　劍太刀　この身の齢を　數ふれば
よそじの坂を　こよろきの　いそぢも近　遠方を
思ひはかなし　いつまでか　かゝるべしやは　う
つせみの世の事わざは　いとしけし　なさまく思
ふ　事多し　わが子なれやも　たらちねの　親の
敎を　忘ずば父が心を　つぎ／＼に　直日の宮
の　ゆふ襷　かけし誓を　ねもころに　ねぎ奉
り　かしこき稜威　あさ鳥の　あさ日と仰　この
岡の大神の　庭の撫子露にからすな
たらちねの父が心を心にて
おほしたてゝよ庭のなでしこ

少年のためによめる歌

橘　村

畑の隈の澁柿や
柿の下なる獨活の木の
枝芽も高く生ひ立ちて
ひとりほこりて言けらく
『畑の遠近春淺く
雲雀は啼けど若緑
まだ豆ならず茄子ならず
吾よりほかにものもなし
吾いま畑の王なれや
青葉さしかひたけ高く
地よりうまるゝ白き子の
美なる味しも試みよ

並ぶものなき畠の王
雲にも入らむわが影の
落つるほとりに植えてある
野菜のなどか及ぶべき』
いつしか畑の春は更け
獨活の子もまた靑うなり
夏としなれば茄子畑
こぼれて生へし唐辛
ひりゝと唐き唐辛
房小さけれど香あり
朝げ夕げにくる人の
隣のうどは見かへらず
獨活もの云へど唐がらし
一日語らず紅うなる
わが業守り勵みたり
夏の眞晝もすごしつゝ
『辛きばかりの唐辛
汝と吾との身はいづれ
高き賤しきよきわろき』
獨活はかく言ひ嘲れり
知らず顔して唐辛
獨活の靑莖枯れてゆく
姿を見つゝしかすがに
秋くる風を待ちにけり
やがて秋としなる畠の
みかり喜ぶ收穫や

殘るは太きとうがらし
唐紅に染めにたれ

獨枯はと見れば影もなく
春の晩より芽は立ぬ
親木に何の能やある
もろくも鎌にかられたり

たゞ徒らに莖ふとき
畠のうどとなる勿れ
房小けれど唐辛
人に涙を流させよ

技藝は力なり、（ロングフエロー）

世に詩、雄辯、音樂、繪畫の美を攻究するほど氣質を改良するものはあらず、（ヒウム）

敎の庭



一月廿日兼題

樞密顧問官 正三位子爵 黑田清綱先生撰

（先生此頃病に罹り伏蓐せらる依て門人某氏代りて撰定せられたり寄稿者の諒察を乞ふ）

富嶽

天 東京大學病院産科婦人科内 横井勝子

うごきなき國のすかたと見るはかり
むかしなからの富士の神山

地 東京荏原郡大井村二四八邸内 三好珍子

塵の世をさけてこゝろもきよみかた

歌の庭

きよくもあふくふしの神やま
秋田縣由利郡院内村　三浦さわ子

人

くもゐより高きするがのふじのねに
いづこの空のゆきやふるらん
神奈川　米本光江子

甲の部

月はなのをかめはつねにかはれとも
あかぬは富士のみ山なりけり
東京　牛山竹代子

大みよのひかりとゝもにかきりなく
みゆきつきせぬふしのかみ山
東京　敷島うた子

信濃路や五百重のやまのおくにまた
とはでもしるき山は富士の嶺
京都　源たけ子

とこしへに國のしづめとひとみなの
あほぐはふしの高根なりけり
山口　村上操子

もえし火のむかしはいさやしら雪の
ふりにし山のいくよすぐらん
長門　本所信子

とつ國のひともふしの嶺あふき見は
やまとこゝろに成やしぬへし
東京　大渡東子

いつこより見もかはらぬ富士の嶺の
すかたや人のかゞみなりけむ

乙の部

君か代とともにいくちよつもるらむ
不二のたかねのゆきのしろたへ
東京　北島功子

物かはりほしうつれともゆるきなき
みよのすかたやふしのしばやま
肥後　德永靜枝子

新たかのやまたかけれとかみよゝり
ひいてしふしのねにはしかめや
肥後　德永雪枝子

山といふやまのなかにもめてたきは
かみよながらのふしのたかみね
伊豫　吉良貞子

時しらぬ富士のたかねのしらゆきは
かみ代ながらに消すやあるらん
熊本　日高かず子

千代よろつ動かぬさまかしらゆきの
消ゆるときなし富士のおほたけ
東京　松村あさ子

はるゝゝと富士のおほ嶽あふき見れは
ふもとにおこるあめの八重くも
下野　和賀井花子

いひいてむ言の葉もなし見ることに
ゆきもてかさる富士のひめやま　下野　花方米子

ゆるきなき御代のすかたと仰くなり
くもまにたかきふしのかみやま　下野　芦谷隆子

しら雲のつゝみかくせるふしのねに
もゝのかみたちあそひますらん　上總　高石登代子

むら山はかすみにかくれあまのはら
いよ〳〵たかく見ゆる富士の根　伊豫　浦尾やすを子

つゝれ着て寒きいほりを立ち出つる
かなたにしろしゆきつ富士の嶺　横須賀名　木山勝子

はろかすみたなひく雲のあひたより
洩れてゆかしきゆきの富士のね　横須賀名　木山勝子

いひ出てむことのはもなし白くもの
うへにそひゆる富士のかみやま　岩代　田中二三子

もろこしの果まて名をやあけぬらん
やまとしまねにれさす富士の根　東京　椎野鋭子

仰きみる御代のひかりをさしそへて
かすみにうかふ富士のしはやま　東京　椎野ゝ薫子

から山もいかてをよはむふしのねの
たかきそくにのすかたなりける　廣島　小谷はる子

いたゝきの神のいふきかしらくもの
とはにたなひくふしのとほやま　甲府　名取正代子

ちはやふる神代のまゝにかはらぬは
ふしのたかねのすかたなるらむ　甲府　上田なほ子

四つの時みなおしなへてしろたへに
みゆるはふしのたかねなりけり　筑後　鏡山増代子

あしひきの山の甲斐よりくもはれて
みゆるやふしのたかねなるらむ　埼玉　横田音羽子

これやこのみ代のしつめと人ことに
ふしのたか根をあほかぬはなし　和歌山瀬　戸榮子

ならふへきやまもあらしな白くもの
うへにそひゆる不二のたかねは　石狩　坂本榮子

むかしよりひとの仰しふしの根の
けたかきすかたいまもかはらし　長門　清藤香子

みれに雪ふもとにくものたゝよひて
あらはにみせぬふしのかみやま　松山　仲田清子

かみよゝり雪のしらきぬかつきつゝ
すかた老いせぬふしのしばやま　大阪　桝田益子

かみよゝり國のしつめとうこきなく
あまそゝりたつふしのしはやま　青森　柿崎秀子

富士の根にひとよかりれの岩まくら
かみよおほゆるゆめのうきはし　讀人知らず

いつもみる物なりなからめつらしや
不二のたかれのゆきのあけほの　肥後　坂本菊子

日の本のくにのそのなのいちしろく
たかくそひゆるやまは不二のれ　肥後　坂本道子

あまそゝる雲のうへまてそひゆなり
ふしのたかれのいやたかきかな　肥後　坂本竹子

丙の部

白ゆきをすかたとなして日のもとに
またたくひなきふしのしはやま　栃木　春木たま子

あふき見る富士の高嶺のしらゆきは
かみ代のまゝのすかたなるなむ　山口　田村多豆子

歌の庭

わけのほるみちも白くもうつみきて
かせかう〳〵しの富士のしば山　松山　上原のふ子

天くものうへにそはたつ富士が嶺に
もものかみたちあそびますらん　下野　和賀井芳子

よろづよの雪さへきえぬふじのねは
やまとしまねのたからなりけり　長崎　森きく子

いたゞきもふもとも今はしろたへの
ゆき降りつもるふじのかみやま　安藝　和住千鶴子

しろたへのふじのたかねに年たちて
雲とやいはんかすみとやいはん　埼玉　前野蕗賀子

千代よろづゆるがぬ富士のすがた社
くにのたからと云ふべかりけれ　札幌　山田婦美子

とこしへに變らぬ御代のためしには
ふじのたかねぞひくべかりける　東京　篠田圓子

八重とさす雲のとばりにたれこめて
いよ〳〵ゆかしふじのとほやま　肥後　田代喜和子

はろ〳〵と上るあつまにしろしとて
ましろにたてるふじのとほやま　京都　坪内りき子

あさ日さす富士のたかねの白ゆきは
かみ代ながらのしるしなるらん　長門　本所節子

ふもとにはかすみゆたかに年たちて
そらにしめゆふふじのかみやま　埼玉　前野ふさ子

ことくにゝ御代の光りをてらすらん
かすみのうみにうかぶ富士のね　東京　椎野秀子

ふじのねもけさはのどかにみゆる哉
はるたつくものあけぼのゝそら　東京　椎野清子

あさ風にかすみのころもぬきかへて
めづらしとみるふじのしばやま　東京　椎野ぬき子

するがなる富士の高ねをみることに
うごきなき代のさまぞしらるゝ　東京　小池竹子

からうたにはちすの峯とたゝへけむ
うへこそきよきふじのおほやま　東京　山本茂子

たくひなき富士のすがたよ神代より
よもにあふげとつくりましけむ　東京　山本梓子

あらがねのつちよりなりて久かたの
あめにも見ゆるゆきのふじのね　美濃　吉村せい子

今もなほかみ代のゆきをいたゞきて
くにのしづめとたてるふじのね　東京　林環子

いつ見てもすが〳〵しきは白たへの
ゆきをかざせるふじのかみやま　肥後　田代艶子

動きなきくにのすがたとふあくかな
そらにそびゆるふじのたかねは　肥後　田代綾子

日の本のくにのたからとあほくなる
富士のたかねの名こそたかけれ　長野　小泉みつじ子

たくひなきふじのたかねは神さびて
とつくにひともあふがぬはなし　大阪　塚口せい子

朝日かげにほひまはゆしかみよより
ふりつもりたるふじのねのゆき　肥後　佐々小學子

天のしたたくひまれなるふじのねを
みればいよ〳〵たくひなきかな　肥後　佐々有鄰子

唐うたにながめにかけしあふぎこそ
あふけはたかき富士のかみやま　伊豫　竹村竹里子

夕日かげたかねのゆきにさしそひて
さやかにみゆるふじのかみやま　京都　東甯子

いたゝきにしら雪おきしふしのねは　京都　東　照子
やまてふやまのなきなりけり
しろかねもこかねの山もかすあれと　筑後　武田　亀子
ふしこそくにのたからなりけれ
うこきなきわが日の本のふしのねの　埼玉　横田　秋子
あかねは御代のたふとかりけり
さかにゆくわか大み代ともろともに　横須賀　岩橘　花子
くもゐはるけくたてるふしのね
日の本のくにのたからといにしへも　東京　北島　操子
いまもたゝふるふしのかみやま
あふきみはいともたふとし千早ふる　横須賀　上田　ゆき子
かみ代のまゝのふしのたかねを
富士のねにつもれる雪をしらくもの　三河　永井　さい子
たにすかゝるとおもひけるかな
かみ代よりゆるかぬさまを白ゆきの　東京　戸賀崎　梅子
ひかりに見ゆる不二のかみやま
ふく風にうかへるくものあとたえて　東京　戸賀崎　久子
あさひにほふゆきの不二か嶺
ひのもとの國のしつめとよろつ代に　東京　戸賀崎　治子
あふくもたかし不盡のかみやま
夫のためのほりし君をしのひいてゝ　相模　比田井　もと子
いやなつかしきふしのしはやま
とつくにの人もあほきてふしの根の　東京　牛山　案子
うこかぬ世そとつもるしらゆき
白ゆきのつもれるやまはおほかれと　東京　片山　あや子
なをたくひなき富士のかみやま
天津日のひかりにほふしらゆきの　東京　片山　ふみ子
つきぬは富士のすかたなりけり　東京　戸塚　てつ子
日の本のくにのたからの不二かねを
としのはしめに見るそうれしき
おほ空の日かけにほふ富士のねは　東京　鍋田　よし子
ふりつむゆきをはなと見すらん
遠ちかたの富士のたかねにふる雪は　東京　平尾　あさ子
見るもさむけきこゝちこそすれ
遠ちなからめもまはゆきは朝日かけ　東京　杉浦　いと子
さしむかひたるゆきの不二のね
あらたなる年をむかへてあけほのゝ　東京　川村　松子
あさ日にほふ富士のゆたけさ
朝日影としのひかりもてりそひて　東京　矢野　保子
いよいよさやに見ゆる富士のね
あるか上にことしの雪もふりつみて　東京　内田　きみ子
いよいよたかきやまは富士のね
ふしのねに朝日まはゆくさしそひて　東京　吾妻　ちか子
うちわたすさへまはゆかりけり
ほのほのとあけわたりゆく大そらに　東京　諸井　くら子
今朝あたらしく見ゆる不二のね
かきりなきよはひの山とあふきつゝ　東京　舘脇　ます子
むかふるとしの今朝のあけほの
いつ見てもかはらぬ富士の高根こそ　和泉　福原　菫子
うこきなき世のすかたなりけれ
うらうらと照る大そらにいろはねし　神奈川　米本　きよ子
富士のたか嶺そみくにふりかも
たらちねの高きなさけにくらふれは　信州　小林　芳子
ふしもふもとのちりひちのやま

歌の庭

山こめのかすみのうへにおのつから　大分　菊波富子
　ゆきのよそほふ富士そけたかき

富士のねをあほけはすゞし夏の日も　信州　小林芳子
　わすろゝはかりみれのしら雪

華族女學校教授井上賴圀先生撰

松の内日記

天

熊本市光琳寺町　日高かず子

元日。天津日影うら〳〵と匂ひ出たる空、雲なく風なく、いとよう晴れて、何處よりともなく新しき年は來にけり。去年は玉の浦に立かへる年波を迎へ、今年は白川の水に阿蘇がね昇る初日の影を汲む、こゝかしことかはれども、かはりなき家の内には、千里も同じ春風の通ひ來て、とり〳〵悦びつゝ若水の心も清く屠蘇くみかはし、例の祝事とも平になしをへぬ。學の舍に子等を出立せ、公の拜賀にもうのほり給ふ脊の君を送り奉るほど、馬車の音もしげくなりゆくに、年のよことと聞えんと訪ふ人いと多し、わきて親しきは案内もせで酒よ〳〵とさわぐ、はた十人あまり打つれて來ませる、物まゐらせん忙しさは昨日にまされど、氣も心もうきたちぬるぞあやしき、今しばしと、とゞめまつるにはやも去りたまふ、なべて今日は男子達の客ともなり主ともなり給はんとて、たのしきものからいそがしかんめり。脊の君今日位階一階を進められ辭令いたゞきたまへるいと目出度かたしけなみ、うちよりて祝の盃かさぬるに、父君訪はせ給ふ、げに目出度年の始よと祝ひくらしぬ。八尾家子の君外二三の友とちの君より年の悦び云ひをこせ給へるいとうれし。今年の初の音つれなりけり。

二日。初鷄の聲に驚き起き出れば、曉より降り出し雨いとしめやかに、門松の色もいよ〳〵ときはなり、日出頃出入商人の賣初の物祝ひ來るもめでたし。物皆今日より初りて家每に子等の讀初の聲床しう、ものゝ音も聞え來るぞなつかしき、脊の君の「年立かへる春なれや」と東北の曲謠ひ出でたまふに、おくれじと一しは聲高う文よみ初る男童の賴しさよ、やす子の

　門ことに松竹たてゝ君が代は
　　千代に八千代とうたふたのしさ

と、かき初めの筆のあともと、し〴〵にまさりゆく

ぞ嬉しき、

己も二ッ三ッかいつけたるおくに

　世を祝ひ家をいはひてふでの海に
　　とり／＼にほふ言の葉のはな

紙鳶まり手にして、小やまぬ空恨めしげに打まもる子等の遊びがたきとなり、歌かるたなどす、雨降ればにや訪ふ人まれなり。家持つ身とてよことおくれんもはづかしければ、故里に七十路あまりの年かさね給ひし母君をはじめ、誰彼の君に新年の祝詞聞えんと筆とりぬ。

三日。昨日の雨あとなくはれて朝日長閑にさし出づ、子等の起き出るやがて初夢は如何にと問ひつとはれつ、をかしき事どもいひのゝしる、こも年の始のすさびなりけり。今日はまろ八多く日ねもすもてなしに暇なし、夕つ方女鑑届きぬ嬉しさに取る手おそしとひらけば、表紙も改り波に根引の松の方は御題の心あんめり、兎の我は顔なるもをかし、首に内親王殿下二宮の御影まづ仰がれぬあまさかるひなに居て雲の上の御有樣見奉るも、偏に御代のめぐみとふしをがまれてなむ、またなき友を得て夜すがら讀みふけぬ。」

四日。霜白うおき渡して風いと寒し、松井大人にまねがれて晝すぐる頃より徃く、木の芽の色深きもてなしに、主の君筑紫琴を奏でさせ給ふ、いと珍らしく氣高き談に、時の移るも覺えず、さふらひて歸る、この日田代艶子の君綾子の君訪はせ給へるよし、たいめまつらでいと口惜し。

五日。雨降りいでぬ春雨ならねどいと靜なり。賢き御あたりには、外つ國の公使をはじめ諸々の官人たちを召して、御酒下し賜ふ御宴開かせ給ふ例あれば、御園の鶴は千代を呼び、御池の龜は萬代を君に捧げて浮みやいづらん、いとかしこく目出度日なりけり。

病の床に年を重ね給ひし伯父君許音づれぬ、よろこび給ふこと限なく、己のよはひも千代を祈りてと、床にかけ給へる幅は、八十五翁吉永千秋大人の殊更にものし給へる松に日の出のかたに

　とことはにかはらぬ松の八千とせを
　　てらしそへたるあまつ日のかげ

と、目出たき。御筆のあとなり、ける千年も經たまはめと悦び聞えて妾

　いたつきは年と共にや治まらん
　　よろづ代てらせ初日子のかげ

教の庭

拙けれど短冊にものして身も心も衰へ給へるを慰めまつりき。

しめかざり門松は今日より取去られ、年はあとにかへりたるかあらぬか、ものたらねど心はいよいよ春めきぬ。

地

相州横須賀町逸見九七 名木山勝子

一日。細殿ありくはしためが足音に、はたと夢の浮橋途絶えして打驚けば、板戸洩りてさうじの紙に明かう、是よ初日の姿とはや嬉しうて急ぎ衣更へ窓押開けば、げに見る目も耀く計り。曉太皷の鳴る方はほの〳〵と紫だちたる霞の中、すらりと雪の富士の嶺、麗はしう打仰がれたる、此方の丘稍離れて淺緑のそら中、曉月のほの白う匂ひたるもけさは殊にめでたうて。清き小川の水に影映じたる門の松竹、はれやかなる皷の音と共に歌ひ出でたる萬歳、見るだにまりつきし幼き折のそゞろ忍ばれてなむ。向ひの松子樣、お正月待兼給ひたるかの樣に、はや羽子板小脇に抱き、晴衣の裾も重げに木履コロ〳〵と音させ給ひたる、我を見て「おめでたう」と稚兒髷のお頭さげ給ひし時さらりと美しきかざしの房、白き額にかゝりぬ。若水汲みて顔手清めつ、折柄あな學び家の時は過りしよと叫べる妹の聲に我も急ぎ仕度調のへ、靴音のどかに、さげ髪のリボン風に打ひらめかせて出づ、道行く人屠蘇の酒に醉ひて面赤うゑら〳〵になりたるもけふのみは憎からず覺ゆ。

二日。姉君よ〳〵と弟の呼ぶ聲に、朝日うらゝかなる父君の御部屋の椽に立出でつ。甲斐〳〵しう墨すり流す。嘉例あれば我も一筆後より拙きを。晝過る頃親しき友豊子の君より招れて物する途すがら初荷にあふ。終日琴の彈初めして美しき夕日池水にきらめく頃家路たどりぬ。誰彼れ君誘ひあひ給ひて夜來ませし嬉しさ、皆はにいでて打迎ふやがて祖父の君の眼鏡越につく〳〵「あしびきの」と節をかしう讀みいでたる、皆微笑みなしぬ。げに長々し夜も今宵はいと短かうおぼえて。

三日。打續きて今日も晴れたり。机の塵打拂ひ、庭の景覺束なき筆に畫き見つ。晝過る頃より女鑑取出でゝよむ。弟の部屋賑はしう興じたるは双六などし居るにや。

四日。彼方の山まだ霞みて半輪の月淺黄の空に匂ひたる頃より、はしため共の仲間に入りて追羽根つく。朝げ終へて書よみ、遲けれども衣の縫初め

す、町子の君の御家にかるた會あり。いひしらず樂しかりき。

五日。いとよく晴れたり。遠き友より麗はしき繪端書に輝く計りの水莖の跡しめして懷かしうも寄せられぬ。さそく返りごとおほけなくもかいつらねてまゐらす。幼き折厚き惠賜はりし師の君にもはた其かみの友がきたちにも。

六日。障子にうつろひし朝日うら〻かなれど、ゆきかふ風塵ひぢをまきて軒端のさゝ音いと凄まじいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝ小間使の竹を呼びて髮を卷に結はせ、叔母君よりいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝ賜はりし佛蘭西製のいと麗はしきリボンかけさせつ。夜半源氏かるたとうでゝものす。

七日。七草の餅かゆ祝ひて、母君に隨ひまつり弟と三人して叔母君の許に參る。玉子の君我を見て最と喜ばせ給ひ、繪卷物珍らしきかるたなどとりださせ見せさせ給ふ。いにしへ千代田の大奥にてもて遊びせさせ給ひしといひ傳ふ貝遊びなど、まねびて終日興じあふ。夜玉子の君、み空の星眺めやり給ひて歌思はせ給ふ。みやびにうとき我はやがて、走りて君が居間なる半月形の書窓に凭りそひて書よみ居たりしが、間なく、君のみ姿見えければ相語らひて、琴樂しくも、夜を彈じふかしぬ。

人

肥後國菊地郡城北村　佐々有鄰子

一月一日。鷄がねとともに起いでゝ。氏神の廣前に年首の供物をなす。父君母君もろともに。今年は六十七歲を、むかへたまへば、御前に侍りて、年賀を奏す。やがて齒かためのあつものを食ふ。午前八時尋常木野小學校に出頭す。新年式をへて。校長をはじめ各敎員の私宅を訪うてかへり來て。午飯を食ふ。今日の景色を詠る歌。

松はうたひたけはおどりてたちかへる
としのはじめのおもしろのよや

二日。松たてる門をいでゝ。兄君の家にまゐりて年首の賀言を白す。兄君の養父君ある八十四歲の翁出たまひ、妾にいと若うなりぬと賞詞をたまひぬ。年首の褒言とはおもへど嬉しかりき。

三日。元始祭なれば、別格官幣社菊池神社に詣づ、かへるさ右田の伯母君宗の叔母君に年首の賀儀を奏て、かへり來る路すがらの歌。

むら雀ちよと囀るさとなかば
ゆききもしげき年のはつ空

四日。日曜日なれば、人々を集へて、終日あそび

くらしつ。
五日。新年宴會なればとて、官舍にいでゆきたまひて。父君はかへり來たまひぬれば、母君のまちつけて詠みいでたまへる歌。

大きみのつゆのめぐみのあつものを
　すゝるもたのし今日のまとゐに

弟がよめる。

やたかゝみもちひとりかさねいはゝばや
　ちちはゝはらからとしをむかへて

妾がよみしは。今様なり。

父のみのちゝやすらかに
　千秋八千あきましまさん
はゝそはのはゝたひらかに
　百千よろづよさかえませ

父君の御歌は。

まひかなでうたひつれつゝ親と子の
　なかむつまじきこゑぞきこゆる

めしつかひの婢僕も。みなよろこびあへり。

（以下原稿到着順）

伊豫　宇高松子

常はいぎたなきものも今日としいへば、鳥の八聲も待ちあへで、起きいづ、先づ若水に身を清め、大御神の御前に御燈かゝげ、御酒供へなどするに、早や父上は初日の出をがみて來んとて、下男召つれ東雲臺へといで行き給ふ、健やかなる御後影見上げ參らすも、いと嬉し、歸り給ふを待ちて、例の祝ごとゞもす、今年は兄上は印度にめぐし、妹も都にあれば、朝膳三つ淋しき心地はすれど、皆健やかに、大君の御爲につくしつゝ、はた家のため、身のため、物學びつゝあるを思へば、なかなか嬉しくも亦頼もし、折柄郵便と勇ましき聲にいそぎ立ちいづれば、こは珍らしや、兄上より繪端書二葉一つは女の印度人の日本の日傘をかざし、人力車に乘れるを同じ男のこれを挽けると、一つは裸体の黑人二人手をひきつれて、水のほとりに立てるが、側にはしげれる椰子の林ありて、小さき土人の家も見ゆ、小高き岡にはいかめしき、西洋館のそびゆるなど、千里をへだつる異郷の珍らしき景色をかしき風俗を、かくまのあたり見る事を得るも、偏に進み行く御世の惠と兄上の優しき御心とによる事といと嬉しきに、御詞こそ短かけれ、御情のあふるゝ計りの御筆のあと、何よりもうれし、日附を見れば十二月四日出とあり、道のほどさも思ひやらる、折しも西の宮よりと入り來るは、例のお福の御禮なり、罪なげなる顔しながらおかちんはゆがみても、大きなるがよしと、慾張るもをかし、表には廻禮に往來ふ人の足音、車の音しげく、小學生徒の唱歌の聲、やり羽子の音、手まり歌などとりどり賑やかなり、朝日はうらゝと門松をさらし、大御旗はゆるぐ朝風になびく、父上は埋火のもとに新聞の初ずり讀み給ふ。

二日。おきぞめとて、昨日におとらで早く起く、祝ごと、例の如く、父上はうたひ初めの御聲の、さわやかなる、八十路をこえ給ひしとは、誰も思ふまじ、書ぞめ、讀みぞめ、例のごとし、垣ごしに優しき琴の音の聞ゆるは、隣の孃樣の彈きぞめにやおはすらん、正午前より天氣俄にけはしく、風吹きいでゝ、雨さへつよく

ふりしきれば、廻禮者もとだえて、いとそう〴〵しければ、おのれも埋火のもとによりそひて、昨日新聞の初ずりのよみさし讀み聞かせまゐらせつ、諸方よりの年始狀をくりかへし讀みなどす。

三日。空ははれたれど、風なほやまず、けふは廻禮者いと多し、來る人も、ゆく人も、皆樂しげに喜びの色みち〳〵て、屠蘇の盃かされても亂れぬ程の美しさよ、あはれ今日此頃の人の心もて、一年ながら過しなば頭に霜をおくこともなく、額に老の浪もよせじとぞおもほゆるや。

安藝　和住千鶴子

一日。けふは、治まるみよの明治三十年あまり、むとせのはつ日なり。晴れわたりたる空のけしき、いとのどかにて、門毎に、たてつられたる日のみはた初日影に色はゑて、美はしく、千代をこめたる松の色、とり〴〵にめでたし。打集ひて樂しき祝のむしろにさかゆく御代を、千代とほきてそ、朝けを終へけれ。そともには、廻禮せんとにや、名刺携へ往きかふ人々さわにて、賑はしかりき。

二日。梓弓春とし云へはのとけからましを、また古き暦には春たゝぬゆゑにや、けさ、またきより北風吹きしきり、寒さ堪ねがたく火桶のもと得さりやらざりき。夕よりおちこちの人々集ひて酒くみかわし、めでたき年の始をことほぎけり。吹く風に、なり〳〵しら雪のふりそめたる、こよなきながめにて、豐年のしろしならんとて、人も吾も、よろこびあへり。

三日。久方の空いと暗うして、さむさ、きびしかりき。けふしも心あひの友どち誘ひて、歌かるたなど、ものしつゝ、傾く月もしらで明しけり。

四日。けふは、うらゝかに晴れにければ、うたげのむしろ開きてかたみに語りあひけり。

五日。晴れしかど、さむさきのふに、かはらず四方やまのことども語りあひける折しもなにがしのもとよりあら玉の年を、ほぎてんとて招かれ行き、更闌けて歸りけり。

五日。曇りがちなる空うら淋しく、殊にむら時雨の脚が軒端を打つ音、またなくあはれなり。午後よりは雲のゆきかひ、とみにかはりつゝ、かみなりはためき、一しきりの大雨降り出でゝ、ものすごきさまなりき。ひねもす裁縫してけり。

七日。晴れわたりたる空のけしきも長閑にて、こゝかしこ、三人よたり打むれて、雪間の若菜つむ人おほきに、誘はれて立出でぬ見渡せば、ねの日する野べの小松の末遠く、たち込めたる靄の色そゞろに大和心も、浮たつぞかし。語らひつゝ、摘みし若菜は、いつしか籠にみちければ、やがて家路へとたどりぬ。

東京　中林榮子

一日。晴東よりさし昇る初日、長閑にて、四海を照らし、貴き賤しき、けぢめなく、御代太平の萬歲を祝す。庭の梅も、よろこびを、包み兼ねてや。二ツ三ツ笑み出でぬ。隣家の、房子の君はチルガンにて、君が代を唱ひ給へり。已れも髮を淸め、衣を淸めなどする內、はや中垣のへだてなき、友より年始狀。數枚送り來りぬ。何れも、美しき水ぐきの跡、いとめでたし。夜に入りて、年始狀書き居るに、妹弟等來りて、其樣な物は、如何でもよし、早く來りてかるたせんといふに。やがて書き終りたれば、いざ仲間入りせんといへば、妹弟等は悅び躍りて、座敷中馳せ廻るぞ、愛らし。かゝる間に、房子の君も、來り玉へば、いよ〳〵賑はしやがて終りて勝負を見るに、房子の君の、勝とはなりぬ。是非に我れ勝なんと思ひ居たる、弟の心や、いかならん。房子の君も、察し給ひてや、みかん、二ツ三ツ、與へ玉へば、怨み、笑み滿つ。二日。晴、女鑑來れりとの告げに、早速行きて、持ちかへらんとせ

る折。花子、八重子の君たち自轉車にて年始に來り給へり何れの君もはかま付にて、かひ〳〵しう。是より、又、二三軒廻るなりとのたまひ、直ちにかへり給ふ●

三日。晴、日頃むつめる友より「例年の通りかるたのまとゐ、催し侍れば、君にも夕さりつ頃より」との文、いと、うれし。とく、日の暮れよかしと祈るに、漸くにして時間は來れり。いざとて車にて馳せつく。行き見れば、美しき媛たちのあまた居ならび給ふあるじの君「とくよりまち居たるなり」との玉ふ。いざ。是よりぞ始まる。耳近からぬ君は、今少し、明らかに、讀みて賜へといふ。さわがしきこと、限りなし。常は優美なる、媛達も、今は目血走り美はしく衣着粧ひしも、胸さへあきて、いたく亂れたり、常ならば顔そむかるゝも、今日のみは少しもみにくからず。今一度と。思ひしが、母君のあまりに長居せぬ樣に、との仰せにふと心つき惜しき袖、別ちてかへりたり。

松山　仲田溝子

曉鷄に夢を破られて、枕邊に三十六年は立ちぬ、數滴の若水に大晦日の俗腸洗らはれて、萬象皆新まりぬ、初日影ようよう〳〵さしのぼりて、空はうす紅ににほひぬ、友鶴の聲もきこゆる心地して、うれしきは長閑なる初春の心からにや、瓊樓も破屋も分ちなく年を迎へて和氣靄々たり、和されば紅塵紫埃ふかき巷も、其あとを見ず、實に二十世紀の回禮紳士のいで立こそやんごとなく見ゆるぞかし、道も盛んきとみゆるまでに、名刺片手に肩いからして、行き交ふ人々のさま昔に變りて一しほゆかし恭賀謹賀の端書も年々まさゝまになりしや、郵便配達のいとせはしげに見ゆ、夕暮ちかくなりしにや長閑にきゝし羽子の音もせはしげなり、僅かばかりの賽錢を社前に投げ、額て祈る人の心、猪も殊勝なり三

實にのせおきし重もち、夜の間にねづみにかぢられて、いと〳〵にくし、今やかるた合戰の最中なるらん、むべ山風衣ほすてふ等いと高げにもるゝこゝそこに。

大阪　桝田益子

一月二日。さし昇れる朝日の光うらゝかに、風のまに〳〵打靡く日の御旗、よしあし繁き、浪速の里の年の始の晨の空いと長閑なり。初寅なれば志貴山に、詣づる人多からまし、商人の軒には初荷出すとて、もてさわぎて人波をうたせ、大路には初賣の聲、喧しくも勇しく、勝手元には其品〳〵の、返しもやられずこうじ果てたるもをかし。初湯に浴して、心を清め若水掬びて、試み計り點ながに、書きやり、小琴にめでたき一ふしを奏でぬ。家ぬち打寄りて、雜煮を祝ふ内も嬉ぎの聲喧し、やがて初着よそひて、まづ師とたのむ邊り、親しくあひ知れるかり、ぬやにまうでぬ。おのづから今日のみは、あしのあゆみもいと〳〵嬉しくて

四日。福わかしとて餅粥を祝ふ、打ならす鐘の音に、ふと驚きしは消防夫の、出初めとて府廳にまうづるなりけり。程へてこゝかしこにて、物するを見んとて、うなゐ共の走りあるくいと賑はゝし。軒をならぶる賣るまの市も、長閑に春めきたり、寺町のあたりは更なり、儕共の行かひ繁きは、今日なんぬやまうづるめる。午後、うからやから、親しき限こぞりて花たゞかはしそよめきて遊ぶ。斧の柄の朽ちなん程も忘られて、暮るゝも知らず。

七日。人の日なり、空心地よく晴れ渡れり、三日つぎて市の街もいと賑はゝし。をみな共の、親しき邊りの訪らひ、储は主とかしづく、やかたにまうでんとにや老女專女のおもりかなるが、其家の風も心にくゝぞ思ひやらるゝ。躬てあないありし松子の君加り正午の事に物す、誰も〳〵あひ知れるなりけり、廣らなる御園の常盤の松は、千代の色をたゝへ、小鉢の福壽草は、ふくよかにほ

ゝゐみたり。小床の幅、書院の飾、今日にちなみてあかぬ事なく花やかに物せさせ給ふ、いとめでたし。春の木の芽も、古葉ながらに、松風の聲新らしく、きゝなされていみじう心地すが〳〵し覺ゆ。事果て後、花月をなして遊ぶ。欲りするに當らで、あやにく、とつゞけさまに呑さるゝも、折からの興いと面白し、皆〳〵いみじう笑ふ、來りぬるば福にはあらで、火ともしなりけり。

　梅が香の薫り床しき窓の内に心たのしき初まとゐかな

と、思ふ物からいとやさしければ、くちをおほひてなむ。

八日。穀の日なり、石上ふるくより今日なん、麗らかに晴れなば五穀に宜しきとかや、ひたすらに天氣のよろしう、あらまほしう祈る、鏡開き、今日なりけり。

九日。昨日とひとしく天氣よし、今日は今宮なる、戎神社のみまつりなり、さわがしからぬ程にとて、かぞ色母と共に、とく詣でぬ。朝まだきより、宮居の邊りいと賑はし。詣づる人の社のしりへの、羽目板を敲きぬるは、如何なる故よしのおはすらんか。社頭には小だからとて、米花袋、蜈虫、小判、米俵、白銀包、倩は烏帽子、土師人形など、いづれもめでたき物の、數をつくして吉兆の呼聲、勇しくどよめきたり。下向の人々は、富貴繁榮の吉瑞と、小笹に結び、かざしに戴き、醉ひしれて千鳥足に笑ひ興じて人の、心をひくもをかし。廓よりは、今日を晴れと色香きそひて着飾りたる遊女の、美はしくよそひたてたる寶惠籠の、數をつられて詣づるさま、さわがしき物から、花やかにいと賑はしゝ。そ見んとて、ふためきて人波におさるゝいとにくし。市の街は、家の業を休み、近き田舍、遠き村里より、柴の戸を小田のそほづに守らせて、今日のみは詣でぬ者なし。おのれもかた斗に、小笹一枝を求めかへりぬ。

十五日。朝まだきより、うぶすな神に、左義長の大御火給りに詣づ、今日は小正月とて、小豆粥を祝ふ。これ、かれ、當賀に來れり、父母主なる家の、帳祝の莚にとて物せらる。おのれも午后はとて、短册など認む。やがて訪ひ給ひし、梅子の君と秩つられて某歌會の初まとゐに行く。兼題、當座共に、あはれに妙なるを、聲朗らかに讀みいでられぬ。鶯の初音きゝ得し心地して、いと面白し。果ての後は、歌がるたをなして遊ぶ、靜なりしにやう盛りて、皆〳〵さわぎとよみて、興じ笑ふ聲いと賑はし。昨日まで、立なみし門の若松、打はへし軒の七五三繩も、とく左義長にむなしけむりとなりぬと思へば飛鳥川の、ためしも今更のやう覺ゑて松の内も驚かれて、暮なん、程もいと惜しうてなん。

長野　松澤まつ子

一日。明け行く空の景色いとうらゝかに、やからうから、打笑みて、祝ひごとするたのしさよ、早や外面には、赤き心を顔の色に、あらはして、年賀人、物もてさわぐ男の童女の童、にぎはし、己は、門松の、みどりの色のしたゝる山の井の、いと淺き心なれど君がみめぐみと、若水を限りもなう嬉しくくみとりて、墨すり流し、筆をあらためて、あはれ今年は、まはれる獨樂のごとたゆまず、うまず、學びの道をいそしみ、つきたる鞠のごと、落れば又上りて、たゆみなき心の操を養ひ、かつ〳〵にても、父母の御心をなぐさめ奉らでやはと、まづ書いつけつ、彼方此方へ年の賀の文、書きて送る夜母君が今年の家計の事、の給ふに、何かと御相談相手となる。

二日　つとめて朝戸押やれば、おく霜深く、きり立ちこめたるに何處よりか、初音〳〵と呼はる聲す、折しも朝日うら〳〵と昇りたるにあはれ、少女が姿は、見へぬ、母が手織の若衣も、着得て、あまりのいとをしさに、買うてめでぬ、彼が心の初音をも。午後從妹みち子と向の家のうめ子様何れも今年二歳の春をむかへたる

がとぶらひ給ひて、嬉々と笑ふ樣春の光も一入添ひぬ、今宵女鑑入手す、いやが上にも改まりぬる此書よ、淸水ぬしの物せられし歌ぞげに理とこそ思ひしか。

三日　閨の戸開けて見出せば、風なきにちる花かとまがうばかり雪ふりつゝ、今朝例よりは勇ましき郵便の一聲に、なつかしき人々よりの祝の文届く、午の時ばかり、親しき友より使給はるに、いざまからんと思ふ折しも、ふりはへて、親しき友訪ひ來給ふに行くも本意なし、斯くしてあらんも心もとなく思ひしが、兎角して、其友をも迎へ、さて心のどかに、物語りして、ふと障子開ければ、思ひきや、雪はやみ、皎々たる月いたくかたむきて、むらきへ殘る、うすげしよう、したらん如き雪をてらしつ。

四日。終日くもる、朝より、訪ひ來る人に、物參らす中に、依田伯父君の、妾の手料理ほめ給へたるいみじう嬉しかりし。

五日。天氣いみじうよし、朝より、頭の心地、例ならず、雪の花ちるらん、折々落つるしづくの音、いと物わびしく、きたりしが夕つ方臼田叔父君、のぶ子、むら子、伴うて、來給ふに、さ、見ねじと、つとむるとにはあらで、ゑみかたむけつ。

六日。今日も天氣うらゝかなり、依田伯父君より、招かれて、のぶ子、むら子、末の弟、伴うて行く、伯父君の、娘、きよ子たちとすぐろく打ふる樣、彼の紫式部の君の、日記、思ひ合はさるゝものから、まだ紙あらそふ、術だに、知らぬものどものみなれば思はず、ほゝと、打笑まれしが、今宵年毎の例に因つて、男の童ども、獅子の面かぶりて、家毎に惡魔拂ふとて、舞ひありくなり、頭に病ある人は、此獅子にはまれなば、いゆるとか、言ひ傳ふめれば、母君まつ子にも、はみて給はれと、の給へば、あはれおそろしき獅子は、只一口に妾が頭をはみぬ、

七日。今日は、七草なり、とく起き出でゝいでや、近きわたりの野邊にゆきて若菜つみてんやと思ふ折しも、隣の家より、たまはりたる、若菜ぞ今日をば、知らせたるの日記思ひ合されて、なつかし。午後、つぎ子の君がり、歌がるた會あり、例の友どち笑ふ聲、さゝやく聲、百枚の歌がるたは、花と飛び、蝶と舞ひて、樂しき春はせまき、一室に集められつ。

八日。今日しもめづらしう二人の弟と、二人の從妹一つ火桶をかこみて、罪なき談話會は開かれぬ、こゝにはしなくも雄々しき希望は、出でぬ。先、上の弟、我は大臣となりて御國の爲につくさんと、大人しやかに言へば、次の弟は、やをら立ち上りて、かたひぢいからし、我は軍人となりて、敵の首打ちとらばやと言ふ、傍に聞き居し、妾賴母しの弟共や、あはれ聞ね上たや、平賀の里に、住せたまふ、伯父君にと、今更にむれときめかしつゝも、二人の丸き頭をなづれば、そを眺め入し、二人のいとこ。妾もと、顔さしのぞきぬ、チヽむら子、きよ子、汝等こそ國民の母なれ、大臣も軍人も、皆汝等がやさしき手に、育てらるゝなり。あはれ良妻たれ、けん母たれ、と小さき手を握れば、愛らしき頭は自づとうなづきぬ。

九日。白雪の夜をこめて降り出でけん、門松もたはまんばかり、つもりたる「ふり積む雪に、色かへぬ松のみどりは一入濃かに」と菜が言ひけん、言の葉思ひ出されて、眺め入りしが。午後は机に對して讀書する。

東京　山本梓子

一日。東の空さしのぼる初日の光、明らかに治まる御代も、三十餘り六の年は來りぬ。君が代の千代萬代は更なり。家の風とこしなへにと祈りつゝ、屠蘇汲かはしはかためのもちひ祝ひ抔、例なるも、年毎にかはらぬうれしさにてなむ。しりくめなは引はへたる門うちあけて、先關ひきませるは、日頃親しうする人の、幼き

なの子うちつれてなりけり。ほき音ひがはしてぞ、かへられぬ。又ある人の、これもなの子打つれたるが、海軍軍人の服きせたる、いとめでたし。あはれこの人々出ひ生て、、御國守りの丈夫とならば、いとたのもしき事にこそあれ、よるは友がりやるべき文か、きはて、、ふと繙廣ろげしは、貫之朝臣の土佐日記なりけり、夜のまの風に白散うしなひて、いも、あらめもはかためもなしとかゝれし、舟路のさまのいとほしく、げにぞ都は思ひやられけむかしとぞ、我も思ひやらるゝ、

二日。けふ日頃まゐれる師の君がりと、朝に出てぬ、黄金の色あざやかに、そうそきたるつかさ人、さてはめもあやなるもろ人の衣の袖に、うらゝかなる日の光の、かゞやきあひて、春はまたしき都のちまた、さながら錦をおりたらむごとし。

三日。けふは家にぞある、或人の今年は元日第一に、をのこの入りきたりたるなん、いとよきなりといふに、さらば我家こそは、いとよからめ、ましてをのこゞさへ打つれたるは、いかばかりの幸かあらむと、みなうちほゝゑみつ。

四日。ことなることなくて、のどかにすぎぬ。

五日。きのふに同じ。

六日。もよふしがほなる空のけしきに、軒うつあられの音そひたれば、さりや、雪にこそはと、あらましごといふ折しも、そともなる青山の原に、駒のあし音あまたして、樂の音ひゞきわたれるこは、こむ八日、大君のみゆきましまして、觀兵式おこなはせ給ふ、そがこゝろみを、けふなにかしの宮のおはしまして、せさせ給ふにぞありける。那須のしの原ならねど、たばしるあられ如何ならむと、思ひやりまつるも、いとかしこけれ、しばしにて雪もやみぬ、樂のねもまた。

七日。けふは、いとゞ昔のみぞ忍ばるゝや、春日野に袖ふりはへて、摘いてけむ雪間のわかな青やかなる色にぞなつかしけれ、かの日記ふたゝびみるに、わかなおくられけることの今日をしらせたると、かゝれしは、いかにうれしかりけむ、水もなき、いけにしあれど、初わかな、ふかき心を、つみてこそしれともいはまほし。

あはれおよびをりてかぞふれは、今年も七日はすぎなんとす、今よりのちの七日がほと、門にしめゆふ松の色のかはらぬくりこと書きつられむも、唯朽ちにし言の葉のつもるのみ。いとわづらはしげれば、筆さしおくになむ。

東京　三好珍子

一日。五時に伏戸を出ぬ。昨日の新聞にては、元日は雨なめりとありしかば、諺にも一年の計は年の始にありてふ、元日の雨ふりにては、一年の天氣も思ひやられで、いとうき事哉、など老人もろ共に語りあひしを、あな嬉しや、波靜に明そむる品川の海岸はほの〴〵と紫紅の雲棚引渡りて、さし昇る初日の光。あれよ〳〵と老も若きもうちいで、、おろかむ。軒には半ほゝゑみ初し梅が枝に來て鳴友雀の聲も千代〳〵と聞なされ、年のみかは心さへあらたまりたらん樣覺ゐて、嬉しき限りなし。身つくろひして、仕ふまつる姬君の御例に侍り、追羽子手鞠つきなどの御相手して、一日をくらしつ、夜さり暇ありしかば女鑑を見る、十時おひけ。

二日。朝の程は心ゆかぬけしきなりしも、十時頃日影出てあきらかになりぬ。夕つかた故鄉より便あり、風烈しう吹く。おひけ十時半。年暮に賜はりし衣をたち、ぬひ初むるに、間もなく居れむりの催ほされければ、文子の君「君は新年早々より白河夜舟にていつこへ旅立にや」などだはふれ給ふ、いと耻かしや。

三日。日の出元日よりも麗はしう覺ゐぬ。朝より風烈しかりしも、

夕さり平らく。午後千葉師範學校に在す酒井ちう子の君より年始状給はる、早う見まほしけれど、御例に侍りける折なれば、袂に入置ぬ。九時三十分おびけ。まかる運しと文開きみるに、例の事さては學び舎の規則きびしきも、二日三日は外出ゆるされたれば籠の鳥の離されしごと、終日遊び暮しぬ。など、こま〳〵と示し越されしに、外出もかなはぬ身の羨しさ、はたなつかしさ限なし返事をかきつ、さて歌加留多の心かまへにと新古今歌を吟み合つゝ十一時半伏戸にいる。

四日。半鐘の音かしましきに夢破れて、こは驚き火事〳〵火事よといひつゝ窓おし開きて見れど、空くらく星のみきら〳〵と光りてさるけしきも見ゆれば、いぶかしき事かなと思ふもことはりや、今日は消防の出初式なりし。夜にいり歌かるたとの仰せに嬉しさ限なし。源平に別れ合戦を初む。北の方は上の句も誦しはてぬまにとらせ給ふに、心も心ならず、かの歌はこゝ、かの歌にかしことしたに思ひつゝありしも、今はみはずなりて淋しさは其色としもに鳴立澤をとり、見渡はに横立山をとりたがへたる、いと口惜しや。秋草を折らでは過し此度こそはと手をかくれば直子の君月草の花すり衣君が涙の露にぬるともといひつゝ持行たる、常には親き友も憎う覺はしが、おひけ十一時、目もいたつきたれば直ちに伏戸に入れと、なか〳〵にいれがたく、又燈つけて忘れがたき事どもしるしつ。

五日。天氣いとよし、今日も羽子づきの御相手す、朝の程女子の友師友長野悦子君のより消息ありたり。

六日。晴天。五時伏戸をいづ、海岸の明になるまゝに陸は霜白う置ゐて、寒さいはん方なく、朝の程初霰ふる「もの音に窓おしあけてながむれば今朝参らしき初あられかな」さて、國分操子先生新年の祝に參らせ給ふ。しばしが程しき島の道の事どもいろ〳〵諭し給はりぬ、嬉しさいはん方なし。夕つ方より寒さ少しゆるみて雨となる。夜に入り人々の明日は初節句なればとて七草を集め來り、はものにてうちたゝきつゝ聲高らかにふりいでゝ、何やらん歌ふ樣いとをかし、昔若菜摘となん云ひけんも今日ぞと老人のいふ。おひけ九時半。それより今夜初めて手習裁縫す。

七日。晴天風烈しう吹く。夜さり師の君より給はりし兼題或は折にふれたる腰折とも集めてかいつく。

二月分課題

歌

一日　野若菜

十五日　晨鶏

文

初めて鶯を聴く

若菜を送る

右投稿〆切期限は凡て發兌期日の十日前則一日分は本月二十日（但今回に限り廿三日）十五日分は二月五日迄とす

雜報

○宮中新年宴會

去る五日は宮中新年宴會の御當日なりしに付午前十一時より御在京各皇族、同妃各殿下御參內各妃殿下には先づ御內儀に於て　皇后陛下に御對顏、各殿下には御座所に於て　天皇陛下に御對顏あらせられ　陛下には　三宮式部長の奏請に依り各殿下、德大寺內大臣、田中宮內大臣、岡澤侍從武官長、各侍從、各侍從武官等を從へさせられ豐明殿に出御、此れより先き東溜、西溜の兩間に參候したる在京各伯子男爵並に宮內省高等官一同は通御の際拜謁仰付られ引續き別殿に於て酒饌を賜りたり斯くて　陛下には豐明殿の玉座に着御相成るや一同最敬禮を表したるに　陛下には左の御意味の勅語を賜りたり

朕新年ノ佳辰ニ當リ內外臣僚ト共ニ此宴ヲ偕ニスルヲ喜ブ

三宮式部長は外臣の爲め勅語を佛語に譯したるに桂首相は左の意味の奉答あり

新春ノ佳節ニ際シ本日此ノ酺宴ヲ賜リ且優渥ナル　勅語ヲ拜ス臣等恐懼激感ノ至リニ勝ヘズ臣僚一同ニ代リ謹ンデ聖壽ノ無疆ヲ祝シ奉ル

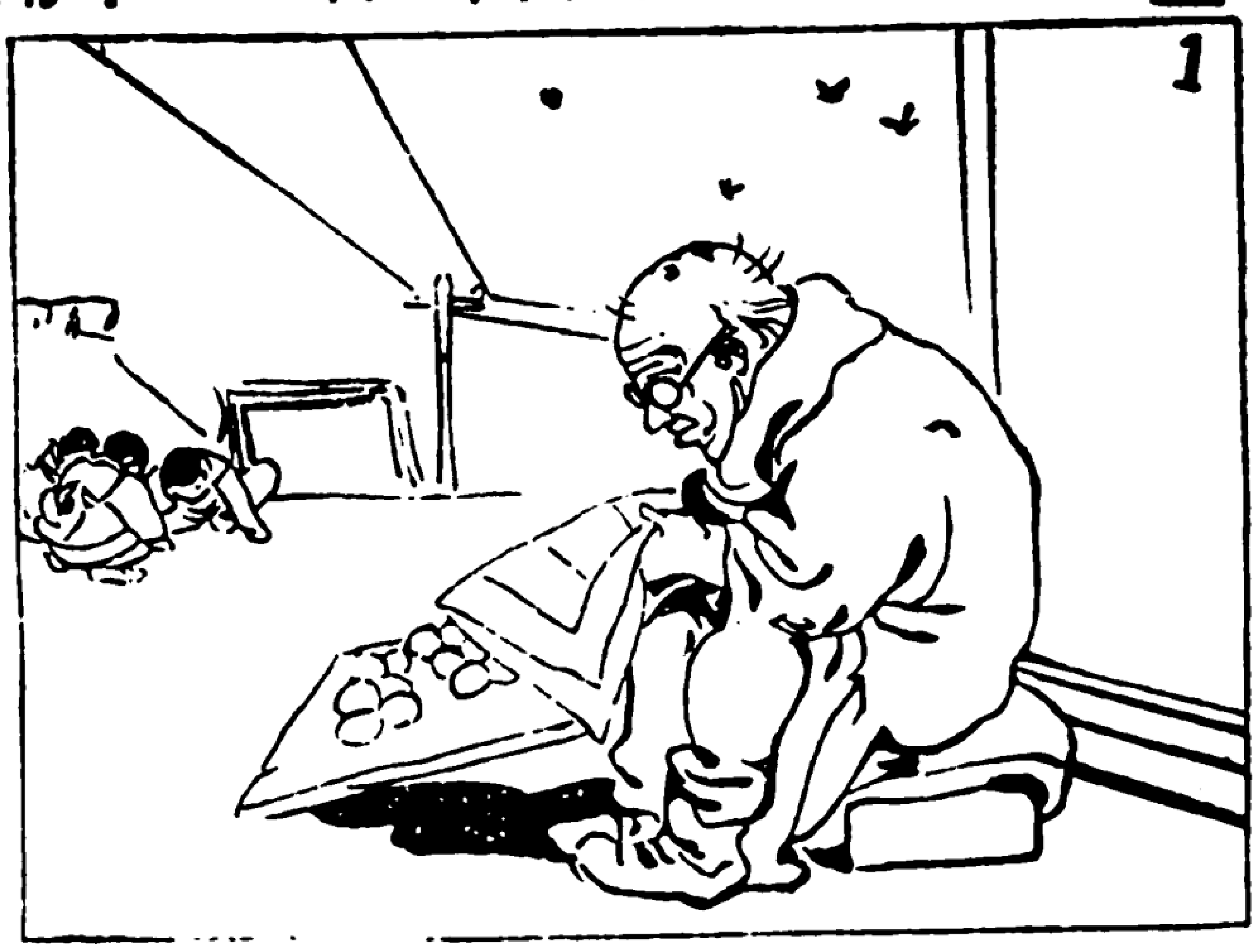
右終るや首席公使白耳義國特命全權公使アルベルダヌタン男は佛語を以て左の意味の奉答あり

外臣等一同本日ノ御宴ニ陪シ優渥ナル　勅語ヲ拜ス眞ニ感激ノ至リニ勝ヘズ茲ニ外臣一同ヲ代表シ恭シク　陛下ノ萬歲ヲ祝シ併セテ　皇室ノ御繁榮ヲ祈リ奉ル

三宮式部長は更に公使の奉答を意譯言上し奉りたるに　天顔斜ならず麗しかりし由し陛下には玉盞を擧げさせられ各皇族、各公使等に暫時御餠を賜り同零時五十分各皇族各宮内官扈從一入御相成り一同は同一時過ぎ退下したりと云ふ。

○宮中御内宴　皇后陛下には五日の佳辰をトし閑院宮妃智惠子、小松若宮妃周子、華頂宮妃經子、山階宮妃常子、梨本宮妃伊都子各殿下を宮中御内儀に召させられ午後二時より御内宴を開かせられたり。

○葉山の御宴　皇太子同妃兩殿下には五日正午葉山御用邸に於て新年の御宴を開かせられ齋藤大夫、木戸侍從長、木村武官長、本居三島兩侍講三田侍醫を始め正親町吉見各女官を召され御陪宴被仰付たる由。



○皇后陛下の御仁慈　皇后陛下の御仁慈に渡らせらるゝ御事は今更ら申すも畏きことながら　陛下には頃日の寒氣に世にも哀れなる者の上の思召され此の程東京慈惠醫院赤十字社、大學各病院、福田會、孤兒院等へ在院患者及び孤兒の數を取調べ差出すべき旨香川皇后宮太夫を經て御沙汰ありし由右は此等の者に對し衣類等の御下賜あらせらるべき御思召なるやに承る。

○幼稚園生徒を召さる　沼津に御滯在中の迪宮敦宮兩殿下はいと御健康に御迎年遊ばされ元旦には同地の幼稚園生徒を召され新年の拜賀を受けさせられたり町長　校長　及び郡視學等附添にて七十七名の幼

生を引連れ參邸せしに兩殿下には御滿悦の御氣色にて幼兒の群に入らせられて手を打せられ卅分間程は御餘念もなき樣に見受け奉りぬ幼生退出の折は一同へ御菓子を賜りたり。

去る六日午前十時宮中鳳凰の間にて御講書始を行はせられ左の進講ある筈なりと

一西班牙國フェルヂナンド及びイサベラ女王朝庭の歷史(コロンブスの請願)

文事秘書官長男爵　細川潤次郎

一古事記上卷(伊邪那岐命得三貴子之條)

東宮侍講　本居　豊頴

一中庸(首章三節)

女子高等師範學校敎授　南摩　綱紀

○東京府女子敎育會　東京府女子敎育會にては來る十八日より毎日曜日三時間づゝ兒童心理(高等師範學校敎授文學士松本孝次郎)料理法(女子大學講師赤松釜吉同菊子)二科の講習をなす卒業期は三ヶ月間なりと云ふ

○賞賜　本年の政治始に當り東京府知事より左の通り賞賜ありたり

北豐島郡尾久村大字上尾久

齋藤清吉母　齋藤　以殷

資性温良齋藤紋次郎に嫁し家素貧困夫を扶て耒耜に服す後夫不治の病に罹り益貧困に陷るも毫も屈撓せず看護の傍ら幼孩を撫し晝は賃役に雇はれ夜は草鞋を作り或は田螺を拾ひ草を摘む等勞動萬狀備に難楚を嘗め衣食を節して湯藥甘旨を侑め慰藉到らざるなきも遂に起たず追悼甚だ切なり又姑齡八十を超え眼疾を患ふるも其賴る處なきを歎き迎て之に孝事し又能く子女を訓育し一家を保持すること十有餘年一日の如し鄕閭其至行を稱す洵に奇特とす依て其賞として金八圓を下賜候事

東京市小石川區小日向清水谷町

鍬形勝藏

資性温良幼にして父を喪ひ家道衰退母子離散す出て、商家に傭はれ一意家名の興復に志し轉傭して恪勤す不幸にして主家破産解傭せらる意を決して僅少の資に頼り市内に行商し刻苦精勵遂に家を興し母を迎て孝養を盡し承歡怠らず其病に罹るや日夜病床に侍し自ら汚穢を滌き藥餌甘旨奉養懇に到る洵に奇特とす依て其賞として木杯一組下賜候事

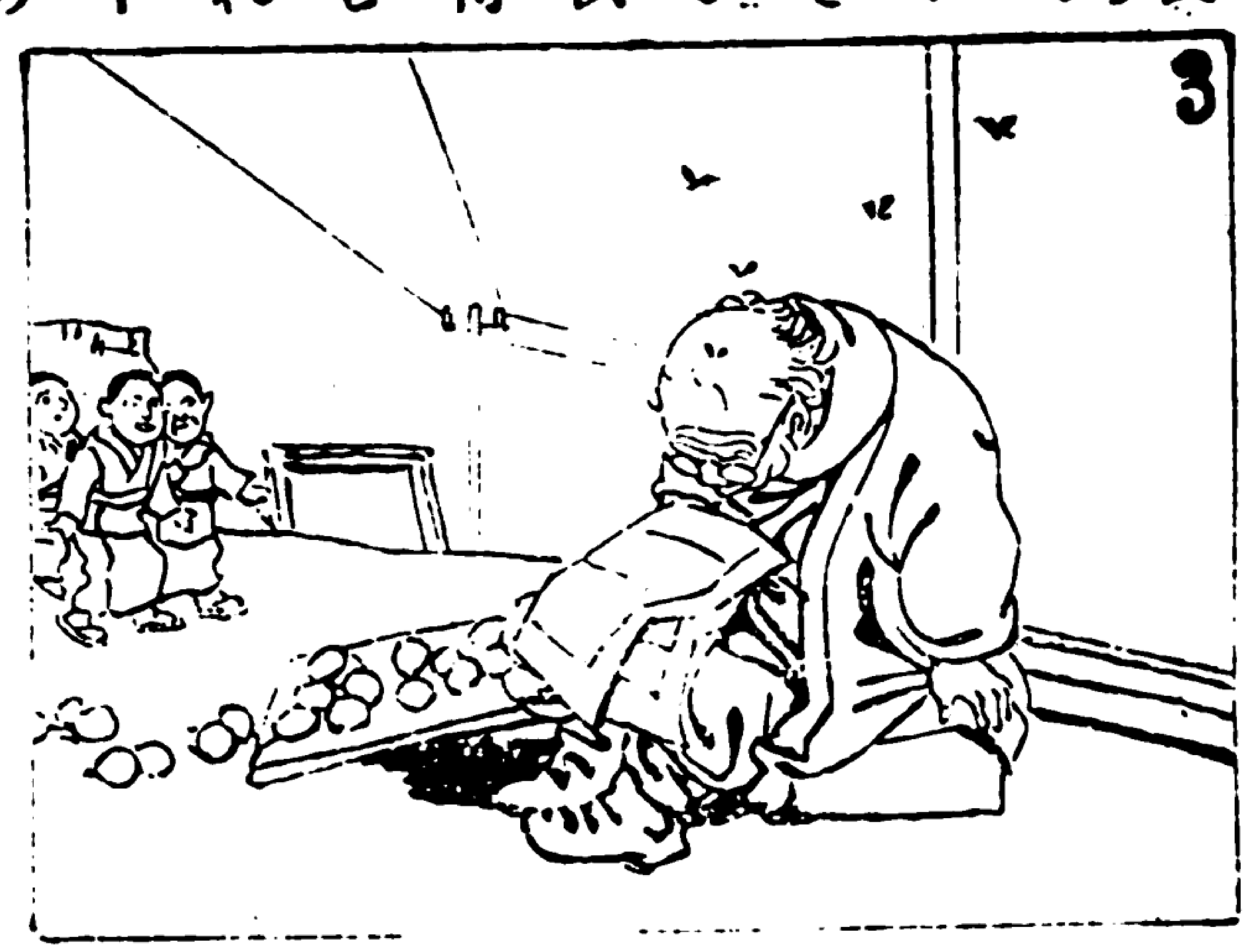


○孝子鍬形勝藏　めでたき御代の數ならじ小石川小日向清水谷町二番地に鍬形勝藏(四十)と云へる鰹節商あり父は德川家の士にして鍬形安造と呼び幕府の光り消えやらぬ頃迄は世に時めきて暮せしかば其妻ギンとの間に產れし一粒種の勝藏も浮世の辛さは露知らで過ごせしに慶應元年の秋安造は一葉と倶に果敢くなりぬギンの歎きは例ふるに物なく當時三歳なる子を抱へて行末の事も覺束なさに其後の朝夕を涙にばかり送る中明治となりて一家の樣は昔に變りつ貧は漸く加はるを勝藏八歳の幼心にも深く悲み一日母の前に手を仕へ侍の家には生れしものから最早此先武士町人の區別もあるまじければ此際商家へ丁稚奉公してなりと身を立て、家名の斷たぬ樣致さんと歳には健氣なる詞に母は答すら得せず親子が幸なき身に泣きしがさて外に何と詮術もあらざれば世話する人のある儘に本所押上なる皮商

大庄方へ愛子を手離し初奉公にぞ遣はしける、母は跡に唯一人一家を張るも重荷なればと伊達侯の鷹匠たりし小林久造の許へ巳む方もなく再縁して勝藏の成人を待暮らしけるに大庄は商の手違より間もなく分散しけるにぞ勝造は傳手を求めて小石川小日向三軒町一番地の質商平長兵衛方へ奉公替せしは十一歳の折なりき、末は斯うよと大いなる志しを懐ける者は十年の年期首尾よう勤上げて禮奉公の一年も濟ませ廿一歳にて暇を取りしが永の間蔭日向なく働きし褒美にとて金子十圓主人より與へられしかば早速同區大塚窪町十七番地に小かなる家を借りて母を小林方より呼戻し十圓を資本にして鰹節の行商を始めつゝ駒込の市塲などに多くの客を求めたるが暗きより出でゝ夜半に戻る我子の出精に勵まされて母は土釜に炊く飯の足なきをも親子一つに暮す嬉さに力の限り手助なして日に月に貯蓄を積みたる心の程の何爲空にある可き十年の後に清水谷町に鰹節の店を新築して終に今日の繁昌を見るに至りしは實に有難き親子といふべし、勝藏は斯く一軒の主人となりても尚浮きたる事をせず去卅年中水戸市大工町廿一番地菊地勇吉の長女ミノ(三十)を娶りて仲睦しくセイといへる今年三歳の娘さへ擧げたるが一昨年二月十一日より病床に臥したる母を看護する其の赤誠類なく醫藥は云ふに及ばず神佛に祈誓を掛け寒中水垢離を取るなど有らゆる手段を盡して去九月廿六日終に逝る其日まで晝夜衣帶を解かぬまでの孝心には感ぜぬ者とてなく芳野世經氏の母堂繼子は爲に山陽の書ある扇面を贈り伊達侯はまた小林の縁にて斯くと知り直ちに金二千匹を贈りたるが勝藏が貧きに居らずして此の孝に身を忘れし珍らしの行狀は何時か其筋に聞えて前

項の如く東京府より褒賞の沙汰ありたるなりとぞ（二六新聞）

○貞婦齋藤以農　社員は本年の政治始に東京府知事より賞金八圓を與へられたる貞婦齋藤以農（三十八）を北豊島郡尾久村字上尾久小字山谷の自宅に訪れたるに生憎本人は所用ありて千住町に赴きたる不在中にて家には眼疾を患らひ耳聾したる姑そめ（六十八）といの丶小供等計りありしかば隣家を叩きて聞得たる處により同人の平生を紹介せむにいのは千住在花又村の農家に生れ妙齢になりて世話する人のありて千住在島根村の形附某方へ縁附きむめ（十九）清五郎（十七）の二人の子まで設けたれど夫に死別れ實家へ戻り居たるに一方にいの丶其後の夫齋藤紋次郎は尾久村に實父重五郎實母そめ（八十六）長男清四郎と紋次郎の弟要助を控へて農業を營み居るより自分は東京に出で湯屋の三助米搗杯と渡り歩き居たるが兄の清四郎は放蕩者にて身性の正しからぬ女を引入れて女房として到底家の跡を取らすべき身込なしとて兩親と要助は別家したるが父重五郎も取る年波に老衰し餘命少なく感ぜられたるより今より十二三年前紋次郎を呼戻して跡目を取らす事となり山谷の自宅を讓りて自分等は別居したる上前記の以農を先夫の子清五郎（十七）諸共貰受けたるは紋次郎卅二以農廿二の春なりしが父重五郎は間もなく病死し紋次郎も持崩したる身體の兎角に農事を厭ふ模様なりしが其翌年以農と



の間に長女たけ（十六）を設けてより稍稼氣を出して働かん意氣込み出したる矢先好事魔多く家を出で、飛廻り居る内受けたるものと見え梅毒症にて手足の利かざる身となりて食事其他は常人に變りなけれど一向に仕事の出來ざる身にて死する迄十年間いの、手一つに一家を繰廻はしたる事とていの、困難は一方ならず紋次郎が發病の年田畝五畝計を隣家の鈴木菊次郎に賣却したれどそれさへ間もなく使盡し其翌年は我住家を些かの金にて東京の或湯屋に焚物に賣渡す程の必迫を極め其後は以前自宅の厩なりし藁吹小屋に疊四枚を敷きて生活を立つる始末にて今尚ほ以農等の住居し居れるを目擊したる記者は其屋作りの低き周圍といひ屋根といひ漸く藁にて圍みたりといふばかりなる有樣にて此中にも人が住むかと吃驚したる程の處に移りたるが紋次郎は手足の充分利かず仕事の出來ざるとはいへ食事其他に變りなく一昨年十二月遂に死亡したる迄にはたけの外とめ（十二）ちゑ（九つ）重五郎（五つ）其他二人（此二人は死亡す）さへ設けたれば以農の手一つに中々に一同の露命を繫ぎかねたれど渡る世間に鬼はなく村中の人々も氣の毒がり以農を小供つきにて日雇に雇ひて定めたる賃錢を與へたる外以農等の食事病人の紋次郎の食物迄贈りやる人も出來りて辛らくも今日迄過し來れる其間の困難は語る人さへ言語に盡されずといふ程にて疊四疊の其上にて一方に病人はあり其内にていの、産の紐をときたる時抔は近隣の人々も中々に一方ならぬ盡力ありしがいのは紋次郎の十年間の長病に倦まず撓まず小供等を引受け看病し一昨年暮紋次郎の身まかりたる後は紋次郎の弟要助と別家したる姑のそめを要助の病氣となりたるより引取りて昨年九月同人の病死したる後も姑

の孝養怠りなければ扨こそ此度の恩賞ありたる次第なりと(報知新聞)

○横井玉子女史逝く　本郷弓町なる女子美術學校に舍監として久しく校務を掌りし横井玉子女史は曩に胃癌を患ひ豫て親交ある佐藤博士夫妻に迎へられて順天堂病院に治療中なりしが藥石効なくして去る四日午後七時半遂に不歸の客となりぬ女史は熊本支藩高瀬家の家老原氏の女にして明治五年故横井小楠先生の義子時治氏に嫁し年廿一にして良人を喪ひ爾來女子教育に一身を委ねて築地新榮女學校の教授を勤め後同校の櫻井女學校と合併して女子學院となるや寄宿舍監督及び禮式裁縫割烹等の教授を擔當し一昨年四月に至りて女子美術學校に入りしに資性極めて謙讓なりしかば他の教師及び生徒にも敬愛せられ成績頗る擧りしとぞ享年四十八同十一日校葬を以て天王寺畔なる時治氏の墓側に葬りたり。



○三組睦まじき家庭　家庭の浪は穏かに春の笑顔を寫し出す目出度き一家と云ふは府下荏原郡目黑村中目黑に住む農夫林　權藏(九十七)とて妻お秀(九十六)との二人の中に長男權太郎(七十九)妻お榮(七十一)夫婦を始め次男宗藏(七十六)妻お粂(六十五)と云ふ一家三夫婦ともに中睦まじく互に忠々しく立働き殊に權藏は九十七歲と云ふ高齢なるにも拘らず毎朝星を戴いて農業に従事する程なれば長男次男も之に劣らず鋤鍬とりて骨を惜まず父の仕事を迭に助け兄嫁弟嫁は何れも

家に留守居して孝養を怠るなく又樣太郎の長男秀吉(三十)は別家して一家を構へ宗藏の長女お定(二十)と云ふは是又夫を迎へて同村内に分家し互に睦み親しみて和氣靄々たる其中に太平の春を迎へたりとは世にも目出度き家庭にこそ。

○技藝力食婦人會　兵庫縣姫路市に於ては技藝力食婦人會といふを組織し大塚市長並に明治幼稚園主中田たか子等大に盡力し愈々組織の運びに至りたるを以てこれより會員を募集し本月中には發會式を舉行する筈なりと同會の趣意書並に規則は左の如し

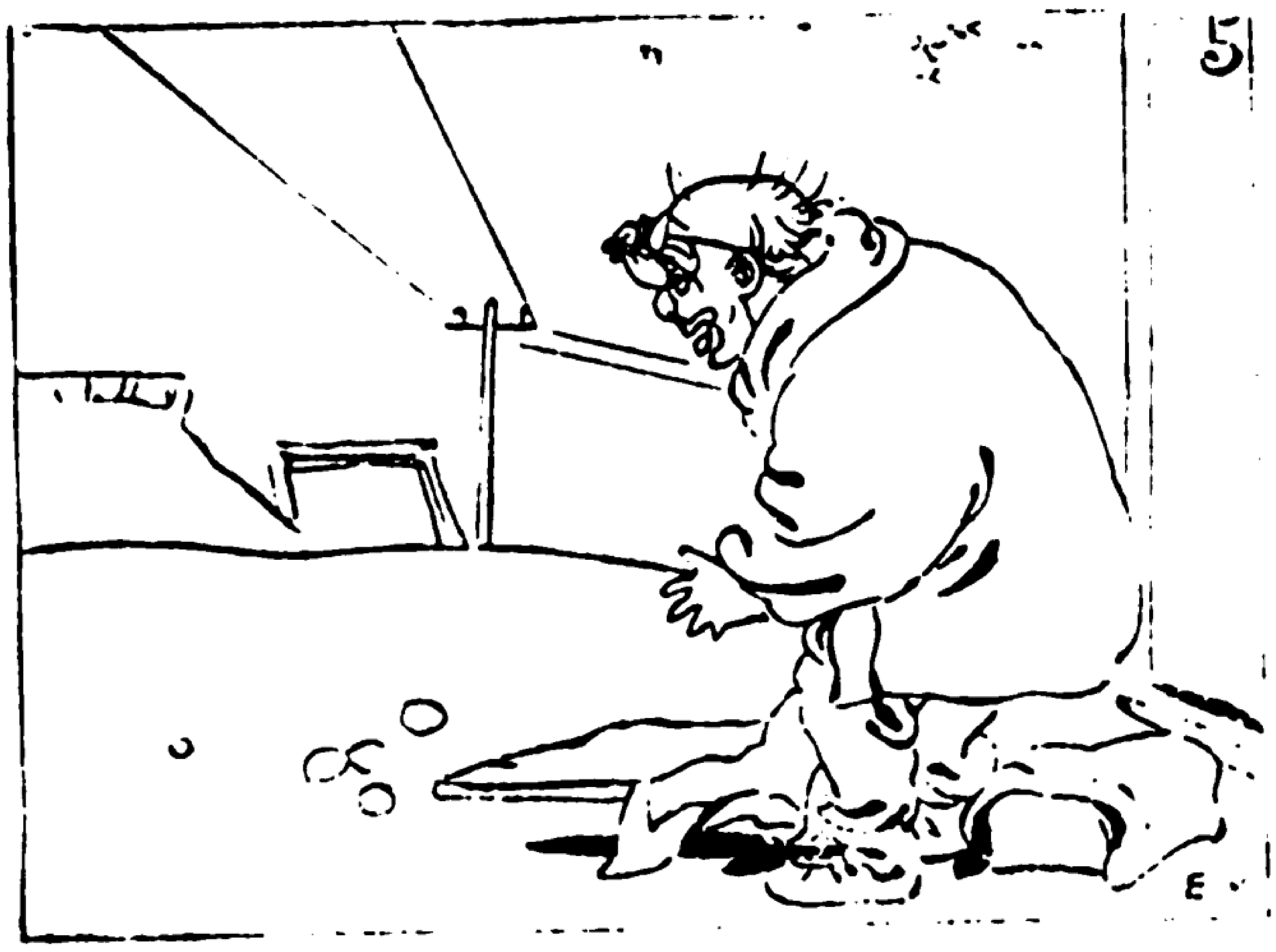
我國の女子は昔よりの習慣にて男子の扶助によりてのみ生活し己れ獨りにては生活すること能はざるもの丶如く見做されたるは誠に女子の腑甲斐なきに依るものあれば之れが惡習慣を改め女子には女子丈の獨立精神を發輝してせめては己れの身に要する櫛笄の料又は世の憐れなる窮乏のものを惠み又慈善の團體に出す資など一々父兄若くは夫の所得に依頼して其心配をかくることなく己れの力にて爲すことを得る樣なさん事之れ吾々の務ならんと思へるまゝかくは姫路技藝力食婦人會を起せる所以なれば世の貴婦人令孃達熱き同情をもて贊成せられん事を希ふ

第一條　本會は婦女子獨立の精神を發揮し自已の力を以て慈善其他公共の資を得るの目的を有するものを以て組織す▲第二條　本會は姫路技藝力食婦人會と稱し姫路市十二所前廿五番邸に置く▲第三條　本會に加はらんとするものは尊卑貧富に不拘品行端正にして第一條の目的を有するものに限り入會を承諾す▲第四條　本會の技藝は左の如し一和洋裁縫二和洋料理の仕法三造花の稽古▲第五條　本會に加はるものは年齢十五歳以上六十歳以下とす▲第六條　本會は本市若くは其他の商業會議所又は商業組合の依托により商品の裁縫を爲すことあり此場合には會員は各其の事を分担するものとす▲第七條　會員の親睦を圖り且つ婦女子に必要なる談話を爲すため毎月一回本會に例會を開くものとす

○グランド夫人逝く

故グランド將軍未亡人ユリシス、エス、グランド夫人は客臘十四日華盛頓の住宅に於て長逝したり夫人は故將軍と共に曾て本邦に來遊したることあり米國セントルイズの出、故將軍に嫁したるは芳紀二十一歳の時にして將軍の墨西哥國境の亂に偉功を奏して大尉に昇進したる時、後ち邊陬守隊の任に飽き相携へて故國に歸り干戈を捨てゝ父祖の地を耕作すること爰に年あり南北戰爭の始まるに及びて更らに兵器を執て起つや夫人は其子女を督して絶えず戰線間近く來りつぶさに恤兵の事に從ふ、大統領夫人としてホワイトハウスに在る亦手に掃除のことを放たず温懷勤勉夫業を幇助して一日もかはることなかりき、將軍の死後は同國會の年々支給せる五千弗の恩給金を以て專ら子女の教養に志し努めて社交場裏に出づるを避けしかば夫人の晩年多く世に知られざりしも同國の婦人界は永く其高風を慕ふて婦人の事業婦人團體の名義者としてたえず夫人の名を戴くを以て光榮としたり、享年六十七歳にして三男一女を殘しぬ。

5



婦人よ善ならんと求めよ大ならんと求むる勿れ婦人の美德は謙遜に在り

（リツトルトン）

財寶の滿ちたる婦人ほど鼻持のならぬものはなし

（ジユヴエナル）

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

東京株式會社國光社發兌

嬢さん方お待ちかねの

少女讀本

雪の卷が出來ました



堀内新泉著 ◎ 壹冊定價拾八錢郵稅四錢

花の卷に對する批評

◎毎日新聞評　堀内新泉子の雅馴の筆に成れる家庭讀本にして、最も面白く、且つ有益の冊子なり、目次花の宴、ゆき姫、野末の露、たま椿、やま吹、ぬひはり等なり

◎萬朝報評　まじめな所があつて先づ／＼善い讀本と云はねばならぬ。

◎婦女新聞評　家庭小說を以て一旗幟を立つる堀内新泉子の著にして十三四の少女に讀ましむるため純潔なる短篇小說數種を集めたるものなり面白くをかしくまた哀れに悲しき間に教訓的意味を含ませて娘たり妻たり母たるものゝ心得を說きたれば家庭の讀本として最上のものならん續いて出づべき月の卷雪の卷こそ待遠しけれ

◎教育時論評　家庭向の著書、花の宴、ゆき姫、野末の露、たま椿、やま吹、ぬひはり等の諸篇あり、家庭教育の一助とすべし

◎中央公論評　家庭讀本老人讀本を著はしたる氏は又少女讀本を著せり、アドヶ無き物語中自然に教訓を含む家庭の讀物として最も珍重すべし

◎東京日々新聞評　家庭讀本をあらはして以來、常に斯かる著を公にして、世の好評をほしいまゝにせし老人讀本に續いて、今又この著をなす、趣味の淺源は暫くこゝに言はず、吾人はたゞその年少女子を害すなきを喜ぶ。

◎國民新聞評　花の宴、ゆき姫、野末の露、たま椿、やま吹、ぬひはり等、既に少女らしき名題にして、著者亦た夙に此種の書に經驗あり、且つ成功したるに近し、夏の浴場、避暑の山、少女の調度の中に收めらるゝは、またなく應しかるべし。

◎閨文學評　花の宴、ゆき姫、野末の露、玉椿、山吹、ぬひはり、の六篇を輯めて、一冊としたもの、皆純れも教訓の意を寓して最も、少女に適するやうな誠に罪の無い物語である。讀み終つた跡に、淸らかな和氣纒々たる家庭の面影が、髣髴として、目前にあらはるゝやうな心地がする。吾人は、誠に、著者の『家庭讀本』を讀みて、その筆の、斯の種の著作に甚だ適するものあるを見たが、本書を讀みて、なほその然るものあるを認める。著者の、美はしき性格が、おのづと筆の上に現はれるものであらう。

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

藤野天城著

女子小觀

新刊

壹部定價二十錢
郵税金四錢

著者一種犀利の筆を以て、女性を觀察し、解剖して、縱横自在に之を論斷するや、恰もエックス光線を以て、明々地他の腹中を窺ふが如し。可憐の小女は之に依り、慰諭を得て欣々自得すべく、墮落淫靡浮萍の如く斷蓬の如き妖婦淫婦の徒に至つては、惴々焉恐れ且つ自ら戒めざるを得ざるべし。加ふるに文章流麗にして、詞藻湧くが如くなるを以て、讀了の間興味吻を突いて出で、全文を卒讀せずんば已む能はざるなり。

發行所
東京築地
株式會社 國光社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

少年のよみもの

少年 武士道史傳

全部八冊

菊版美本 壹冊各金拾九錢宛

◎第一篇 既刊 山中鹿之助　文學士大町桂月著　飯沼珠城畫

◎第二篇 既刊 上杉謙信　文學士三好物外著　飯沼珠城畫

◎第三篇 新刊 本多平八　文學士笹川臨風著　飯沼珠城畫

◎第四篇 既刊 小早川隆景　田岡嶺雲著　小堀鞆音畫

◎第五篇 新刊 立花宗茂　文學士白河鯉洋著

◎第六篇 木村重成　法學士太田蒼溟著

◎第七篇 山鹿素行　國府犀東著

◎第八篇 大石良雄　文學士中内蝶二著

東京築地株式會社國光社發行

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

和軒梅澤精一著

清少納言と紫式部

四六判
紙數三百頁
定價三十五錢
郵税六錢

本書は著者が精研細閲の餘に成りし者なり清女の傳記に於いて歌仙元輔が交際の範圍に因つて清女が宮仕の動機を論じ中關白派と御堂關白派との勢力の消長よりして椒房の光景を叙し美的皇后を描き李義山を論じ枕草子の文章をば内外二方面より觀察し最後に歌人としての清女に及び又後者にありても父が交際範圍夫の逝去等より紫女が宮仕源語製作の動機に及び往生要集によりて時代精神を陳べ天臺宗と源語との關係に及び紫女が人生觀女性觀を叙し又小説としての源語を評し兼ねて古今東西の源語論を批判し最後にダンテが神劇と紫女が源語とを比較せり製本高雅、考證正確文學的哲學的眼光を以て當代の宗教と文學とを品隲せる者也所論斬新文章宏麗王朝文學の代表的製作と人物とに關する幾多の疑團は本書に於いて殆んど遺憾なく解決せられたるに近し大方の士女幸に一本を座右に備へて研鑽娯樂の資料とせよ

發行所
東京々橋區築地二丁目廿一番地
株式會社 國光社

塚原澁柿著　小堀鞆音鏑木清方畫

小牧合戰

新刊

菊版洋裝

口繪入美本

豐太閤を龍に譬ふれば東照公は以て虎に比すべし、龍吟ずれば雲起り、虎嘯けば風生ず、小牧山の大合戰は此の獰龍猛虎の拏攫なり、山岳震撼して波濤洶湧せるの壯觀は決して他人の能く萬分が一をも寫し得る所にあらず。塚原澁柿先生學問該博にして最も近古の戰史に精しく豐臣德川兩公の事蹟に深く意を注ぎ闡幽微顯の功一にして足らず、此書の如き前古未發の秘密を探索し以て正史の遺漏を補ふ、特に長久手の大殺を以て其原因嬋娟たる一位の美人にありとせる如き實に奇想天外より來れるものと謂ふべし、且其口繪は目下歷史書界の泰斗と仰がるゝ小堀鞆音氏揷畫は同鏑木清方氏の筆になるもの、文章と相須て英雄美人の眞面目を發揮せり。

發兌元　東京築地二丁目　株式會社　國光社

明治卅六年女鑑敎の庭 歌文月並兼題廣告

選者

◉歌 樞密顧問官正三位子爵 黑田清綱先生

◉文 華族女學校敎授 井上頼圀先生

月	日	歌	文
一月	一日	寄海祝	元日書感
	廿日	富嶽	松の内日記
二月	一日	野若菜	初めて鶯を聽く
	十五日	晨鷄	若菜を送る
三月	一日	柳間鶯	春日古都を過ぐ
	十五日	春雨	音樂會の記

投稿〆切期限は總て發兌期日の十日前、則一日分は前月の二十日、十五日分は其月五日とす

投稿心得

○兼題歌文は、女子は、何人にても隨意投稿することを得。

○投稿用紙は半紙(歌は半截文は全紙二つ折)の事。

○歌は題毎に用紙を別にし、一題には、一人一首若しくは二首を限りとす。上句の中に、二音の漢字を一字入れ、其の他は、悉く、平假名若しくは、一音の漢字にて認むべし。

○文は、毎行字數を一定し、且、句讀點を施すべし。

○右歌文とも、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて、個々に離して、分明に認め、住所姓名は、題目の下に明記すべし。

○投稿宛名は、國光社女鑑編輯局とすべし。

○總て書式に、違ひたるもの、及び、期日に後るゝものは採らず。

○投稿題文中、天地人を撰び、天には壹圓、地には五十錢、人には三拾錢以下の書籍を贈呈す

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

塚原澁柿著　飯沼珠城畫

山崎合戰

菊版　洋装美本

定價金參拾九錢

郵税金　六錢

毛利征伐、高松水攻、中國引返、山崎大合戰、是れ我神州空前絶後の英雄豐臣秀吉があらん限りの智惠と力とを振ひし花も實もある大戰爭なり。之を例の戰闘小說に獨特の妙ある塚原澁柿先生が江戸紫の粹且つ高尚にして押出よく、色も艶も古今獨歩の彩筆を執て叙述されたるものなれば、猿面重瞳の羽柴筑前、虎鬚狼顧の惟任將軍を始め敵には吉川小早川齋藤四王天味方には堀尾蜂須賀加藤木村の豪傑ども入り代り立代り眼前に來て各自得意の技倆を演ずるが如く、雲漠々、雷殷々、砲火閃き、劍光迸る。舞臺一轉すれば衣冠束帶の豐臣秀吉悠然として現れ來る、實に是れ山崎大合戰のパノラマ、大德寺燒香場の活動寫眞。

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

（電話新橋特八八番）
（電話新橋二六九三番）

發兌元　株式會社　國光社

新刊廣告

文學士白河鯉洋著飯沼珠城書

立花宗茂

菊版美本
定價十九錢
郵稅四錢

文祿二年正月廿六日朝鮮國碧蹄館の大快戰に於ける立花宗茂の働きは實に天魔破旬も面を向くべき樣なく、遂に大明五十萬の大軍を衝崩したるもの、實に宗茂一條鎗の力と謂はざるべからず、本書は廣く舊記實錄に據りて該役の顛末を詳記し、且宗茂が老後までの言行を細叙したれば、豐太閤東に本多平八あり西に立花左近ありと賞讃せし武士道の眞髓を得たる英雄の面目紙上に躍如たり、

東京京橋區築地二丁目二十一番地
株式會社 國光社

發兌元

明治三十六年一月二十日發行

太陽
每月二回一日十五日發行
第拾參年第貳號

明治廿五年三月十二日
第三種郵便物認可

二八水は
肌を白くきめをよくし●●にきび●あせも●ひゞ●すべて肌のあれおしろい下に用ゐて尤もよし

又芳香馥郁として貴孃紳士の愛すべき佳品なり（中瓶一本十五錢）





花王石鹸

◉品質ノ善良ト衞生ニ經濟ヲ旨トシテ製煉シ洽ク好評ヲ博シタル佳品ナリ

發賣本舖
東京日本橋區馬喰町二丁目
長瀬富郎
（電話特浪花九二三）

…貳丁目株式會社國光社